

館淳一ホームページ、ダウンロード用pdf原稿

『兄と妹・犯された蜜獣』

捧ぐ
貴重な告白によってこの本の核を与えてくれたわが友 K・Hに

兄と妹 犯された蜜獣

第一章 いとこ同士

1

従兄の圭が事故で死んだ。

高校二年生だった黒須悠は、その日のことをずっと後になってもよく思い出すことができた。悲報がもたらされる直前、彼はある忘れがたい出来事を体験していたからだ。

長梅雨のさなか、ふいに青空が広がって、目の眩むように強い夏の日差しが浴びせられた日のことだった。

風はそよとも吹かず、湿った空気はねっとりとし重苦しく、動かずにもじわつと汗が吹き出るような午後、悠が学校から帰ると、広い家のなかにはシンと静まりかえっていた。

その時間はいつも、妹はピアノの教室に出かけている。弟は中学校のクラブ活動かなにかで、この頃はいつも帰りが遅い。

(ママも出かけているのかな……?)

母親の美夏絵は、半年前に夫がアメリカのM 大に客員教授として招かれ、単身渡米して以来、とみに暇をもてあまし気味だ。最近是有閑夫人たちが集まるサークルに入って家を空けることが多い。

しかし、玄関には母親の藤色のハイヒールがあった。よそゆきの靴である。ホールには彼女が愛用している香水 ジャン・パトウの“ミル” の官能的な残り香が漂っていた。

(ふうん。どこかに出かけて、帰ってきたところなんだ……)

例によって社交的な集まりに出かけてきたのだらうと、息子は見当をつけた。だからといって批判するわけではない。逆に彼は、まだ瑞々しさを失わない母親が美しく装って出かけるときの、あでやかな姿を

見るのが好きだった。

喉が乾いていた。靴は階段の昇り口に投げだしたまま、悠はまっすぐキッチンに向かった。母の姿は居間にもキッチンにもない。

(じゃ、自分の部屋にいるんだ……)

あるいは外出の疲れで、午睡しているのかもしれない。そんなけだるさが満ちている、もの憂い午後だったから。

悠の家は五人家族だ。主はT 大理工学部教授の黒須柊二。目黒の奥にある高級住宅街の一角に、広い庭のある近代的な邸宅をかまえ、妻の美夏絵とのあいだには、高校二年の悠、中学二年の浩、小学校六年の美咲、がいる。

子供たちにはそれぞれ、二階の個室があたえられていた。夫婦の寝室は一階のいちばん西側だが、現在はダブルベッドを美夏絵がひとりで使っている。これは夫の柊二が望んだことだ。工学博士・黒須柊二は、レーザー工学の専門家として内外に名を知られた学者で、ふだんは東京郊外にある大学の研究所で、寝泊りしながら研究に没頭している。また学会などで出張することも多く、めったに家に帰る暇がない。たまに家に帰っても、資料や文献がうず高く積みあげられた書斎に籠って論文原稿の執筆にうちこむ。眠くなると、机の横に置いたベッドで眠る という、不規則な生活をずっと続けている。

彼のそういった研究優先の習慣は、悠がもの心ついた頃からのものだ。事実上、夫婦はひとつ屋根の下で閨房を別にして長いこと暮らしていることになる。

(おやじとママは、あんなふうになんかに寝ていて、セックスはどうしているんだろう?)

悠が夫婦の営みという事柄を理解する年頃になると、疑問に思うことがないでもない。しかし子供というものはふつつ、両親の性生活を想像しにくいものだ。ましてや悠の父はいかにも学究の徒らしく額が秀で、度の強い眼鏡をかけ、気難しい風貌をしている。そんな父が、いつか友人に見せられたポルノ写真のなかの男のように、母を組み敷いて交わっている姿を想像することは、悠にはとうてい不可能なことだった。

とはいえ母親の美夏絵は、四十二歳という年齢だが、女ざかりの豊熟したエロティシズムを発散している魅力的な“女”なのである。だ

から悠は、どうしても母の傍にいと、胸が息苦しくなるような昂まりを覚えて仕方がないときがある。とくに最近は……。

キッチンで冷えたコーラを飲み、ようやく人心地ついた気持ちで居間に戻った。庭のテラスに面した窓は開けはなたれていた。縁先に立つて、悠は庭を眺めまわした。

黒須家の庭には隣家との境界に沿って、珊瑚樹が植え込まれている。

この庭木はどういうものか害虫がつきやすく、うつかりしていると葉を丸坊主にされてしまう。時どき、駆除のための薬剤を散布するのが悠に課せられた仕事だった。

(今年は、虫はついているかな……)

悠はサンダルをつっかけ庭に出て、植木の葉を調べてみた。どうやらだいじょうぶらしい。家の裏手 西側にもまわってみた。日照のせい、そのあたりが一番被害が多いのだ。(……!?)

ふいに悠は足をとめた。ギクツとして耳をそばだてた。誰かが嚙り泣いているような、喘ぐような、

「う、くくつ……」

という声が聞こえた気がしたからだ。

(なんだろう……?)

悠がいたのは、母親の寢室の外側で、そこには出窓が彼の頭の高さに張り出している。観音びらきの窓は開けはなたれていたが、午後も遅い時間の空気は湿気を含んで粘りつくように澱み、西日を避けるためにひかれたレースのカーテンはだらりと動かない。

そしてあきらかに、嗚咽するような、あるいは瀕死の病人が空気を求めて喘ぐような声は、そのカーテンの隙間から洩れてくる。

(ママが、泣いている……?)

寢室のなかにいるのは悠の母、美夏絵以外に考えられない。

(どうしたんだろう……?)

それにしても、たんなる嚙り泣きではない。苦痛を訴えるような、こらえるような呻き声にも聞こえる。悠は母が急な病いに襲われて苦しみ悶えているのかとも思った。

「あつ、はあつ……。う、む……」

しかし十七歳の息子は、母の呻きと喘ぎの奥に、なにか官能的なものがあつ、はあつ……。う、む……。でなければ、背伸び

して寢室の出窓からなかを見るとき、どうしてあんなにおそろおそろ、そつつとカーテンの隙間から覗き見たのだから？　まるで泥棒が、忍び込もうとする家の内部を窺うときのよう……。　

室内は、レースのカーテン越しに西日が射しこんで、充分に明るかった。そして、出窓からは部屋の中央に置かれたベッドがよく見えた。

母親の美夏絵は、ベッドカバーもそのままの寢台の上に仰臥していた。グラマラスな肉体を覆っているのは、ライラック色のスリッパだけだった。

ベッドの傍の椅子には、淡い藤色のサマードレスとベージュグレーのパンティストッキング、それにスリッパと同じ紅藤色のブラジャーが脱ぎかけられている。外出から帰ってよそ行きの服を脱ぎ捨てたところだったにちがいない。

(……………！)

悠は息の呑んだ。

光沢のあるナイロンスリッパ一枚を肌にとわりつかせた母親の姿は、あまりにも悩ましく蠱惑的だった。高校二年の少年の欲望を刺激するに充分なほど……………。

美夏絵はやや脚を拡げ、片膝を立てる姿勢で仰臥していた。スリッパの肩紐がまるい肩からすべり落ちていて、ブラジャーをしていない左の乳房がまる出しになっている。胸の隆起は仰臥の姿勢でも驚くほど豊かに盛りあがっていて、しかも弾力に富んだ若々しさを秘めて揺れていた。碗形の丘の頂点には暗赤色の乳首をぼってりとせ、充血して固く尖り天井に向けて突き出している。

しかも、繊細なレースで飾られたスリッパの裾はずっと上のほうまでたくしあげられ、二本のむっちり肉付きのよい乳色の太腿が、ほとんど付け根のところまで露わになって投げ出されている。

美夏絵の頭はベッドの枕からずり落ちるようにして斜めに顔をそむけるようにしているの、悠からは表情が窺いにくい。

胸乳と腿をさらけ出し、しどけない恰好で横たわっている女ざかりのママは、眠っているわけではない。その証拠に　それがもつとも悠を驚かせたのだが　彼女の左手ははだけた自分の乳房にあてがわれ、親指と人差指で乳首をつまんだり揉んだりしている。右手は右手で下に伸び、スリッパの裾がめくれあがったあたり、女の秘められた

部分を触っているのだ。

「あ、あつっ、う……。く、くっ……」

手をせわしなく動かせ、時どき、背を弓なりにのけ反らせるようにして熱い喘ぎを吐き出す美夏絵だ。そのたびにベッドのスプリングが微かに軋む。豊満な白い乳房が揺れる。

悠の覗いている側 右側の膝を立ててしているので、股間にあてがわれている手指の動きは腿に隠されているのだが、悠はすでに母親の左足首にスリップと同じライラック色、同じレース飾りのついた布片がまとわりついているのを認めていた。彼女はパンティを脱ぎおろして、自分の秘部を直接指で触って刺激しているのだ。

悠はショックを受けた。全身が炎で炙られたようにカツと熱くなり、出窓の窓枠を掴んだ手がぶるぶるとどつしよともなく顫えた。喉はカラカラになり心臓はまるで撞木でつかれる鐘のように高鳴る。

いくら悠がうぶな少年だとしても、母親がなにをしているかは一目瞭然だ。

（ママは、オナニーをしている……！）

セックスと同様、親の自慰行為も子供には想像できないものだ。いくら美しく若々しくても、やはり子供にとって母親を性的な対象として意識することに罪悪感を感じるからだろう。しかし、思春期の悠が毎夜、鬱勃とした性欲に悩まされて自慰に耽るのと同様に、女ざかりの健康で豊艶な肉体を持つ美夏絵が性欲をもてあまし、自慰を行なったとしても不思議はないはずだ。夫の柊二が渡米してからもう半年はたつのだから……。

（見ちゃいけないんだ。こんなところ……）

頭のなかでは自制心が命令している。しかし、どうしても目をそらすことができない。あられもない恰好でベッドの上で悶え、嚙り泣くような呻きを洩らしながら徐々に官能曲線のピークに達しつつある女体からは、悠の牡の本能を刺激するエロティシズムの靄が濃厚に発散して彼を惹きつけて離さない。

悠の脳は痺れたようになり、ズボンの下でペニスが膨張して痛いほどブリーフを突きあげている。その状態で悠は化石のように動かなくなった。いや、動けなくなったのだ。

どれくらい経過したろうか。せつない喘ぎが切迫したと思ったら、

「あ、あう、うっ……。む……。」
白い喉をそらし、美夏絵の肢体がぐぐつとのけぞり、太腿から脚にかけてびくびくと痙攣が走った。

「あ、いや、いやっ……。あ、む……。」

まるでなにかを拒否するように首を左右に激しく振り、美夏絵は官能の炎をに全身を焼かれて、まるで瀕死の動物のようにベッドの上でぶるぶる身を震わせ、やがてぐったりとなつた。額から頬、首筋から胸にかけてべっとり汗で濡れ、それに黒髪が貼りついていて姿が凄艶だ。悠がはじめて見る牝獣の官能美だった。

立てていた左腿が全身の脱力にもなつて伸ばされたので、自分の手を股間にはさみつけたままの状態であお向けになっている、絶頂直後の母の下腹がさらけだされた。指をそろえてふっさり茂った恥叢を覆つようにしているが、指と指の間から黒い艶やかな恥毛がのぞけ、それが微風もないのにふるふると顫えている。彼の視線はその魅惑的な部分にしばらく釘づけになっていた。

やがて少年は、母に気づかれないよう、そうと寝室の窓から離れた。

2

(ショックだなあ……。ママがオナニーしているところを見てしまうなんて……)

まるで泥棒のように足音を忍ばせて二階の自分の部屋に入った悠は、ベッドにごろりと転がった。家のなかはいかかわらず静まりかえっている。孤独な戯れのもと、美夏絵は微睡んでいるのかもしれない。

(うわ、濡れてる。こんなに……)

自分のペニスに、昂奮したときに滲み出る透明な液　カウパー腺液　を大量に洩らして、ブリーフをじつと濡らしているのに気づいて、彼は驚いた。自分が母親の自慰シーンを覗き見しつつ、どんなに激しく昂奮していたか、はじめて自覚した。

目を閉じると、瞼の裏側に、紅藤色のスリップから乳房も太腿も露

わにさらけだした母親の、汗に濡れて光る白いなめらかな肌が甦る。耳には、快感を訴える切なくもなまなましい喘ぎが、まだ聞こえるようだ。

（それにしてもママの体、まだまだ魅力的だなあ……）

やはり二人の息子が年頃になると気をつかうのか、最近の美夏絵はあまり肌を見せることが少なくなった。悠は幼い頃から母親が湯上がりにバスタオルを巻きつけただけで涼む姿や、外出から帰ってきてスーツなどを脱ぎ捨て、スリッパ一枚になって寛いでいる、しどけない姿を眺めることが好きだったが、そういう恰好で悠の前に姿を現わすこともめつたになくなった。それだけに、いましがた覗き見た母親のあられもない下着姿は、悠の欲望を激しく昂まらせたのだ。

（まだこんなにピンピンしてる……）

悠はズボンとブリーフを脱ぎおろし、ズキズキと脈打っているペニスを握りしめた。充血した牡の欲望器官は熱を帯び、尿道口からはまだ透明な粘稠液を滲み出させている。彼はそのぬめりを掌に受け、包皮を完全に後退させて、いつものように亀頭をゆっくり指で刺激した。

「あ、あう。む……！」

快感がズキンと背筋を走り、悠の口から思わず呻きが洩れる。しかし二階にいるのは自分だけだ。誰に聞かれる気づかいもない。悠はせわしなく指を蠢かし、怒張しきった分身をしごきあげた。

「あ、あう、うう。ママ……！」

思わず母親を呼んでしまつた。

目を閉じると、先ほど見た母親の痴態と同時に、悠を抱きよせ、乳房を吸わせながらペニスを愛撫してくれる淡いピンク色のネグリジェを纏った母親の姿がダブった。

（そうなんだ。ぼくにオナニーを教えたのはママなんだ……）

悠は高まりゆく快美に身を任せながら、はじめて射精を覚えたときの、母親の表情、声、肌の匂いを思い出していた。

悠がはじめて射精を体験したのは小学校六年、つまり十二歳のときのことだ。

冬の夜、彼は風邪で高熱を発し、昏睡した。母親の美夏絵はひと晩、熱に浮かされる息子の横に布団をならべて看病した。

夜なか、悠が目を醒ますと、母親は汗をどっぶりとかいた彼を抱き起こし、寝衣を着替えさせようとするところだった。熱と薬のために意識が朦朧としている悠は、ただ母親のなすがままにされていた。

「すごい汗。拭いてあげるわね」

着替えの寝衣を着せる前に、美夏絵は汗まみれの息子の裸身を、濡れタオルで拭ってやった。そうやってまるで幼児のように世話をやかれることは悠にとってしばらくぶりのことで、フリーフまで脱がされてしまったのが恥ずかしくもあつたが、汗にまみれた下着から解放されることは気持ちがよく、なんとはなしに甘えるのが嬉しい気持ちに浸されていた。

胸、背、腹と拭ってきた美夏絵は、やがて息子のむきだしの腹部を拭いながら、ふと、

「まあ……」

思わず驚いたような声をあげ、頬を赧らめた。高熱で意識もさだかでない様子の息子が、にもかかわらず勃起していたからだ。

まだ陰毛もまばらで、器官の先端は包皮に包まれている幼い眺めだが、逆説睡眠期の生理現象のせいか、それは充血してコチコチに固く尖って上を向いていた。

「生意気ね、悠。こんなになって……」

母親の目が輝いたようだ。息子の一人前の勃起反応をおもしろがるように指で触ってきて、つまんだりさすったりしてみろ。するとそれは、ますます充血して硬度を増し、膨張した結果、ピンク色の龜頭先端部を露出させる程度に包皮が後退してゆくのだった。

「あらあら……」

美夏絵はちょっとあわてたような声をあげたが、息子の性器を玩弄することをやめようとはしなかった。その結果、悠はいやおうなしに柔らかな掌で快感をあたえられ、幼いペニスはさらに膨張していった。

「まあ、もう大人なの？ 悠は……」

美夏絵の声がうわずっていた。

「ママ……」

高熱でぼうつとしている悠は、母親に玩弄されるがまま、しだいに

快感が高まってくるのを覚えて、熱い呻きを洩らした。それまでは時どき、自分で自分のペニスを感じていて、なんとはなくすぐたような感覚を味わうことはあったが、それ以上刺激しつづけたことはなく、だからまだ射精現象も経験していない。

その夜、美夏絵があたえてくれた刺激は、悠にとって生まれてはじめて味わう甘美で鮮烈な快感となって彼の肉体を奥底から揺さぶった。少年が不安になるほど。

「う……」

なにかが自分の体に起ころうとしている。彼は急に不安になって、それまで閉じていた目を開けた。すると、彼の体の上にかぶさるようにしている母親の、薄いネグリジェの胸もとがはだけて、豊かな乳房のまるみが半分ほどにも露わになっているのが視野に飛びこんできた。幼児が不安を逃れようとしてすがるように、無意識に悠は手を伸ばした。暖かく柔らかく、それでいて弾力に富んだ肉の球体を掴んだ。顔を近づけぼつりとした暗褐色の乳首を口に含み、赤ん坊のように吸った。

「あ……」

びく、と母親の体が顫えたようだ。しかし乳房に吸いついたわが子をそのままに、美夏絵は硬く、熱を帯びた若い牡の器官をしごきつづけた。

「あ、ママ……」

下腹から腰、背筋に向かって快美というより電撃ショックに近い感覚が走り、十二歳の少年は母親の乳房に顔を埋めたままの姿勢で悲鳴のような呻きをあげた。

「あ……」

びくと裸身がそりかえり、下腹から腿の筋肉が痙攣した。

「あらあら」

母親がびっくりしたような、嬉しそうな声をあげた。十分に包皮を剥かれて新鮮な桃肉のようなピンク色の亀頭先端から、白い粘液が射出された。生まれてはじめて悠が放射した香り高い牡の精液だ。

「あ、あ……」

悠の体がひとしきりぶるぶると顫え、ぐったりとなった。

「悠ちゃんったら、こんなに出して……。もう本当に一人前なのね……」

「……」
母親が頬を紅潮させながら乳絞りのような手つきでやわやわと握り、白い粘膜を最後の一滴まで絞り出す。熱に浮かされている最中でもあり、悠には自分の体になにが起こったか、はっきり自覚できない。「これでおとなしく眠れるわよ……」

新しい寝衣を着せ終えた美夏絵が、愛情のこもった声で耳もとに囁いたとき、悠は発熱のせいばかりではないけだるさのなかでふたたび眠りこむところだった。

熱が下がり意識がハッキリしてから、悠はその夜の出来事を思い出して、

（あれは、熱にうかされて見た夢だったのだろうか……？）
不思議に思ったことだ。夢ではなく現実だったとしたら、母親にペニスを撫でられながら、幼児のように乳房に吸いついた自分が恥ずかしい。ちょうど反抗期を迎えて母親に甘えることを拒否するようになった時期だっただけに、真相を問いただすこともためらわれた。

しかし別の夜、夢うつつの記憶を頼りに母親がしたようにペニスをこすっているうち、あの夜味わった強烈な快美感が走って、彼は栗の花の匂いにする白濁した液を夥しく噴きあげた。そうして、悠はオナニーを覚えた。

だから、その行為を教えたのは母親の美夏絵だということができる。以来、悠がオナニーに耽るたび、脳裏には母親の豊かな乳房の感触と、汗ばんだ肌から立ちのぼる甘酸っぱい女の体臭が甦るのだった。

「あ、あうっ……！」

けだるい午後、いましがた目撃したばかりの、母親のあられもない姿を、あの夜の母親の姿にダブらせながら、十七歳の少年は勢いよく牡のエキスを噴きあげた。

（うわ……。ずいぶん出た……）

後始末をしてぐったりと仰臥すると、まるで母親を犯したような罪悪感が押し寄せてきて、悠はしばし悩んだ。

（ママの裸を覗き見して昂奮するなんて、いけないことをしてしまっ
た……）

しかし、射精後の消耗感に支配され、彼はしばし、うとうとと微睡んだ。

夢つつつつの状態で、悠は今で電話のベルが鳴っているのを聞いた。ずいぶん長く鳴って、ようやく母親が応答する声が聞こえた。

「えっ、そんな……!?!」

ふいに母親が驚いたような叫び声をあげたので、そのただならぬ気配に驚かされて、悠は完全に目がさめた。

(どうしたんだろっ?)

ベッドから身を起こして階下から聞こえる声に耳にそばだてた。電話は、あきらかに不幸福な事態の発生を告げている。

悠は自分の部屋から出て、階段を降りていった。母親の美夏絵はゆったりしたふだん着の白いワンピースを纏って、受話器を置いたところだった。その目はショックで放心したように中をさ迷い、焦点がさだかでない。

「どうしたの、ママ?」

悠が声をかけると、ハッとしてふり向いた美夏絵の瞳に、悲痛な感情が溢れていた。

「悠ちゃん……。圭さんが死んだんだって」

「え!? 圭さんが……」

「そうなの。今日、軽井沢で、車の事故を起こして……」

黒須圭は悠の従兄だ。先年亡くなった悠の叔父、すなわち父親の弟である洋画家、黒須京伍の長男である。妻の菜穂子は京伍と一男一女をもうけ、圭は長男なのだ。二十一歳、私立のN 大文学部英文科の学生である。

従兄の圭のことを「圭さん」と呼んではいるが、年齢が離れていたらせいもあつて親しく遊んだ経験がない。だから悠は、彼の死を知らされても、深刻な衝撃を受けなかった。

しかし美夏絵はちがった。彼女の顔からは血の気が失せ、ようやく訪れた夕闇のなかで頬がひきつり、悲しみよりも苦悶に近い表情が浮かんでいた。

「ああ、悠。悠ちゃん……」

いきなり美夏絵は息子を抱き寄せ、しっかりと腕のなかに抱きしめた。まるで圭の次には自分の息子が死ぬのではないかと恐れるように

……。
「ママ、どっしたのね……？」

悠は母親のとり乱しようにびっくりした。彼女に、そんなに強い力で抱きしめられたことなど、かつてなかったことだ。それでも悠は、母がわれに返るまでじっとしていた。午睡から目覚め、あわてて身につけたのだから、夏の薄い服は胸もとがはだけ、ライラック色のスリッブが覗けた。

母のふくよかですっしりと量感のある熱い肉体にまわした悠の手は、腰のあたりで偶然に支えるかたちになった。サッカー地の服とスリッブごしても、母がパンティを着けていないのが触感でわかった。みずから慰めた後、そのままパンティを穿かずにまどろんでいたのだから。

はじめて射精した夜に嗅いだのと同じ、あのむせかえるような、獣めいて親密な甘酸っぱい匂いがむつつと母の全身からたちのぼって悠の鼻腔をくすぐった。

ふいに悠は勃起し、狼狽した。

従兄の圭は、その日、自分のスポーツカーを駆って軽井沢から東京へ向かう途中、国道十八号線碓氷峠の旧道で、急カーブを曲がりそこねたのだ。旧道の峠越えは、急勾配のうえにきついカーブが連続して交通の難所であるが、そちらのほうが運転の快感を味わえると言い、圭はみんなが通る碓氷バイパスよりもこのルートを好んで走った。

車は五十メートルほどの崖から沢に転落した。車は母親の菜穂子にねだつて買わせた国産ツーシーターの最新型スポーツ車だったが、墜落と同時に運転席背後のタンクが火を発し、圭の死体は黒焦げになつて発見された。警察の調べでは、もう一台の車と競争になつたらしく、追い越しをかけたときにスピードの出しすぎでカーブをまわりきれなかったのだからという。軽井沢には京伍の遺した別荘があり、圭は避暑シーズンでなくとも、たとえばスキー帰りなどにちよくちよく

大半はガールフレンドを伴って 滞在していた。このときも週末

を軽井沢で過ごしての帰りだった。ただ、同乗者がおらず単独の事故だったのが不幸中の幸いだった。

母親の菜穂子は、警察からの連絡を受けたとき、失神したという。

死体は現地で茶毘に附されて東京に運ばれ、黒須一族の菩提樹、麻布のF 寺で葬儀が営まれることになった。

動転し、息子をしばらく抱きしめていた美夏絵が、気を取りもどしてあちこちに電話をかけたすと、解放された悠は、今でぼんやりテレビなどを眺めながら、死んだ従兄のことを思い浮かべた。

圭の父、黒須京伍は幻想的でシュールな作風で知られた洋画家だが、三年前にやはり非業の死を遂げている。軽井沢の別荘で、同じ敷地に建てたアトリエから出火し、制作のためにそこで寝泊まりしていた彼は焼死したのだ。原因は石油ストーブの失火だという。

（交通事故か……。いかにも圭兄さんらしいや。あの人、本当にスピード狂だったからなあ……。でも、京伍叔父さんも焼死したし、偶然とはいえ、転落した車のなかで焼かれて死んだのは、なにか因果めいている……）

とはいえ、悠には、京伍叔父の印象は希薄だ。あまり顔を合わせたことがないからだ。というのも、京伍は黒須一族のなかでも異端児とあってよい存在だったからだろう。父の柊二も、弟のことを話題にしたがらない。

黒須家は曾祖父が幕府の重臣だったというが、維新後は学問の世界に進むものが多く、それも理工系で名をなすものを輩出した。たとえば悠の祖父は帝国海軍技術将校として幾多の軍艦建造に携わった人物だし、大伯父のひとりには明治期の工科大学校を出た有名な建築家だ。

その子孫たちもみな、大学の工学、医学、薬学、建築学部などを出て、それぞれの分野で名をなしている。悠の父、黒須柊二にしても国立 大学理工学部を出、レーザー研究で博士号を取得しており、研究成果は内外で高く評価されている学者である。

ところが、柊二たち兄弟の末弟である京伍だけは、理工系に進んだ兄たちとはかけはなれた私立N 大学美術学科に学び、画家の道を歩みだした。

性格も、理的で堅実な兄たちとちがって、刹那的享樂的だった。パリに遊学していた青年時代から放蕩児といわれていた。美男子でし

かも、どこか女たちの心を狂わせるような魅力を持った男性で、帰国してからも、終始いかがわしいスキャンダルが彼にまわりついていたという。

画家としてはひろく大衆に知られる存在ではなかったとはいえ、彼のシニールレアリスティックな画風は一部の好事家たちのあいだでもてはやされて、知る人ぞ知る　という存在だったらしい。最近、彼の業績を再評価する動きがあり、作品はかなりの高値で売買されている。寡婦となった菜穂子が、夫の死後、赤坂でごんまりとしたラウンジエリー・ブティックを経営しているとはいえ、本郷にある宏壮な洋館に住み、軽井沢の別荘を維持しつつ、息子に高価なスポーツカーを買いあたえてやることができたもの、彼女の手もとにかなりまとまった点数の作品が遺されているからだろう。

ともかく、黒須京伍は誇り高い一族のなかでも変わり種だった人物だけに、不慮の事故で亡くなるまで悠たちも彼の家族とは、顔を合わせる機会が少なかった。

悠が従兄の圭の死にさして動揺しなかったのも、なんらかの影響を受けるほど親しい交際をしたことがなかったからだ。

（それに、圭さんの、なんだか世の中を斜めに見下したような、二ヒルぶった態度が気に入らなかった……）

あまり言葉も交わしたことの無い従兄のことを、そうやって思い出す悠だ。

（だけど、どうしてママは、圭さんの死んだことに、あんなに動転したのだろう？）

それが不思議だった。

（菜穂子叔母さんに同情したんだろうか……。たぶんそうだ。これで麻耶と二人ぼっちになってしまったんだから……。ママは菜穂子叔母さんのことはいつも気にかけていたから……）

京伍の妻となった菜穂子は没落した旧華族の裔で、外務省下級官吏だった人の娘だという。漆黒の髪、鼻筋のおつた端正な容貌、楚々とした立居ふるまいも優雅な肢体、キメの細かい、透きとおるように白い肌を持ち主で、いかにも古風で貴族的な美しさをたたえた美人だ。

悠は、自分の母の、ポリウムのある肉感的な美しさも好きだった。菜穂子叔母と顔を合わせるたびに、典雅で気品のある美しさに、

ハツと胸を打たれるほどの衝撃を受けるのだった。

そついった菜穂子が遊蕩児である黒須京伍と結ばれたのは、運命の不思議としかいいようがない。なんでも出会ったのは彼女がまだ

女子大の学生だった頃だという。

知人を介して京伍の絵のモデルを懇請されて彼のアトリエを訪れるうち、誇りも高く教養も人一倍あつた美少女が、京伍のどういふ口説きを受けたものが、最初の約束ではコスチューム・モデルだったのが、しだいにセミ・ヌード、そしてヌードのモデルもさせられるようになった。そしてとつとつ、アトリエで肉体を委ねたのだという。

しかし、京伍と菜穂子のあいだには、単純で淫猥な肉体のつながり以上に、精神的なつながりがあつたようだ。というのも、菜穂子と結婚するまでの一年ほどのあいだ、京伍が彼女をモデルとして描いた数点の作品は、いずれも傑作の評判を得ているからだ。

そのなかの『生贄の夜』という作品の複製写真を、悠は叔父の死後しばらくたって、ある美術雑誌の“黒須京伍 異端と頹廢の栄光”と題した追悼記事のなかに見つけたことがある。どこか西欧の城館と思われる建物を背景にした庭園に、ひとりの娘が謎めいた微笑を浮かべて立っている。真夜中、月もない暗闇に異様な形にねじくれた木々の枝が不気味だ。

娘は裸の上にフードのついた黒いマントを羽織っていた。片手には逆さに持った十字架。もう一方の手には蝋燭。見る人が見れば、それは黒ミサ 神を冒瀆し悪魔を讃える儀式 に参加する女性を描いたものだということがわかるはずだ。

マントの前ははだけられていて、その下の裸像は、ポッチリと赤い乳首をのせた乳房も黒い鬩りを宿した下腹もさらけだされている。脚には黒いストッキングを穿き、薔薇色の靴下留めを着けている。蝋燭の明かりに浮かびあがった肌は病的なまでに蒼白くすきとおっている。

一本一本、精密に描きこまれた恥毛の叢は全体としてぼうつと霞んだよう、秘丘を扇の形に覆っていた。

娘の容貌はあきらかに菜穂子叔母の若い頃であり、肉づきの薄いほっそりした肢体は、まだ男を知らない時期のものかと思われる。しかし、絵の全体からは悠の理性を痺れさせるような淫蕩で禍々しい官能美が発散して、少年を虜にしたのだった。

たんに、描かれているのが恥毛まで露わにした裸婦であるからではない。たとえばその表情である。純真無垢な聖女のようにもあるがその微かに浮かんでいる笑みの奥に、男を誘惑してやまない好色な魔性が秘められているようだ。悠は絵のなかの美しい娘 若かりし頃の菜穂子叔母が、こつ呼びかけているのを幻想のなかで聞いた。

「この絵を見る者よ。ここに来て跪き、私を崇めよ……」

悠は深夜、その絵をみながら何度も自慰に耽ったものだ。感受性の鋭い少年の理性を狂わせ、なにか魔界めいた場所に誘う催眠的なシグナルが、複写された写真の奥から発散しているようだ。黒須京伍はこの絵のなかに、魔術師的技巧で欲望、恐怖、憧憬などの情念を塗りこめることに成功していたのだ。

しかし結婚して子供をもうけてからの菜穂子が、京伍のモデルになった絵はない。あつたとしても、公表されたことはない。と記事は伝えていた。同時に「黒ミサなど、悪魔的な画題の作品を多く描いた幻想と怪奇の画家は、最後にアトリエのなかで炎に焼かれて死んだことにより、その背徳的な一生を完全なる秘儀の円環のなかに、閉じこめたことになるのではないか」とも記されていた。

（圭兄さんがスピードに憑かれたように車を乗りまわしたのも、京伍叔父さんの自滅的な地を受けたからだろうか……？）

だとすると、京伍の呪われた背徳の血は、娘の麻耶にも受け継がれているのか。

麻耶のことを思い出し、ふいに悠の血が騒いだ。さっき自慰で精液を噴きあげたばかりなのに、下腹が熱を帯びだす。

（そうだ。圭兄さんの葬儀で、麻耶に会えるな……）

悠にとつて、死んだ圭よりも、その妹、麻耶のこのほうが身近な問題だった。

少年は自分の机の抽斗の奥に隠してある封筒を取り出した。もう何度も出し入れしたそれは、手垢で汚れている。

封筒の中身は、何枚かのカラー写真だ。彼が写真部に入ってる級友に頼みこみ、彼の暗室と機械を借りて自分で現像、引き伸ばしたものだ。それには、従妹の麻耶が写っている。昨年夏、伊豆の別荘で撮影したのだ。

（あれから一年たった。麻耶はどんなふうに変わっただろうか……？）

悠は写真のなかの従妹を見つめながら、自然に自分の股間をまさぐる。それはズキズキと疼き、充血する。それもそのはずだ。彼自身が撮影した美少女は一糸纏わぬヌードで、霞のような秘毛までさらけ出して、まるで誘うかのような悪戯っぽい笑みをたたえているのだから。

4

従妹の黒須麻耶は、悠よりも二歳年下である。

母親の気品と美貌を受け継いで、幼児のときから外出するたびにモデルや芸能人のスカウトマンにつきまとわれたほどで、見る人をハッとさせるような美少女に育った。小学校から名門のミッシヨンスクール、A 女子学院に通い、いまは中等部の三年生である。

母親の菜穂子が、触れるだけで脆くも壊れそうなガラス細工の透明な美しさだとすれば、娘のは牧神を誘惑して森の奥まで誘いこむ悪戯なニンフのように、ぴちぴちした生氣で充ち溢れた健康美を発散させている。

実際、悠は麻耶と接すると、彼女の肉体から子猫のように親密な体臭とともに、ある種のエネルギーが溢れ出て自分に流れこみ、自分の脈拍を高め、体温を熱くさせるのではないかと錯覚してしまう。

もともと、父親の柊二が京伍を疎んじる気持ちがあったためか、麻耶の家と悠の家は二人が成長するまであまり密接な交遊はなく、親族の冠婚葬祭の席で顔を合わせる程度のものであった。

麻耶と悠のあいだに、とくに親密な感情が生まれたのは、つい一年前の夏のことだ。

悠の父は、伊豆の下田御用邸に近い海岸に別荘を所有している。祖父が避寒に用いていた別荘を相続したものである。一方、京伍のほうは軽井沢に夏の別荘を持っていた。両家とも夏はそれぞれの別荘で過ごすのが習慣になっていた。

未亡人の所有する軽井沢の別荘は設備の老朽が著しく、その年に思

いきつて大がかりな改造工事にとりかかったのだが、進行が遅れてシーズン前半の使用が不可能になってしまった。

おりから悠の父は、核廃棄物をレーザーで処分する実験に参加するため、イギリスの国立核廃棄物処理研究所に招かれていた。

美夏絵は「うちの主人も留守だから、夏は私たちといっしょに伊豆で過ごしたら？」と誘ってみた。二人の妻たちのあいだには、夫たちの抱く確執めいたものはない。悠が見ているも義理の姉妹という関係を超えた友情のようなものがあり、事実、京伍が亡くなる以前からなにくれとなく相談しあっている仲だ。

菜穂子は招待を受け入れ、麻耶が夏休みになると、娘を連れて伊豆にやってきた。大学生の圭が来なかったのは、夏休みを利用して友人とオーストラリアへスキューバダイビングの旅行に出かけていたからだ。

母娘は、離れの和室で寝起きすることになった。離れの建物は芝生の広い庭に突き出すかたちで、洋館の母屋と廊下とつながっており、縁側に立つと松林ごしに海が眺められる。

別荘からは松林のなかの小道を抜けて海岸まで数分の距離であり、悠はいつも水着のまま歩いて泳ぎにゆくのが日課だった。

弟の浩はあまり外に出るのを好まず、もっぱら自分の部屋に持ちこんだパソコンを用いたプログラム造りに没頭していた。彼は父親に似て理数系に秀でた頭脳をもち、小学校の頃から自在にパソコンを操ることができた。中学では一年のときからコンピュータ・クラブの部長をやっている。将来はコンピュータ技術者になるつもりらしい。

菜穂子も肌が弱いせいか夏の強い日差しを嫌い、日中はだいたい別荘にいて美夏絵と話を交わしたり、料理を作ったり、涼しい日陰で読書に耽ったりする毎日だった。

娘の麻耶は、彼女より三歳下の美咲の遊び相手をつとめることが多かった。いつも男きょうだいといっしょの美咲は、遊び相手ができただ嬉しさで、いつも麻耶にまわりついた。

悠は、時どきは女の子たちといっしょに海岸へ行くこともあったが、麻耶からはなんとなく距離をとるようにしていた。

二歳年下の従妹を嫌ったからではない。その反対だ。娘ざかりを迎えつつある美少女の従妹が、あまりにも眩しい存在として目に映るか

らだ。

とくに麻耶が水からあがってきたときなど、濡れた白いワンピースの水着が透きとおってぴったり肌に吸いつき、めつきり大人びてのびやかな肉体の線が揺れ動くさまがなんとも艶めかしく見える。悠の肉体は、若い牡として当然の反応 勃起を起こす。そんなとき、傍に近寄られると狼狽し逃げ出したくなるのが多感な少年の心理だ。

麻耶は、そんな悠の反応を楽しむかのようになり、わざとなれなれしく子猫のように体をすり寄せて、積極的に悠に接近してきた。彼女は悠が本心では自分を嫌っていないことを見抜いていたようだ。

ともかく、まだ無垢な少女なのに男を誘う狡猾ともいえる媚態を幼いときから身につけているのではないか と思われるところが、麻耶にはある。無邪気で可憐な外見の下に、好色で淫蕩だった父親の血を受け継いでいるせいだろうか。

そのうち、悠が努力して設けていた、従妹との隔壁がつき破られる日があった。

別荘で菜穂子母娘とともに寝起きするようになってから一週間ほどたった日のことだ。

午後、泳ぎ疲れて悠が別荘に帰ると、母親は浩といっしょに下田まで買物に出かけて留守にしており、叔母は散歩にでも出かけたのか、姿が見えなかった。

シャワーを浴び、下着一枚の裸で母屋の自分の部屋でごろりと横になり、うとうと微睡んでいると、少女たちが笑いかわす声が開放した離れの窓から聞こえてきて、悠は目が覚めた。（麻耶と美咲が遊んでいるんだな……）

彼女たちも海岸から戻ってきたところらしい。しばらく猫がじゃれるように跳ねまわる物音と笑い声、叫び声が聞こえていたが、そのうち静かになった。

（ふたりとも昼寝かな……）

そう思ったとき、

「くすぐりたい」

妹の美咲の声がした。

「じつとして」

麻耶がひそめた声で命じ、なにか秘密めいた遊びに耽っているらし

い。

(なにをしているんだろっ?)

悠は身を起こした。彼の部屋と菜穂子母娘が使っている離れの部屋は、小庭をはさんで向かいあっているから、窓から声がよく聞こえるのだが、二人の少女は悠が部屋にいるのに気づいていないらしい。

「あ……ん」

美咲が甘えるような声を出した。

「気持ち、いいでしょ」

麻耶の声。なにかを教えているようだ。悠は好奇心をそそられた。

そうつと窓に近寄った。西日があたるのでカーテンを半分ほど引いてあり、向こうからは室内が暗く見える。逆に、障子が開け放されている離れのなかによく見えた。

(あ……!)

悠はびっくりして体をこわばらせた。

妹の美咲が仰向けに横たわり、その上から麻耶が覆いかぶさっていたからだ。

二人とも水着のままだったが、美咲の濃紺のスクール水着は肩をぬぎおろして胸から腰まではだけられている。まだ小学五年生の少女の体はコロコロとまるみを帯びていて、首、胸もと、背中の肩甲骨あたりにかけては小麦色に日に焼けているのだが、胸から下の肌は目にしみるように白く、それがいたいたしささえ感じられる。

悠が驚いたのは、妹の幼い乳房をもろに見たからばかりではない。

従妹の麻耶が、三歳年下の少女の乳房に顔を押しつけ、乳房を吸っていたからだ。

「あ、……ん。お姉ちゃん……ん」

美咲は目を閉じて陶醉した表情だ。彼女の乳房はふくらみというにはまだ早く、ようやく内側から成熟への圧力を受け、乳房を中心として円錐形の突起を形成しだしてきたにすぎないのだが、ふだんは豆粒ほどの可憐なピンク色の乳房は、吸われていないほうもピンとせり出している。あきらかに従妹に吸われて昂奮している。

(へえ。あいつでも乳房は感じるのか……)

悠は驚きながらも感心した。乳房を吸われて感じるのには大人だけだと思っていたからだ。それにしても、十四歳の少女が十一歳の従妹の

乳房に吸いつき、チュウチュウと音をたて、あるいは舌先で周囲を舐めるようにする仕種には、無邪気な遊びのように見えて、悠を刺激するセクシユアルなものが匂いたっていた。彼のショートパンツの下でペニスが熱を帯び、硬くなりだした。

（麻耶はレズビアンなのか……？）

しばらくして、ようやく麻耶が口を離して体を起こした。ねっとりした唾液が乳首から糸をひいてキラッと輝いた。

それまでは肩までかかる長い黒髪に顔が隠れて表情がわからなかったが、端麗な美少女の頬はいくぶん紅潮し、目がきらきらと悪戯っぽく輝いているのを、覗き見る従兄はハッキリと見た。あきらかに麻耶もある種の昂奮を味わっている。

「ね。今度は吸ってくれる？」

「うん……、いいよ」

美咲は素直にうなずき、役割を交替した。

麻耶は床の間の床柱に背をもたせかけるようにして両膝を立てて開き、脚のあいだに年下の少女の膝をつかせた。

「さあ」

美少女が白いワンピースの水着を腰まで脱ぎおろした。やはり、日に焼けていない部分の白い肌が鮮烈の悠の目を刺激した。

悠は息を呑んだ。

（へえ。麻耶のおっぱい、意外に大きいんだ……）

もう生理も定期的に訪れるようになったにちがいない。中学二年生の少女の肉体は、伸びざかりの時期で、すんなりとして全体に肉づきが薄い感じがするのだが、こうやって水着を脱いでしまうと、乳房は新鮮な林檎を思わせる硬質なまるみを帯びてじゅわぶんに隆起していた。美咲は、まるで幼児のような無邪気さで白いふくらみの上、野暮のように赤い乳首に吸いついた。彼女のショートボブの髪が揺れて、それを麻耶はいとおしむように撫で、うっとりとした表情を浮かべ、目を閉じた。

「ああ……」

ふっくらした唇がなかば閉じ、なかば開いた状態で白いビーバーのような前歯をのぞかせた美少女は、悩ましげな呻きを洩らした。長い睫がふるふると顫えた。麻耶もまた、従妹に乳首を吸われて甘美な感

覚に酔っている。

「お姉ちゃん。気持ちいい？」

「う……ん。いいよオ。もつと強く……」

麻耶は後ろにのけぞる姿勢になり、臀を前に滑らせて完全に畳の上に仰臥した。美咲は従妹の体と交差するかたちでおおいがぶさる。

（ずいぶん大胆なこと、してる……）

少女たちの水着姿から目を離すことができない悠だ。彼の男根は完全に勃起し、透明な液が下着を濡らしている。胸はドキドキ早鐘を打ち、喉は熱病にかかったかのようにカラカラだ。そして、麻耶の手がすつつと美咲の腰から腹部へと水着の上を撫でおろし、股間へと伸びていったとき、

カタン。

悠の耳に庭の木戸が開いた音がした。

（誰か帰ってきた！）

窺視している現場を見られまいとして、悠は窓ぎわからすばやく離れた。しかし、少女たちは秘密の遊びに夢中になっていて、人影が縁先に立ったのも気がつかない。

「まあ……！」

低く押し殺したような驚きの声が出た。

（菜穂子叔母さんだ……！）

悠は首を縮めた。叔母は庭から縁側ごしに室内を見て、麻耶と美咲の奇妙な遊戯を目撃してしまったのにちがいない。

「あ」

気配を感じて麻耶が身を離し、水着を直す気配が出た。しばらくして縁側からあがった母親が、わざと平静を装った声で、

「麻耶。帰ってきたの？」

「うん。疲れたから美咲ちゃんと昼寝してたの」

「そう。……美咲ちゃん、みんながもつと帰ってくるから、お風呂をわかしておいてくれない？」

「はい」

なにもわからない美咲が部屋を出てゆくと、入れ替わりに母親が入ってきて、

「麻耶」

ちよつと敵しい声を出した。

「なに?」

「なにをしたのよ。美咲ちゃんに……」

「うん、ちよつと……」

言いよどむ娘を、ピシッとたしなめる。

「だめよ。年下の子にあんな悪戯したら」

「えーっ、ママ。見てたの?」

その声の調子は、盗み聞きする悠にもペロツと舌を出した悪戯っぽい表情を思わせた。

「庭から入ってきたら、あんたたちが見えたのよ。どついつ気? 美

咲ちゃんにおっぱいを吸わせたり、吸ったりして……?」

「ああやったら気持ちよかったから。……ごめんなさい」

さすがにまずいところを見られたと思っているのだろう。しおらしく謝った。

「ごめんなさい、じゃすまないわ。美咲ちゃんにいけないことして、

美夏絵伯母さまに見られたら、大変じゃないの」

「……はい。もう、しないわ」

麻耶の声は蚊の鳴くように小さい。

「口だけじゃだめ。お仕置きよ」

「えーっ。……はい」

母屋の浴室で美咲が水をはねちらかす音がした。菜穂子もまさか向かいの部屋に悠がいるとは思っていない様子で、

「さっ、脱いで」

敵しい口調で命じた。

(水着を脱がせてお仕置き……?)

その言葉を耳にして悠はびっくりした。美夏絵はお仕置きなどめったにしたことがない。

衣ずれの音がした。中学二年の娘が白いワンピースの水着を脱いだのだ。ふたたび悠のペニスが勃起しはじめた。

「ここに来て」

「はい……」

二人の声は、どことなくしめやかだ。パン。

なにかが弾けるような声がした。

「あっ!」

麻耶の叫び。

ピシッ、バシッ。

乾いた音が連続した。悠にはわかった。

(お臀を叩いているんだ……!)

あの美少女がまる裸にされて、母親に臀を打たれてお仕置きされる

それは十六歳の少年の血を騒がせる出来事だった。

(見たい……)

悠はそうつと窓に近寄り、離れを覗いた。

(あっ……!)

エロティックな光景が展開していた。

ほぼ部屋の中央で、悠に右の脇腹を見せる角度ですっぱだかの麻耶が四つん這いになっていた。その向こうに立て膝をついた菜穂子がい
て、右手をふりかざし平手で娘の臀をうち叩いている。

「あっ……。あっ……!」

パン、パンと小気味よい音が立ち、撲たれる少女はそのたびにびく
んびくと身をよじり、反らせ、くりんとして剥き卵のようにつやや
かな臀丘をうねらせる。その白い丘は水着の裾まわりに沿って小麦色
に日に焼けているが悠が見ているうちに、まっ白い部分が見るみる赤
みを帯びていった。

「ああん……」

黒髪が畳の上になびいて揺れる。ピンク色の唇から白い前歯ととも
に泣き声が洩れる。

「いけない子。ほんとに……」

一糸纏わぬまる裸にした娘の首根っ子を左手で押さえ、リズムをつ
けて右手を臀部にうちおろす母親の頬は紅潮し、凜々しいまでの美し
さがみなぎっていて、悠は息を呑んだ。

菜穂子は白い麻のサマードレス 胸もとが大きく開いたノースリー
ブの を着ていたが、立て膝をしているので、悠の視野にドレスの
裾の奥で白い下着が股間に食いこんでいる様子があからさまに飛びこ
んできた。

(……!)

可憐な従妹がまっ裸でお仕置きされる姿も刺激的だったが、美しい叔母の白い太腿の付け根に見えるパンティもまた、少年をぼうつとさせるに足る蠱惑的な眺めだった。

力を入れるたびに腿の筋肉がぎゅっとしこった。白いパンティはごく薄い布で作られているので、覆われているはずの秘毛の黒い鬚りがうつすらと透けて見える。そして一番底の、布が二重になった部分は透けはしないものの、秘部の谷にくつきりと食いこんで縦長の皺を形づくっている。悠はゴクリと唾を呑みこんだ。彼のペニスはブリーフを突き破らんばかりに怒張している。

「ああん……。ごめんなさい、ママァー！」

泣き声が高まり、麻耶は顔を畳にすりつけるようにしてつつ伏した。くりくりとまるい臀部は、もう全体がまっ赤に染まっている。二十回ほども撲たれたにちがいない。

「じゃ、許してあげる。もう、美味ちゃんに悪戯しちゃだめよ……」

うって変わった優しい母親の声になって、菜穂子はお仕置きする手を止めた。麻耶はしばらく両手で顔を覆ったままの同じ姿勢を保った。

「だいぶ赤くなつたわね……」

菜穂子は娘の臀を掌でさするようにして、ついと身を屈め、うぶ毛がそよぐむきだしの臀球に唇をあててた。臀を抱くようにして、熱を帯びた肌に頬ずりした。

「……」

沈黙の時間が流れ、それから咳くように菜穂子の声。

「さあ、下着を持ってお風呂場へ行くのよ」

「はあい……」

泣いてたのが嘘のように元気な声で立ちあがり、まる裸の娘は部屋のタンスの抽斗を開けて替えの下着を手にして母親といっしょに部屋から出ていった。その一瞬、悠は覆うものない従妹のヌードをまっ正面から見るようになった。

（あっ！）

ピンクの乳首、ふわっと煙か霞のように萌え出た恥草の丘。そしてクツキリと縦に走る女の谷。それは神々しいまでに清らかで鮮烈な処女の眺めだった。

悠がふたたび従妹と顔を合わせたのは、夕食のときだ。彼はあの後、こつそり窓から抜け出して海岸を歩き、昂奮を鎮めてからふたたび、なにくわめ顔をして別荘に戻ったのだ。

菜穂子も麻耶も、先刻のお仕置きのことなど嘘のように、明るい声で話をかわしている。しかし悠の目は、時おり、椅子の上で臀をもじもじさせる麻耶の仕種を見逃さなかった。

(まだ、ヒリヒリしてるんだ……)

まっ赤に腫れあがった桃の果実のように可憐な従妹の臀部を思い出し、食卓に向かいながら勃起するのを押さえきれなかった悠だ。

その夜、悠はなかなか眠れなかった。

無風で蒸し暑さがつのつたせいもあるが、昼間見た、麻耶と美味の恥部を吸いあう秘密の遊戯、そしてお仕置きされる麻耶の顫えるヌード、美しい叔母のドレスの奥に見えたパンティの眺め、そんなエロティックな光景が次から次へと瞼の裏に展開して、一度オナニーをして溜まった精液を放出しても、それでも昂奮がおさまらない。

思いきって寢床を抜け出した。ベランダに出たら少しは風が肌を冷やすだろうと思っただからだ。

家のなかにはシンと静まりかえっている。そうっとテラスから芝生の上に裸足でおりると、パジャマのまま仰向けになった。さすがに夜気は涼しく、火照った肌に心地よい。

(こっやって朝までいようかな……)

大の字に横たわったまま、天の星を眺めていると、ふいに、

「悠兄さん……」

いつのまにか彼の後を追って庭に出てきた寝衣姿の麻耶が、彼を見下ろしていた。

「なんだ、麻耶か」

「わたしも、眠れなくて起きてたの。そうしたら悠兄さんが庭に出るのが見えたから……。ね、お話してもいい？」

「ああ、いいとも」

悠が体を起こすと、その隣りに白い、透けるようなベビードールのネグリジエを纏った美少女はペタリと臀を落とす、いつものようになれなれしい拳措で肩と肩をくっつけるようにして座った。黒髪から甘い匂いが漂って悠の鼻をくすぐる。

「菜穂子叔母さんは？」

「ママはぐつすりよ。お薬を服むから」

菜穂子は不眠症の気があり、主治医から睡眠薬をもらって常用しているという。

（じゃ、いま起きてるのは、ぼくたち二人だけだ……）

美少女の素肌から石鹸の匂いとともに子猫のように動物的な匂いもたつて、それが悠の胸をときめかせた。麻耶はしばらく星空を眺めていたが、突然に向きなおると、

「ね、悠兄さん。夕方、わたしがお置きされるところ、見てたでしょ」

ズバリと言われて悠はドキッとした。

「知ってたのか、麻耶は……」

闇のなかで上くちびるがめくれ、ビーバーのように印象的な白い前歯を見せて従妹は微笑んだ。悠は顔が火照るのを覚えた。

「だって、立ちあがったときに窓の向こうから覗いてる目が見えたから……」

「覗くつもりはなかったんだけど、帰ってきたらちょうど、おしりを叩かれてる音がしたから……。どうして叩かれたんだい？」

その前に、美咲と乳房を吸いあっていたところから盗み見ていたとは言いにくかった。

「ちよつと悪戯してたのを見つかっちゃって……。ママ、時どき、あやっってお置きしてストレス解消するのよ」

「ストレス解消？」

大人びた言い方にびっくりすると、

「そう。ほら、女の人ってむしゃむしゃして気持ち晴れないときってあるのよ。男の人ならお酒のんだり、どこかに遊びに行けばいいけど、女はできないでしょう？ ママは時どきヒステリーを起こすの。それで、わたしがお臀をぶたれるわけ……」

平気で大胆なことを言う。麻耶はたいそう早熟な娘なのだ。

「つまり、麻耶はママのストレス解消につきあってやっているわけか」

「そうよ。お臀をぶたれるのはちっちゃい子供の頃からだから慣れるわ」

ケロリとしている。自分のヌードを悠に見られても気にしない様子だ。

「へえ」

「パパが生きてたときは、ママだってお臀をぶたれてお仕置きされてたしね」

「……」

悠がびっくりして声もないのを見て、クスツと美少女が笑いを洩らした。

「ふふつ。びっくりした？」

「うん。……ほら、うちじゃ親父もおふくろもお臀なんか叩かなかつたから」

「わたしたち、圭兄さんとわたしは、幼い頃は一週間に一回は、パパやママにお仕置きされてたわね。パンツを脱がされて……。ママはパパにもお仕置きされてたわよ」

麻耶があげすけに語る叔父の家庭の独特な躰かたは、悠を昂奮させるものだった。

西欧の社会では、子供を躰けるための体罰として、ごく一般的に臀打ち スパンキングが行なわれる。親の言いつけに従わなかったりすると、親は子供を膝の上にのせ、お臀をむきだしにして掌でパンパンと撲つのは、どこか家庭でも見られる光景だ。

学校の寄宿舎や寮などでは、舎監などによる鞭打ちも行なわれる。

とくに厳格な上流家庭では、家庭教師に子供を鞭打つ資格があたえられている場合もある。

しかし、臀を叩く という行為には、叩かれる状況しだいで、容易に性的なものと結びつきやすい。売春サービスには鞭やスパンキング専門の娼婦がいるほど、西欧人には臀打ちや鞭打ちに対して性的な昂奮を覚え、倒錯した行為に耽溺する人間が多い。

若い頃パリに遊学し、西欧諸国を巡り歩いた経験をもつ黒須京伍は、どこかでそういった嗜癖に染まったらしい。彼の作品のなかにも、裸の臀を鞭打たれる男女の姿が多く描かれるようになった。

家庭でも、妻を従わせ子供を躰けるために積極的にスパンキングを

行なった。強烈な個性をもつ異端の画家は、家庭においても独裁的で、ことあるごとに妻の菜穂子をスパンキングしたようだ。幼いときから麻耶はそれを見させられている。また、自分も兄の圭も、父親や母親にそうやって躰けられて育った。

（菜穂子叔母さんも、叔父さんにお臀をまるだしにされて叩かれていたのか……）

麻耶の告白を聞いて、思わず胸が騒いだ悠だ。あの気高く優雅な美しさをたたえている叔母が、そうやって暴君の夫に屈辱的な仕打ちを受ける光景は想像しにくかったが、同時に欲望を刺激されることでもあった。

「でも、痛いだろう？ 麻耶は泣いてたじゃないか」

そう訊くと、早熟で悪戯な美少女はまたクスツと笑ってみせた。

「泣くのはね、ママが早く許してくれるからよ……。だから麻耶、案件反射ですぐ泣けるの。本当はお臀を手で打たれても、あんまり痛くないのよ」

「へえ、そんなものかな」

「うん。慣れもあるかもしれないけど……」

麻耶はニツと白い歯をむきだすようにして笑った。なぜか嬉しそうだ。薄目の上唇がまくれあがるような笑みは、無邪気でそうできてひどく淫靡な雰囲気も発散させる。蒸し暑さのせいで上唇に汗の粒が浮いているのか、なぜか刺激的だ。

しばらく沈黙が続いた。

ふいに悠の肩にもたれかかっていた麻耶の体重が重くなった。

「麻耶……」

見ると年下の少女は眠気を催したのか、瞼をなかば閉じたようにしてよりかかってくる。甘い匂いのする黒髪が悠の首筋にさわってくすぐりたい。

「こら。ここで眠ったら風邪をひくぞ」

悠は彼女を抱き起こそうとして腕を腰にまわした。するとふいに麻耶のほうから従兄の体にしがみつくようにして、上体を芝生の上に倒すようにした。

「あ……」

悠は仰向けに倒れ込んだ麻耶に引き寄せられるかたちで、覆いかぶ

さる姿勢になった。

しなやかな腕が首筋にからみつき、

「悠兄さん、好き……」

そう言うと同時にタイミングをはかったいた動きで、麻耶は自分の唇を悠の唇に押しつけてきた。

「む……！」

悠の唇はぼつてりと柔らかい、熱く濡れた唇にふさがれた。まるで恋の水管に慣れた成熟した女のように、麻耶は悠の唇を吸い、ち口と舌を走らせた。甘酸っぱい少女の肌の匂いが鼻腔いっぱいに広がり、悠は電気ショックを受けたもののように麻耶の接吻を受けるがままになつていた。

「ふふ」

麻耶は含み笑い洩らした。悠は従妹の巧みな計略にかかったことを知った。この早熟な美少女は、ごく自然に彼の唇を奪うチャンスを狙っていたにちがいない。

しかし、腹を立てるよい先に、少年は麻耶のふっくらした唇との摩擦刺激に酔い痺れてしまった。それはまさに一種の甘美な感電といつてよい衝撃だった。

一度軽く離してから、今度はぐっと力をこめて唇と唇を密着させてきた従妹は、前より大胆に舌を滑りこませてきた。

暖かい唾液に濡れた舌に自分の舌がからみとられ、歯茎の粘膜を柔らかく愛撫される快感は彼の全身に戦慄を走らせるほど鮮烈だった。

「はあっ」

二人の口が離れたとき、悠は大きく息を吸った。まるで麻耶に自分の肺のなかの酸素ばかりか、魂まで吸われたようにぼうつとなつていった。

「すてき」

うぶ毛の感じられる頬を悠の頬にすりつけて、麻耶はうつとり目を閉じて呟いた。しなやかな指が耳朶をいじってくる。悠は馬鹿みたいに従妹の薄いネグリジェ一枚の体を抱いたまま身をこわばらせている。

しばらくして麻耶が低い声で訊いた。

「……ね、悠兄さん。これまで誰かとキスしたことある？」

「ないよ」

「こそ」

「ほんとね」

事実、悠が女の子とキスを交わしたのは、これがはじめてなのだ。麻耶は目を丸くした。

「信じられない。だって、悠兄さんみたいなハンサムで優しくてカッコいい男の子が、女の子とキスしたことがないなんて……」

悠は思わず赧くなった。

「だって、ガールフレンドもできないよ。中学校から男子校だもの。」

悠の高校は名門私立大学S 大の付属校で、中学から入ると、よほど成績が悪くないかぎり大学に進める。そのかわり男子部と女子部は分離していて実質的な男女別学だ。もちろんガールフレンドは機会さえあればつくれないことはないが、どういふものか悠は女の子に対してひっこみ思案のところがあり、積極的にガールフレンドをつくるに交際したことがない。

「じゃ、キスしたのは麻耶がはじめて？」

「そう」

「すてき！ 悠兄さんとはじめてキスした女の子になっちゃった……」

弾けるように笑って、またしがみついて唇を吸いつけてくる。悠は甘酸っぱい少女の体臭にわれを忘れ、力をこめて麻耶の体を抱きしめ、今度は自分から舌をからめて吸った。

「ひと晩じゅう、こうしていたい……」

麻耶は溜息をつくようにして言い、また唇をよせてくる。ぎこちなくはあつたが情熱的な接吻を、思春期のいとこ同士は強く抱きあいながら何度もくり返した。悠は薄い木綿の布をとおして麻耶の乳首が硬く尖って自分の胸に押し当てられるのを感じた。

（麻耶は、昂奮している……）

ふいに理性が甦ってきた。自分も痛いほどに勃起している。このまま暗闇のなかには、自分の肉奥のなかで沸き返る欲望にどこまでもおし流されてしまう恐れを感じた。

「さあ、家のなかに入ろう」

年上の男の子の威厳を見せて、麻耶の熱い体をそっとつき離すようにすると、

「ああん、残念……」

ハツとするような媚びを含んだ瞳でじつと悠の顔を覗きこむようにした美少女は、闇のなかに仄白い笑みを浮かべ、ふいに立ちあがると短い寝衣の裾をひるがえすようにして離れのほうに駆けていった。

「おやすみなさい。悠兄さん……」

無邪気な笑い声と、甘い肌の匂いが残った。悠はしばらく芝生の上に仰向けになり、麻耶と抱擁し、接吻した昂奮を鎮めた。ブリーフが内側で濡れている。

（もう少しあややってキスしていたら、麻耶を裸にしていたかもしれない……）

悠は薄布の下の熱い肌の感触を思い出した。

（それにしても、麻耶のやつ、キスが上手だったな。あいつは誰かと経験がある……）

6

翌日、悠が水着に着替えて海岸へ出るために松林のなかを歩いていると、まるで待ち伏せていたように木の陰から麻耶が飛び出してきた。

「悠兄さん、いっしょに行こう」

無邪気に彼の体に腕をからめ、唇をつきつけてきた。

「ばか。家から見えるぞ」

「だいじょうぶ」

しばらく抱きあって接吻を交わしてから二人は海岸に出た。

「誰にキスを教えてもらったんだい？」

熱い砂の上に寝そべりながら、悠は訊いた。わずか十四歳の少女のキスが、昨夜はじめて体験した彼にも、あまりにも巧みに思えたからだ。

「男の子じゃないわ」

「えっ……？」

「悠兄さんだけに言うわね。だけどママやほかの人には絶対ないしょにしてくれる？」

「ああ、約束するよ」

早熟な美少女は、あのハツとするような魅惑をたたえた瞳で従兄を見つめて告白したのだった。

「一番最初に教えてくれたのは、家庭教師の先生。わたしが小学校のときよ。」

娘を名門のA 女学院中等部に入れるため、麻耶が六年生のときに母親は家庭教師をつけた。たいそう美しい女子大生だったという。

菜穂子は娘に大人を誘惑する危険な魅力がそなわりつつあることを知っていて、だから女子大生を雇ったのだが、この家庭教師にレズビアンのお気があることまでは気がまわらなかった。「令子先生 ってわたしたちは呼んでたけど、その人ったら、教えたことをわたしがよく理解すると、最初はふざけ半分にチユツとキスしてくれたの。そのうち遊び半分のキスじゃわたしが満足できなくなると、難しい試験をやるからそれにいい点がとれたら本当のキスをしてあげる」と言うの。わたし、熱心に勉強して、いい点をとったわ。そうしたら、舌をつかうキスを教えてくれて唾も吞まされたの。そのときはもう死ぬかと思うくらい昂奮したわ」

レズビアンのお女子大生は巧みに少女の幼い欲情を刺激していった。

甘い接吻が欲しさに麻耶は勉強したから、当然成績はあがる。菜穂子は単純にそれを喜んで、娘が同性愛へと誘惑されていくのに気がつかなかった。

「そのうち、令子先生はわたしの体を撫でて気持ちよくしてくれるようになったの。もちろんご褒美としてね……」

最初が乳首だった。乳房が発達してくる時期の少女は、乳首を中心として疼くような感覚に悩まされることがある。

令子先生は幼い生徒の胸をはだけ、ピンク色した無垢の乳首を舌でやさしく舐め、唇ではさんだり吸ったりしてやった。それは、かつて感じたことのない甘くせつない快美を麻耶の内側に呼び起こしたものだ。

（それで、麻耶は美咲のおっぱいを吸ってやったり、自分のを吸わせたりしたんだ……）

悠は納得した。

当然、レズビアンのお技巧はもっとエスカレートしたはずなのだが、「令子先生が可愛がってくれたのは、おっぱいまでよ。」

麻耶はそう断言する。

この美人家庭教師は、接吻と愛撫の褒賞でむら気な教え子をみごとにA 女学院の入学試験に合格させた。

「令子先生は、ずっとわたしの家庭教師をやりたがったんだけど、ママがうすうす感づいたみたいで、麻耶が試験に受かったらやめさせちゃったのよ。もちろんずいぶんお礼はあげたみたいだけど……」

悠は、美しい年上の娘に抱かれた麻耶が、接吻されたり乳房を吸われたりするエロティックな光景を想像すると、どうしても勃起してしまふのだった。

「わたしって、なんか女の子にモテちゃうのね」

ククツと含み笑いを洩らして麻耶はないしょ話を続ける。

A 女学院中等部に進んでからは、親密になったクラスメートの何人かとキスしたり抱擁したりする、遊戯的色彩の濃い愛撫を行なっているという。それは好奇心の強い女の子たちだけの世界のなかでは珍しいことではないのだが、麻耶のキュートな魅力に惹かれる同級生のあいだから、「黒須さんにキスされたら、ボーツとなってお洩らしするほどよ」と評判になっているらしい。

「でも、男の子とは、悠兄さんがはじめてよ。ほんとだから……。麻耶だってボーイフレンド、ひとりもないもん」

悠としては、その言葉を信じるしかない。

それ以来、家族の目を盗んで二人はしばしば抱擁しあって接吻をかわした。

彼女の良い匂いのする暖かい体を抱きしめ、甘い唇を吸い、唾液を飲むたびに、そのテクニクに酔い痴れてしまふ悠は、はじめて美酒の味を知った若者のように天にも登る気持だ。それでも、悠はキス以上の行為に踏みこむことを自制した。やはり麻耶が、自分の憧憬する美しい叔母の娘であることがブレーキとして働いたのだ。

数日後、軽井沢の菜穂子の別荘が改造工事を終え、住めるようになったという知らせが届いた。

「私たち、明後日にはおいとましますわ。軽井沢に行きますので」

未亡人は未替えに告げた。

「残念ね。麻耶ちゃんも行っちゃうの？」

「ええ。どうせすぐに、北軽井沢で学校の合唱部の合宿に参加させな

くちやいけませんから」「そう。美咲が寂しがるわ」

すぐにも麻耶と会えなくなること知らされて、悠は落胆すると同時に、なんとなく安堵めいた気持ちも味わった。

(かえって、このほうがいいんだ……)

悠はそう自分にいい聞かせた。彼は麻耶と抱擁するたびに、体の奥でふつふつと滾る欲情を制御するのに苦しむようになっていた。

いま、別れてしまえば、二人は会う機会もめつたになくなる。だから従妹との関係は抱擁と接吻までのプラトニックな関係で終止符を打つはずだった。

7

麻耶が伊豆を去る日の前日、悠はカメラをぶらさげて海岸に下りていった。

やはり麻耶がいなくなると思うと、美少女の魅力的な肢体を写真に撮っておきたいと思うようになったからだ。

浜辺で従妹を探すと、ちょうどひと泳ぎして砂浜にアガってくるころだった。ブルーの海を背景に、濡れた黒髪を肩から胸にまわりつかせ、全身から水滴をしたたらせながら歩いてくる白い水着姿の麻耶は、まるで水の精オンディーヌのように息を呑む美しさだ。ハイレッグカットのワンピース水着だから、若鹿のようにすんなり伸びた脚が、よけい長く見える。

悠は一眼レフのカメラのズームレンズを、二百ミリの最望遠にして彼女の姿をファインダーいっぱい捉え、何枚かシャッターを切った。悠が自分を写していることに気がついた麻耶が手を振り、白いビーバーの前歯を見せて華やかに笑ってみせる。

(なんてかわいいんだ……)

こんなに美しい従妹を持つことに誇らしささえ感じた悠だ。しかし、つぎの一瞬、彼はドキッとした。望遠レンズで拡大された彼女の白い水着姿の、股の部分に黒い鬚りが透けて見えたからだ。

(あれっ!?)

今日の麻耶の白い水着は透けやすい素材だった。胸の乳首も乙女の翳りも、濡れると、ほんのり透けて見えるのだ。

悠は全身がカッと熱くなった。水着の下でペニスが硬くなる。悠はあわてて腹ばいになった。

（麻耶のやつ。ぼくを挑発してるー？）

美少女は悠の狼狽も知らぬげに彼のそばに駆けよると、濡れた体をすりつけるようにして熱い砂の上に腹ばいになる。

「嬉しい。写真、撮ってくれるの？」

「ああ。麻耶ももう帰ってしまつから」

「でも、東京でも会えるでしょ」

「どうかな……」

麻耶の家は本郷で、悠は目黒だ。学校も都心と郊外。通学に使う電車も別で、二人の行動範囲は重ならない。とくに麻耶のほうは学校の規則も厳格で、男の子との交際など下手をすると退学処分になるという。小妖精のように早熟で魅力的な娘を監視する母親の目も厳しい。

「だって……、わたしたちとこ同士だもの。ふつつの交際とはちがうわ」

「どこが。毎日抱きあってキスしているいとこ同士なんて、大人はよけい心配するよ」

すると麻耶は、いつにない真剣な目つきになって訊いてきた。

「いとこ同士だって、結婚できるんでしょう？」

「そりゃ、そうだけど……」

「じゃ、恋愛をしたって、いいじゃない」

「……」

早熟な少女はなにを考えているのか、悠は彼女の思考についてゆけない。ただ、麻耶との結婚など、自分の父は絶対に許さなだろうという気がした。

「いやだわ、もう会えないなんて……」

いきなり麻耶は濡れた体を彼の体に、唇を唇に押しつけてきた。塩の味がするキス。

「ばか。みんなが見てるじゃないか」

「見られたっていいわ」

悠も、麻耶の体を抱いて思いきり接吻を交わし、別れを惜しみたく

なった。

「人のいないところに行こう」

二人は松林のなかに入った。この近辺に住む者しか知らない小道を歩くと、じきに海水浴場の喧噪は遠ざかり、人気のない静かな場所がある。そこは昔、栄華を誇った財閥の主が所有していた別荘の敷地だ。主の死後、遺産相続の争いが起き、所有者が決まらないまま放置されている。敷地の周囲は有刺鉄線をはりめぐらして不法な侵入者を締め出しているが、毎年やってくる悠は、こっそり潜り抜けられる隙間を知っている。

「ここだと、誰もこないよ」

その松林は、時たま土地の管理人が巡回するだけで、ふだんは人の気配がない。

悠はふいにある考えが閃いた。

(麻耶のヌード写真を……)

まだ男を知らない少女がそれを許すかどうか確信はなかったが、思いきって口に出してみた。

「麻耶のヌードを撮らせてくれよ」

「えーっ」

麻耶はびつくりした声を出してみせたが、お茶目な瞳は笑っている。

「投稿写真にするの?」

「ばか。記念だよ」

「麻耶を忘れないため?」

「うん」

「ヌードモデルか……。パパが死んでからは、やったことないもんね」

では麻耶は、父親が生きていたときにヌードモデルをつとめた経験があるのだ。その経験で裸を見せることにこだわりがないのか、

「じゃ、いいわ」

案外とあっさり言っただけ。彼女の羞恥心よりも、自分の裸身を従兄の脳裏に刻みつけてやりたい気持ちが強いようだ。

「でも、条件があるの」

「なんだい」

美少女はさすがにちょっと躊躇ったが、まっすぐに悠の目を見て、

挑むように、

「悠兄さんも、麻耶に裸を見せてくれる？」

「えっ!？」

「麻耶、男の人の体って、ちゃんと見たことないから……。とくに、あそこ」

「ペニスかい」

「そう」

悠はたじろいだ。

「おい……」

「だって、男の人って、ペニスから精液を出すんでしょう？ どんなふうに出るのか、見たいの。こんなこと、まさか圭兄さんにも頼めないうし……」

性の情報は、雑誌や友人たちとの会話で仕入れている女子中学生だが、個人差がすごくある。早い子はもう男の子と体験して、妊娠したりもするが、麻耶のように好奇心はやたらに強いが実際に男性と接触する機会のない子もいる。

「同じクラスの子でね、隣の家のボーイフレンドと親の目を盗んで、毎日セックスしてるって子がいるの」

「へえ」

お嬢さん学校として知られるA 女学院だが、なかにはそういう子もいるのだ。

「その子がみんなに自慢するのよ。ペニスを触ったら精液が出たとか……。ね、精液ってヘンな匂いをするの？」

「ヘン というのかな。栗の花が咲いてるとき、匂いをするだろう？ あれに近い匂いだけどね」

「どんなふうに出るの？ おしっこみたいに？」

「うーん、ちょっとちがつなあ。ほら、お風呂で指鉄砲を作ってピュッと水を飛ばすときみたいに、あんな感じで、ピュッ、ピュッと飛び出すんだよ」

「わあー」

感心している。そしてますます真剣な顔になり、

「精液が出るところを見たいわ」

だから、自分のヌードを見せるのと交換条件に、悠のペニスを見、

触り、射精現象を見せてくれという。

8

「……よし。麻耶のヌードを撮らせてくれたら、ペニスをらせてあげよ」

麻耶の熱心さと、彼女の裸体を見たいという強い願望が、悠に奇妙な取り引きを承諾させてしまった。

「精液も？」

「精液かあ……。うーん……。ま、いいか」

「じゃ、ヌードになつてあげる」

不思議なことに、麻耶は悠が昂奮してい襲いかかり、自分の処女を奪う行為に出る。などとは夢にも思っていないようだ。

（麻耶のやつ、ばくのことをなんだと思ってるんだらう？）

悠が男くささを感じさせない、中性的な容貌と肉体の美少年だからだろつか。悠のいつも優しく接する、柔和な態度のせいだろつか。

人気のない私有地の松林で、美少女はためらいも見せずに、水着の上から纏っていたTシャツを頭から、ついで濡れた白い水着を足先から脱いだ。アンダーショーツは着けていないから、それでまる裸だ。

「なつたわ」

麻耶はそう言つて、松の木の幹を背にして立ち、のびやかな裸身をやや斜めにそらすようにして、挑発的な瞳の色で悠を見つめた。ワンピースに隠されていた、乳房から下腹までの日に焼けていない部分の青白い肌が目にしみるようだ。さすがに片手は乳房を、もう一方の手は下腹の繁みの部分を覆っている。中学二年生の少女の肢体は若鹿のようにのびやかで、眩しいほどの健康美を発散させている。

「……」

悠はカメラを構えて真正面に立った。やはり全裸の美少女を前にして胸は激しく動悸し、喉はカラカラになる。手の顫えを隠すのに努力が必要だった。

「現像、どつするの？」

「友達が写真部にいて、暗室を持ってるんだ。そこを借りて現像するよ」

「わたしのヌード、悠兄さん以外の人に見せたらダメよ」

「見せるもんか」

それで安心したのか、麻耶は乳房と下腹を隠していた手をどけた。松の幹に背を凭れかけるようにして、両手は後ろで木を抱くようにする。

「じゃ、写して……」

ふつくと碗の形に盛りあがった乳房と、ピンクよりやや赤みがかつた色の乳首がさらけ出された。平らな下腹は微妙なカーブを描いて下端でふくらみ、女らしい秘丘のたたずまいを形成している。やはり一人前の女性の肉体となるために、脂肪がつきだす過程なのだ。ほっそりとしてはいるが、胸と腰のふくらみは充分に女らしくなっている。

そして、羞じらいの丘を優しく覆いだした黒くけふる萌え草。その形はほぼ扇状に逆三角形に広がり、一本一本は細く艶やかで、指でもちぎれるのではないかと思うほどまっすぐで柔らかかそうに見える。

悠は妹の幼い裸身を風呂あがりなどに見た経験があるが、美咲の無毛の秘部は立ったままの upper body でくっきりと縦の谷間が見える。麻耶の場合、秘裂は恥叢の下端にわずかに覗けるだけで、腿をびったり密着させると正面からはほとんど見えなくなってしまう。少女は成長するにつれて秘裂が後方へ移動してゆくのだろうか。

「きれいだ……」

悠は賞賛の言葉を投げかけ、処女のまばゆい裸身を網膜に刻みこもうとするかのようにシャッターをきった。

何枚か写してゆくうちに、ふたりのあいだの緊張が和らいだ。

「ぼくにヌード写真を撮らせたなんて学校に知れたら、退学だぜ」

「そうだね。死刑にされるね……」

そんな冗談をかわす余裕も出てきた。

「ね、今度は後ろをむいて」

まっぴだかの従妹に命じると、素直に松の幹に凭れかかるようにして、年上の少年にくりんとした可愛い臀を向けた。

「ごっつ？」

「そっちなあ……。もう少し上体を前に倒してくれる？」

「お臀をあげろってこと？ ーじつ？」

やや両脚を開きめにして前かがみの姿勢をとったので、青みのある白い新鮮なりんごのような、まるい臀がまんなかの谷を上げる。

正面からは見えなかった秘裂が、谷間の奥から悠の目に飛びこんできた。

大陰唇は脂肪を蓄えてきてぼつたりとしてきて、小陰唇はその内側に折りこまれているから、縦にくつきりと刻みこまれた線が見えるだけだ。

成人した女性なら秘毛が大陰唇が飾るように生えているものだが、十四歳の萌えだしたばかりの恥草はまだそこまで繁茂していなくて、全体にシンプルで清潔な眺めだ。しかし、妹の幼い時期の秘部しか見たことのない童貞の少年にとっては、やはり瞳孔に官能の矢を打ちこまれたような衝撃的な光景だった。

「すてきだ……！」

悠の切ないほどに真情のこもった賛嘆の言葉に、無垢の処女はやや頬を紅潮させ、

「いやだ。悠兄さん、わたしのあそこ、見てるのぉ？」

羞じらった様子を見せながらも、それでいて健康そうな筋肉のついた腿を合わせようとする意志も見せない。

悠は夢中でシャッターを切った。

「もつと、脚をひろげて」

「やん。エッチ」

口では拒否しながら、おすおすと股を拡げてみせる。その動作がいじらしい。

しかし、やはり従兄に女のもつとも秘めやかな部分をさらけ出して見せている という意識があって羞恥心がわいてきたのか、松の幹に両腕を組むようにしてあてがい、顔を肘と肘の間にうめてしまう。

それでいて、誘惑するかのようにはまるいヒップを揺すぶる仕種もしてみせるのだ。その誘惑にのって、青い果実のような若々しい硬さを秘めた肉の球体を手で打ちすえたくなる。

悠はしばらくシャッターを切るのも忘れて従妹の魅惑的な、新鮮な裸身をうつとり眺めていた。木洩れ日がお臀の表面にあたってうぶげを金色に輝かせ、微細なそれがふるふると顫えるさまを浮きあがらせ

る。

もし画家がいまの麻耶を描くとしたら、牧神を誘惑して森の奥まで誘いこんだ悪戯なニンフがつい調子にのったあまり逃げ道を失い、好色な半獣神に追いつめられて狼狽し、恐怖と羞恥に顫えおののいている というイメージでとらえるかもしれない。それは美しい牝を前にした牡が抱く、サディスティックな肉欲をそそる眺めだった。

悠がもつと野卑で粗暴な性格の少年だったら、その場で全裸の麻耶の背後から襲いかかり、押し倒したかもしれない。しかし繊細でうぶな少年は無邪気に自分を信じて裸体を晒している少女の眩しい裸身を、フィルムが切れるまで写し撮っただけで、

「もう、いいよ」

ちよつとかすれたような声で告げたのだ。

「え、いいの？」

「うん。フィルムがなくなった」

「なあんだ……」

悠は、従妹の反応に、なんとなく物足りなげな感情がこめられているように思えた。すると少女は、自分の性をさらけ出す猥褻なポーズをとらされていることをいやがるどころが、かえって悦んでいたのだろうか。

麻耶は松の幹に背をもたれさせるようにした。

「ね、キスしてえ……」

甘ったれの赤ん坊がするように両手を差し出して従兄を招く。悠はまるで蜜に誘われる蜂のように彼女に近寄り、一糸纏わぬ暖かい裸体を抱きしめて接吻してやった。

「……」

麻耶の両手が、悠の羽織っているシャツの下に滑りこみ、胸板や背中を愛撫しだした。昨夜は見せなかつた積極的なしぐさだ。柔らかかな手と指で肌をまさぐられるのは気持ちよかつた。ごく自然に悠の手も少女の胸のふくらみをまさぐる。それはつきたての餅のように柔らかで弾力に富んでいた。

「あ……、ん」

撮影中からツンと突き出していた乳首を指でそつと触ると、麻耶はピクツと体を顫わせるのだった。そしてまるでおかえしのように彼女

の手は悠の水着の上から股間のふくらみに伸びて、そつと撫でる。

「あ……！」

今度は悠がびくつと顫わせた。弾力性のある水泳パンツの繊維に押しさえつけられながらも、痛いほどに勃起しているペニスを触られると、ほんの少しの刺激なのに快美な電流が走ったからだ。

「ふふつ。悠兄さん……。これ、勃起してるっていうんでしょ」

悪戯っぽく笑う麻耶だ。

「そつさ。男って女の子の裸を見るとこつなるんだ」

「でも、こんなになるなんて……」

水泳パンツの上からもつと大胆に輪郭をなぞるように触れ、揉むようにしてくる。悠は甘美な感覚に下肢の力が抜けるようで、麻耶を抱いたまま下生えの草の上に横たわった。

「約束よ。見せて……」

仰臥した従兄の上から覆いかぶさるような体勢になった麻耶が、熱を帯びた声で囁く。

「ああ」

彼女の手が悠のほっそりした腰にのび、水泳パンツの腰ゴムに伸びた。

「脱がすわ」

悠は臀を少しもちあげるようにして麻耶の行為に協力した。

「わっ」

麻耶が驚きの声をあげる。まるでバネ仕掛けのように、水着に押さえつけられていたペニスがピンと直立したからだ。

「……すつごーい！」

生まれてはじめて蛇を見た幼児のように、麻耶の瞳のなかには畏怖と好奇の混じりあつた感情がこもっていた。

「麻耶の裸見て、こんなになるのぉ？ 信じられない……」

すっぱだかの麻耶と接しているうちに、悠の牡の器官は充血しきつて怒張の極に達していた。それはほとんど直立に近い角度で天を睨み、包皮は後退して亀頭の大半を露出させている。悠は童貞だから亀頭はふだんピンク色なのだが、充血したいまは鮮やかな紅色を呈しており、尿道口からは透明なカウパー腺液がにじみ出て亀頭全体をツヤツヤと濡らしている。

「これが女のひとのあそこに入るなんて……。ほんとにできるのかな。痛いだろうなあ」

そうやってまじまじと麻耶に見られると、やはり悠はヘンな気持ちになる。もちろん恥ずかしいのだが、そうやって勃起したペニスを従妹が目を丸くして感嘆しているのを見るのはちょっと誇らしくもあり、悪い気分ではない。

「まるで医者さんごっこだな」

「そう言いつと、」

「ほんとね」

クスツと笑い、さらにまじまじと眺め、

「わ。濡れてる」

「昂奮すると、そうやって濡れるんだよ」

「へえ」

おそるおそる手をのばしてきた。

「触つて、いい？」

「いいとも」

砲身の部分に指が触れて、

「わあ、熱い。熱くてドクドクいつてる」

また無邪気な声を張りあげる麻耶は、クンクンと鼻をならして、

「ちよつと匂いがするのね。あ、これ、イカの燻製みた……」

(なるほど。そういえばそんな匂いかもしれない……)

悠は感心した。

「ね。精液はどうやって出るの？」

「こすると出るんだよ」

自分の手をあてがって教えると、

「ごっつ？」

幹にからめた指を動かす。

「そつ」

「オナニーするときも、ごっつやって？」

「そつだよ。単純に言えばね」

「ふうん」

目をキラキラ輝かせながら、美少女は従兄に教えられたとおりペニスをしごく動作を続けると、鋭い快美な感覚が走って、

「あ……」

悠は呻いた。

「痛いのか？」

びっくりして手を離す麻耶。

「ちがうよ。気持ちがいいんだ」

「そっなの？」

「もつと……、やってくれないか」

「射精するまで？ いいわ」

また指がうごめいた。尿道口から透明な液がさらに滲み出て糸をひくように滴る。亀頭がますます充血して鮮紅色に変化した。

「うっ……、む」

悠はまた低く呻き、腰をよじった。

「ああ、あつ」

裸身をのけぞらせた。

「うっ、くく……！」

ぎこちない指使いだが、美しい従妹に自分のペニスを玩弄させている。という自覚が彼の昂奮を高めている。

「気持ちいいのね。悠兄さん……」

見上げると、悠の股間に顔を近づけている麻耶の頬は紅潮し、瞳は発熱したもののように潤んで、声も心なしかうわずっている。上唇の上に汗の粒が浮きだしていた。悠は手を伸ばし、揺れている麻耶の乳房をまさぐって弾力に富んだ手応えを楽しんだ。

（ヘンなことになったなあ。松林のなかでふたりともまっ裸になって、ペニスを触られたり、おっぱいを揉んだりしてるんだから……）

悠は夢を見てるようなボウツとした気持ちになる。腰から下が甘く痺れて溶けるようだ。

「うふ。そうやって揉まれると、麻耶も感じちゃうわ……」

少女はいやがらずに乳房をさわられるまま、自分は従兄の股間に注意を熱中させている。やがてズウンと快感の波が押し寄せ、しだいに高まり、ついにはある一線を越えようとする。「麻耶……！」

従兄の声に切迫したものを感じとって、

「悠兄さん。射精しそっなの？」

指をとめて訊いた。

「そう。……止めないで。そのまま、もっと強く……」

「精液が出るどころ、見たいわ」

「うん。見せてあげるよ。……あ」

もうしばらく力をこめてしごかれると、そこで限界を越えた。

「うっ！ 出る」

「出して。悠兄さん！」

悠の視界が一瞬、白く薄れて、強い電撃のような感覚が下肢から全身へ突き抜けた。

「む、うっ、うっ」

ぴいんと四肢を突っ張らせ、背筋がのけぞり、太腿と下腹の筋肉がぶるぶると痙攣した。

「あ」

尿道口から白い液体 牡の欲望を凝縮させたエキスが噴出した。

若く逞しい器官が麻耶に握られたままびくんびくんと収縮して、つづけざまに粘っこい液を二度、二度、四度と宙に噴きあげた。

「出たわ！」

麻耶が嬉しそうな声を張りあげた。

独特の青臭い匂いがする液体は、麻耶の頬、胸、そして腹にまで飛び散り若いつややかな肌を汚した。もちろん指にもねっとりまとわりつく。

「うわあ。ずいぶん出るのね。こんなに……。あ、ほんとだ。栗の花の匂い……」

指についた精液の匂いを嗅ぐ麻耶の表情はうっとりとしている。

年下の美少女にペニスをしごかれて射精まで導かれた悠は、ぐったりとして仰臥したままだ。麻耶は充分に若い牡がたつぷりと噴き洩らした精液の匂いを嗅ぎ、ぬるぬるした感触を確かめた後で、持参したタオルで従兄の下腹を拭い清めてやった。

「まあ、すごい汗……」

男性のオルガスムス発現の程度にも個人差があるようだ。悠の場合は爆発的に全身が痙攣し、意識が朦朧となり、全身が汗みずくになる。人よりも射精オルガスムスの緊張と解放の落差が大きいのだ。だから射精後は消耗感が強く、しばらくは言葉も出ない。

麻耶は自分の指の刺激で絶頂させてやれたのが嬉しくてならないように、荒々しく息をついている仰臥した年上の少年におおいかぶさるようにしてキスしてくるのだった。

「ね、麻耶にしてもらって、すごく気持ちよかった？」

「ああ……」

ようやくわれに返った悠は、麻耶を抱きしめた。彼女も昂奮しながら汗をかいたらしく、肌は甘酸っぱい汗で湿っていた。

「一度出しちゃうと、もうダメなの？」

麻耶はまだ興味津々という表情で訊く。

「大丈夫だよ。少し休めば……」

「そう？ どれくらい？」

「うーん、場合によるな……。相手が昂奮させてくれれば、それだけ早く元気になる」

「昂奮させる、って？」

「もし麻耶が、あそこを見せてくれたら、ピンピンに立つよ」

「えーっ、やだっ。誰にも見せたことないもん……」

「嘘つけ。令子先生には見せただろう」

レズの気がある家庭教師が、キスだけしか麻耶に教えなかったわけではない。と悠は思っている。凶星らしく、麻耶はちょっと口ごもった。

「それは……、そうだけど」

「それに、指で可愛がられたんだろう？」

「……うん」

意外と素直に白状した。

「だったら、ぼくもしてあげるよ。麻耶にしてもらったから、おかえしに……」

「うーん……」

ちよっと首を傾げるようにして考え、ニコツと羞じらいの笑みを浮かべた。

「じゃ、して……」

オールヌードの少女は、仰臥したままの従兄の胸の上に跨る姿勢をとった。上体を前に倒し、体重を悠の顔の両側に置いた腕で支える。そうするとまったく覆うものない下腹部が悠の顔のま上にきた。

「ああ……」

まぢかに美少女のもっとも秘めやかな部分が展開されていて、その光景が悠の理性を痺れさせた。股間をぐっと割り上げた結果、大陰唇は大きく割り裂かれ、内側の小さな唇 熱帯の花の花弁にも似た器官が内側から爆ぜるように露出している。

悠はツンと鼻腔を刺激する酸っぱい匂いを嗅いだ。処女は膣周辺の分泌が活発なうえに、性器をていねいに洗う習慣がないため恥垢がたまりやすく、そのために不快な臭気を発散させるといわれているが、麻耶は海に入っていたからか、それとも局部を清潔にする習慣がついているのか、決して不快な匂いではなかった。

ふわふわと頼りなげな恥毛の下、ちよっと小鳥の嘴のように皮膚が突き出している。それがクリトリス包皮なのだが、まだ女体の構造に詳しくない悠には、その下に真珠にも似た敏感な肉芽器官が隠れていることをまだ知らない。董色がかった花びらは両側にほころび開き、その奥にあざやかなピンク色の粘膜が、濡れて光っていた。

「きれいだ……」

思わず指をのばして、やわらかな肉の花びらを拡げる。

「……!!」

はじめて異性の指に秘唇を触られて、早熟な美少女はやはりびくんと身を顫わせた。

「悠兄さん……。そうっとして、ね」

低い声が緊張している。やはり処女器官を弄られるのが怖いのだ。

「ああ……」

粘膜の部分がもっとよく見えた。濡れてキラキラ光っている。まるで涎のように、粘膜の奥から溢れたうす白い液体は会陰部にかけて溢れだしている。

（濡れているってことは、これまでのことで麻耶も昂奮してるんだ……）

はじめてそのことに思い当たった童貞少年だった。

「きれいだよ、麻耶」

そう賛嘆して指をそつと濡れた粘膜に沿って這わせると、

「あ……」

低い呻きを洩らし、四つん這いになった少女は腰を揺すった。

「感じるの？」

「うん……」

（入口はどこだろう……）

指でさらに探索してみる。粘膜の構造は一見ただけではどうなっているのかよくわからない。少年の頭には雑誌などで得た知識として腔を単純な円筒形のものと思い描いている。

（なんだか、よくわかんないな……）

粘膜の部分を弄っていると、

「あつ」

麻耶が小さな悲鳴をあげた。腔開口部、つまり処女膜がガードしている部分を触られたからだ。

「ごめん、痛かった……！？」

「そうでもないけど……」

「敏感なんだね」

悠もようやくその部分がペニスを受け入れる個所だとわかった。しかし、肉眼で見ると珊瑚色の粘膜の通路はいかにも狭く、自分の怒張したペニスがそこを通過できるとは思えなかった。実際には、昂奮した牝の受け入れ器官は性行為時には充血して膨張し、十分に伸展するのだ。ただし麻耶の場合、処女膜があるので、いずれにしてもその部分を切り裂いて侵入しなければならない……。

悠は処女膜のことを、やはり膜状のものだと思っているので、実際に目で見て、触れているのに気づいていない。

（処女膜って、もつと奥にあるのかな）

不思議に思っていると、粘膜の奥から透明な液がさらにとろりと溢れだしてくる。まるで昆虫を呼ぶための蜜のようで、少年は無意識に誘われて唇を突き出し、舌でそれを受けた。

「やん」

秘唇の敏感な粘膜を舌で舐められ、十四歳の少女はちいさく叫んだ。まさか唇で攻撃されるとは思っていなかったからだ。

(甘い!?)

蜜のような液体が最初に舌にのせたときはちよつと塩からく、それでいて微妙な甘味をとまなっているようにも感じられ、悠は味覚を疑った。

(女の子の体って、すてきだ……。唾もラブジュースも甘いのか)

歓喜して悠はとろとろ溢れてくる麻耶の愛液を舐めすすった。

「やあん、悠兄さん……。あ、はあっ」

従兄の唇の襲撃を美少女が腰をうち揺すって逃げようとするのを、悠は両腕でヒップを抱きかかえるようにして押さえこむ。

「む、うっ……」

悠の舌の刺激は、あきらかに十四歳の少女に快感をあたえていて、それにクンニリングスの行為はどうやら家庭教師の女子大生が教えこんでいたらしく、麻耶は一度押さえつけられると逃げようという動きをみせず、逆に悠の顔に自分の秘部を擦りつけるようにしてきた。

少女の動きは自分のもつとも感じる部分　クリトリスを刺激してもらえるように悠を誘導しているので、

(そうか……)

鳥の嘴に似た包皮はクリトリスを覆っていることに悠は気がついた。

「あ、ああん!」

悠が指で花びらの上端をひろげて、濡れて艶やかに光るぼうちりした肉芽をようやく探りあて舌で刺激してやると、麻耶は驚くほど大きく鋭い声を張りあげて、びくびくと太腿をうち顫わせた。

「もつと、もつと……」

痛い思いをさせたのか、と性的な愛撫に無知な少年が動作を止める　と、早熟な美少女は甘えるような声で催促し、微妙なリズムで腰をうち揺すりだした。

(感じてるんだ……。このまま攻めれば、いくかもしれない)

悠が思ったとおり、しだいに麻耶の呻きは悩ましさを増し、時どき「ひっ」という悲鳴や、「くく」と嚙り泣くような声もまじり、さらに「ああん」という悩乱の聲が高まっていった。しかし、その姿勢のまま背をそらし、右手を後ろへまわして従兄の股間をまさぐる。それは再び凜々と力を漲らせて屹立している。

「すごい……」

泣くような歌うような声で言い、麻耶は指をからめて悠をしごきた。
した。

「あ、うっ」

快美が湧きあがり、悠も腰をうち揺すりだした。

そして、

「悠兄さん……っ。いく。……麻耶、いっちゃうー！」

そう叫んだかと思うと、恥骨を思いきり悠の顔にぶち当てるような激しいヒップの振動をともなった痙攣がきた。ぶるぶると全身がわななき、ぐっと上体が弓なりにのけぞり、悠は熱い濡れた太腿で両の頬を強く挟まれた。

「……あ、ああっ、はっっ。……あっ」

二度、三度と断続的に裸身を痙攣させ、やがて緩慢に力が抜けた。

悠は悩乱の叫びとともに吐き出された大量の愛液を啜りあげ、飲みこんだ。そのとき、自分もまた絶頂した。麻耶の嬌やかな指にくるまれたまま。ドバツと牡の欲情を凝縮した液を噴きあげた。

「ああっ、麻耶！」

悠は懐かしい麻耶のヌード写真を見ながら一年前のことを回想して激しく昂奮し、従妹の名を呼びながら、その日二度目の放射を遂げた。

第二章 偽りの母

1

その週末、黒須圭の告別式が、黒須一族の菩提寺、麻布のF 寺
でとり行なわれた。

渡米中の悠の父は参列できるわけもなく、弟の浩も、当日はパソコ
ン・クラブの会合があるといって敬遠した。

「だって、圭兄さんとはほとんど話をしたこともなかったもの」とい
うのが彼の言いぶんである。

淫雨の降りやまぬ暗鬱な日であった。それでいて蒸し暑く、じっと
りと肌が粘る。

甥を弔うための衣装として、美夏絵は黒いオーガンジーのフォーマ
ルドレスを纏った。悠は、年増ざかりのふくよかで肉感的な体つきの
母親には、和服よりもドレスを着たほうが似合うと思っっているから、
彼女が洋装したことでなんとなく嬉しかった。

そんな息子の喜ばしい気持ちなど知らぬ気に、ハイヤーに乗って寺
に向かうあいだ、美夏絵はまるで彼女自身の子供を失ったかのような
うち沈んだ様子で口数も少なかった。

(ママは、どうしたのだから……?)

甥の悲報を聞いた直後、まるで悠を奪われまいとするかのようにしっ
かり抱きしめたときから、母親の態度にはなにか取り乱したような不
可解なものが感じられる。

寺の本堂に入ると、喪主の黒須菜穂子は緋の喪服にほっそりした体
を包んで祭壇の傍に座り、ほとんど言葉を発しなかった。感情は悲し
みの極限をとおりこしたのか表情は能面のように凍り、弔問に答える

姿には喪服の女に特有の、一種凄艶とも思える美しさがたたえられていた。

娘の麻耶は、母親の横でA 女学院の夏の制服を着て、やはり俯きかげんにちんまりと座っていた。

制服は紺のベストとボックス・プリーツのスカート。ベストの下は白い半袖ブラウスに臙脂のポウ・タイである。登下校のときはやはり臙脂色のベレーをかぶる。

悠に気がついたのかどうか、まったく表情に変化はない。

「ほう。麻耶ちゃんはますます美人になった……」

親戚たちが場所柄もわきまえずそう賛嘆して語りあうのが悠の耳にも入ってきた。

悠と麻耶は去年の夏に別れてからは、やはり会うこともままならず、手紙を二、三度やりとりしただけである。悠もしばらく見ないあいだにめつきり大人びた麻耶の成長ぶりに驚かされた。以前の乳くささを感じさせるあどけなさが薄れ、もつと清冽で、近寄りがたいような気品がそなわってきている。

（ふうん。女の子って、こんなふうに変わってゆくのか……）

去年の夏、自分にああやって甘えて性的な遊びを楽しんだ麻耶とは、もう別人のような気がする。それは寂しい気もしないではないが、いとこ同士の少年少女の幼い愛など、そういったふうにならぬに消えてしまふようになっていくのかもしれない。

「しかし、菜穂子さんも圭を甘やかしすぎたね。好きなものはなんでも買ってやったし、やりたいことはやらせていた。あんなに高価なスポーツカーを持たせることが、そもそもまちがいだった」

「いつたい、どうして崖から落ちたりしたんですか」

「いやあ、はつきりしたことはわからないのだが、なんでも碓氷峠の旧道をもう一台の車と競走するようにして下りてゆくのを見た人がいるんだよ。たぶん、若い者同士が負けん気を起こして、抜きつ抜かれつの勝負をやらかしたんじゃないかね」

住職を待つあいだ、親戚同士のひそひそと囁きかわす雑談が断片的に悠の耳に入ってくる。「これで、菜穂子さんのところも男の子がいなくなってしまうな……」

「こついつことになるとわかっていたらねえ……」

悠はちょっと奇妙な感覚に襲われた。親戚たちが一樣に、悠が近くとハツとしたように会話を中断させ、なにか意味ありげな視線を向けてくるのだ。周りの者となにか目配せをしたりするようにも思える。(どうしたんだろっ? おれがなにかしたというのだから……)

自分のことが一族の話題になるはずがない。気のせいだろう。と悠は思った。

読経が始まった。

正面の祭壇に飾られた従兄の圭の、映画スターになってもいいほどハンサムな遺影を見上げた。容貌は女たらしと謳われた父親ゆずりだ。悠は不思議な気持ちになった。

(圭兄さんとはあまり親交がなかったけれど、顔はぼくと似てないこともない。人を小馬鹿にするようなイヤ味なところがあつたけれど……)

考えてみれば、自分のいとこたちもほとんど全員が理工系にすすんでいる。そのなかで圭は文学部を選んだ。悠も自分では理工系の才能に恵まれてはいないから、文系にゆこうと考えているところだ。

(だとすると、ぼくも一族のなかで異端児なのだ。圭兄さんと同じに……)

才能は容貌に現われるものだろうか、と悠は訝った。容貌に理工系と文科系のちがいがあるとすれば、圭とよく似た顔たちの悠は、やはり文科系の血なのだろうか。

読経は長かった。悠は退屈になり、喪主席にいる麻耶の横顔を眺めていた。神妙に双眸を伏せてはいるが涙を流すでもなく、あまり悲しみに浸っている様子には見えなかった。

以前から圭と麻耶の兄妹は仲がよさそうではなかった。もっとも、男と女のきょうだいはいは、どこでもそんなものかもしれない。幼いときは仲がよくても、ある程度大きくなると自然と距離が開いてしまうようだ。どちらも相手のことがわからなくなるからだろうか。

(そうでもないか。男同士だってそうだ)

悠は自分と、二歳年下の弟、浩のことを考えてみた。おたがいに小学生だった頃はけっこういっしょに遊んだ記憶もあるが、そのうち、相手は相手、自分は自分というふうになり、いまでは兄弟喧嘩さえめつたにしくなつた。自分が圭のように急死しても、弟は涙を流すだろ

うか。悠はわからなかった。悠にしても、親しみの感じられない、冷たく理知的な父親や弟が死んでも、悲嘆するとは思えない。

(肉親の愛情ってなんだろう……?)

そんなことを考えているうちに参列者の焼香が始まった。

その列に、プロレスラーにしてもよいくらい堂々とした体格の中年男性がいるのを悠は目にとめた。もみあげに白いものが混じっているが、肌はよく日に焼け、男くさい野性的な魅力が仕立てのいいスーツやシャツから滲み出ている。

親族たちがひそひそ囁きかわした。

「ほう、石堂ではないか」

「京伍さんの死んだあとも出入りしているのかね」

「まあ、菜穂子さんがブティックを出したのは、あの男の持っているのと同じビルだからな

……」

(何者だろう?)

悠は不思議に思った。学者の家系である黒須一族とはまったく違った世界に住む、どこか芸能人めいた派手な雰囲気当场者がいだったからだ。

男は焼香をすませて菜穂子に黙礼する。そのとき、一瞬視線が絡みあい、喪主のそげた頬にサツと赤みがさしたように思えた。

「あの人、誰？」

悠は隣の母親に訊いてみた。

「石堂健介さん。京伍叔父さんの知りあいよ。赤坂でレストランを経営しているの」

母親はそれ以上、説明しようとはしなかった。しかし、京伍叔父の友人であれば、彼の子息の葬儀に参列するのは当然だろう。

「ふうん」

悠はそれで納得した。

弔いの儀式は終わった。遺体は茶毘にふされてすでに骨壺に収められているから、出棺などの儀式はない。石堂はアイボリー塗装のメルセデスベンツ五〇〇SELという高級車に乗りこみ、去っていった。

終わると午餐どきであり、寺の奥座敷で親族一同の会食があった。

悠はすぐに席をはずした。食欲もなかったが、伯父や叔母たちが彼の

ほうになにげない様子で向ける視線が、やたらに気になってわずらわしかったからだ。

(どうしてなのかな？ ぼくの神経のせいなのか……)

本堂の縁側でぼんやり庭を眺めていると、

「悠兄さん……」

背中から声がかげられた。ふり返るまでもなく麻耶だとわかった。

「しばらくぶりだね、麻耶……」

ちよつと背も伸びたような従妹を眩しげに見上げると、

「うん」

わりとケロリとした表情で制服姿の美少女は腰をおろし脚をのばした。

「正座してたらすつかり脚が痺れちゃったわ」

ごく自然に肩をすり寄せてくる慣れ慣れしさは変わっていない。甘い髪匂い、肌から立つ石鹸の香りにひそむ若い牝の体臭がかぐわしい。

去年の夏より、美少女は一段と成熟している。

「圭兄さんのことは、大変だったね……」

そう慰めると、麻耶は案外ケロリとした態度で、

「だけど麻耶、兄さんが死んでもあんまり悲しいと思わないんだ……。だって、そんなに話もしなかったし、向こうも麻耶のこと、気にもかけてないみたいだったし……。それに、大学に入ってから始めちゃめちや遊びだして、ママに心配かけてばかりだったから……。死んだのも自業自得みたいだしね」

ハツキリ言い、ふふっ、と笑うのだった。

「それより、悠兄さんに会えないほうが、よほど寂しかったわ……」

急に真面目な顔になって言った。悠はちよつとびっくりした。去年の夏に別れてから、麻耶は自分の世界のなかで楽しくやっていると想像すると思っていたからだ。ところが麻耶は麻耶でずっと悠のことを想いつづけていたらしい。その心根が嬉しくもあり、いじらしくも感じられて、悠は人目がなければ思いきり少女を抱きしめてやりたい衝動に駆られた。

「ぼくだって、そつだよ」

そつ言つと、麻耶もまた、

「悠兄さんはあれからガールフレンドができて、楽しくやってるんだと思っっていたわ」

「ほくも麻耶のこと、そう思ってたけどな」

悠は苦笑した。麻耶は溜息をついて呟く。

「いとこ同士なんだから、もつとたびたび会えるといいのにな……」

「麻耶があまりにも美少女だから、会いにくいんだよ。綺麗な花は手折られないように誰もが監視してるから……」

会食の席からは、酒が入ったせいで一段と声高に話しかわす親戚たちの賑やかな様子が伝わってくる。

「あーあ。うちの親戚って本当にいやあね。いまだってみんな、圭兄さんのことなんかそっちのけで、誰がどこの大学の教授になったとか、今度は勲章をもらえるだろうとか、息子はどこそこの令嬢と婚約しただの、そんなことばかり話してるわ。もう、うんざり……」

「しかたがないさ。一族が顔を合わせるのはいった冠婚葬祭のときだけなんだから、あの人たちにとっては自慢話や情報交換の絶好のチャンスなんだ」

「じゃ、わたしたちも絶好のチャンスを有効に利用しない？」

麻耶がキラリと目を光らせ、悠の手を握りしめてきた。悠はどぎまぎした。周囲には親や親戚たちの目がある。

「おい。ここはお寺だよ……」

「こつちへ来て」

麻耶は悠の手をひくようにして本堂の裏側へと彼を導く。そっちは兩戸も障子もたてきつたままで暗く、人の気配もなかった。

「ここならだいじょうぶよ。昔、法事的时候に、子供たちだけで隠れんぼして遊んだことがあるの……」

物置部屋らしい小部屋の板戸を開けた。はかば薄暗く、抹香の匂いとともにかび臭い匂いもこもっている。どつやらなにか祭事などに使う用具の類をしまっておく部屋らしい。座蒲団の類なども積みあげてある。光は高い窓からわずかに差しこむだけだ。

「ここだったら平気よ」

あるいは今日、悠と会うことを考えて前もって探索しておいたのかもしれない。その狭い部屋のなかに従兄を導くと、麻耶はすぐ抱きついてきた。

「ね」

接吻を交わす。舌と舌をからみあわせ、たがいの唾液を飲み、飲ませあう情熱的な若者の接吻だ。十五歳になった麻耶の体から発散する甘酸っぱい匂いが、悠をたちまち欲情させた。ペニスにどくどくと熱い血が送りこまれてたちまち下着を突っ張らせる。

「麻耶……」

悠は積み重ねてある座蒲団を二、三枚とって床板に敷き、その上力が抜けてぐんにやりとなった少女の体を横たえた。その上から覆いかぶさり甘い唇に吸いつきながら、制服のベストの前のボタンを外す。やはり本能的に男の手は乳房に伸びるのだ。

顫える手で臍脂色のタイをほどき、ブラウスの前をはだけると、スリップは着けていなくて下は白いブラジャーだけだった。カップの周囲を可憐なレース飾りで縁取った薄いコットン素材のブラジャーの上から掌でふくらみを包む。布地をとおして乳首が硬くしこっているのがわかった。やわらかく揉み、

「おっぱい、大きくなったな」

あきらかに去年の夏に愛撫したときよりも、乳房のふくらみは増していた。前は掌でくるみこんでも余裕があったが、いまはちょうどすっぽりと収まる。まるで悠の掌にくるまれるために存在している器官ように。

「うん。去年よりワンサイズ大きいブラが必要になったもの」

しばらく愛撫してからカップを上にもすりあげ、白い桃のような乳房の丘をあらわにする。ピンク色の乳首が充血して赤みを帯び、ツンと尖って昂奮のあまりチリチリ顫えているさまがいらしい。彼の愛撫を待つ突起に、迷わず悠は唇をあてがい、赤ん坊のように含んだ。

「あ……」

深い溜息のような声を出し、美少女はびくんと顫えて従兄にしがみつくようにする。悠は唇と舌と歯をつかって敏感な尖りを愛撫しながら、スカートの裾へ手を伸ばし、たくしあげた。ソックスを穿いただけの白いのびやかな脚が二本とも腿まであらわにされ、しっかりと筋肉のついて皮膚の張りつめた内腿の感触をしばらく悠は楽しんだ。それからそつと腿の付け根へと指をすすめてゆくと、すぐに柔らかい布片に包まれた熱い湿った肉に触れた。

悠はパンティの上からその湿地帯を念入りに探索し、麻耶がそれとなく教えてくれた技巧の記憶を取りもどした。そうつと秘唇に沿って指を何度も上下させてゆくと、敏感な肉芽を保護している包皮の位置が確かめられ、

(ここだな……)

見当をつけて一本の指をそろえてやわやわと揉みこみようにすると、

「あ、あつ。いい……!!」

自分の一番お気に入りの部分を適度な強さで刺激され、麻耶は喜悦する声を洩らしてびくびくと身をうち震わせるのだった。

悠が熱心にそこを中心として指の愛撫をくわえつつけると、まるで尿を洩らしたかのようにパンティは濡れそぼり、肌と擦れあって淫靡な音をたてだした。悠はたまらずにパンティをすくると脱がしてしまう。下腹に顔を近づけると、去年の夏に嗅いだ磯くさい少女の匂いが懐かしく鼻を刺激するようにたちのぼっている。

(ああ、この匂いだ……)

恥草の繁みは前より濃密になっている。小陰唇の花弁もやや広がって見える。以前はきっちり肉の亀裂のなかに畳みこまれているのが、いまはすこしセピア色ついた端の部分がふだんでも露出している。つまりそれだけ内側の粘膜も成長したわけなのだろう。

悠は喉の渴きを覚えた旅人が湧水を飲もうとするように、麻耶のあからさまに割り上げた下肢の付け根、微かに尿の匂いもする圍に顔を埋めた。もう一つの唇に似た牝の器官にくちづけると、

「あ、うっ、う……。いや、あん……!!」

ぶるぶると体をうつ顫わせ、ぐぐつとしがみついていた。両の腿は強い力で悠の顔をはさみつけ、捕捉してしまう。

「あ、はあ……」

悠はかぐわしい蜜液を溢れさせる粘膜地帯を舌で探索し愛撫した。痺れきる前の理性が束の末、

(圭兄さんの葬儀が終わったばかりなのに、ぼくはこうやって彼の妹に淫らなことをしてる

……。なんて不謹慎なんだ……)

後ろめたさを覚えさせないでもなかったが、すぐに少女の秘部の魅惑的な眺め、匂いに刺激されて欲望が沸騰し、その内省的な思考を吹っ

飛ばしてしまっ。

「あ、うっ……ん！ もっ……。 あっ」

早熟な美少女は秘部を従兄の口唇に吸い舐められるがままにさせて、快感に身をゆだねてさかんに呻き、悶える。

悠は、敏感な肉の尖りの部分を中心としてとろとろと蜜液を分泌させて潤う紅鮭色、珊瑚色の粘膜を舌と唇で刺激してやった。

麻耶は、やがてひとときわ高い声を張りあげると、あっけなく絶頂した。悠の頬をはさみつける腿の筋肉が痙攣し、強い力で締めつけてきた。

「う、うっ……。 悠兄さん……っ！」

しばらくして全身の緊張が溶けると、それまできつく閉じていた双眸をパツチリ開け、羞ずかしそうに、

「イツちゃった……」

熱い吐息とともに悠の頬に言葉を吹きかけ、汗ばんだ体を押しつけて抱きついてきて、自分の蜜で濡れた悠の唇に唇を押しつけてきた。

「暑いな」

悠は制服を着たままで、下着が汗でべとついている。愛撫に夢中になっっている若い男女は激しく発熱するものらしい。閉めきった部屋のなかに若い牡と牝の体臭がむっとこもっている。「ね。脱いで」

悠は上着とズボンを脱いだ。ブリーフの前は下から突きあげるもの力で張りさけそうなほどだ。麻耶は今度は自分が愛撫する番だとばかり、濡れて円形のしみを作っている下着の上から美少年の器官を撫でて、嬉しそうな声を弾ませた。

「わ、すごい……。こんなに立って」

一年前の夏、松林のなかでそうしたように、悠は仰臥した。麻耶の手がブリーフを脱がせると、バネ仕掛けのように勢いよく天を衝くペニス。

「悠兄さんったら、元氣いいんだ……」

「麻耶のせいだよ」

「ふふっ。おいしそうな匂い。食べちゃいたい……」

美少年は完全に亀頭を露出している悠の欲望器官に鼻を近づけて匂いを嗅ぎ、懐かしそうに言い、それから繊やかな指を絡めて最初はそつと、ついでしだいに荒々しくしごきたてた。「あ、あア……」

悠は喘いだ。

「わあ、こんなに濡れてきて……。どんな味がするのかな？」

麻耶がいきなり、若い力をみなぎらせて屹立する器官にむしゃぶりついてきた。

「あつ。麻耶……」

麻耶の口腔は柔らかく温かく、唾液で濡れていた。唇にくわえこまれ、舌でチロチロと亀頭やペニスの幹の部分を舐めあげられるとズーンと快感がわきかえり、悠は身をそらせた。女性の唇で愛撫されることについて知識では知っていたものの、されるのははじめてだった。(すごい。ペニスが溶けるようだ……)

悠の全身は甘く痺れたようで、ただ荒い息を吐きながら中学三年の少女が展開する大胆な技巧に身をゆだねるだけだ。

「んぐ、んぐ」

麻耶はすっぱりと悠の屹立をほおばり、貪欲にそれを飲みこみようにしたりする。その動作はぎこちないが、はじめてフェラチオ奉仕を受ける悠は、美しい従妹にペニスをしゃぶられることだけで昂奮して、

「あ、あつ……」

たまらず悠はたちまち絶頂へ近づいてゆき、迫りくる極限のときを迎えて狼狽した。

(いけない。このままでは……)

麻耶の口を汚してしまうと思ひ、少年は腰をよじった。

「麻耶……!!」

スポツとペニスが紅唇から抜けた。

「いやあん」

美少女が不満そうな声をあげ、なおもほおばろうとして強くつかんで引き寄せると、

「あ、ああつ!!」

悲痛な声を張りあげるようにして悠は裸身をうち顫わせた。

「麻耶!」

射精した。

白い液体が断続的に進り、勢いよく麻耶の頬、唇、顎を叩いた。「わ」

びっくりした麻耶だが、掴んだ手を離さずになおもしごきたてる。

「お、おっ、っ……」

悠は腰をはねあげる動きをくり返してからぐったりとなる。麻耶はねっとりとして栗の花の匂いを放つ液体をしぼりとしてやる。

「すぐ出たわ」

顔を濡らした粘液を指で拭い、強い匂いを嗅いで嬉しそうに笑う美少女の表情は、これまで悠が見たことのない妖艶さをたたえていた。

「口のなかに、出してもよかったのに」

「そんな……。汚いよ」

「どうして？ 悠兄さんの精液なら汚くないわ。もうセックスしてる友達なんか、恋人に飲まされてるのよ。わたしも、どんな味が知りたかったのに……」

好奇心の強い早熟な少女は、乳房まで付着したやや黄色がかった粘液を指ですくい、ちよっと舐めてみる。

「ふうん。ちよっと苦いような、渋いような、塩っぱいような……。複雑な味ね……」

「ばか、よせよ。汚い」

「うふっ。悠兄さんだって麻耶のラブ・ジュースをチュウチュウ音をたてて飲んじゃうじゃない」

麻耶は制服のポケットからハンカチを取り出し、悠のペニスを拭い、自分の顔や頸も拭いた。

悠は絶頂したあとの脱力感から回復すると、起きあがって服を着た。

いつまでも麻耶と閉じこもっていては誰かに怪しまれる。

「さあ、行こう」

「つまんないわ……。ようやく会えたのにすぐ別れなくちゃならないなんて……」

麻耶は拗ねるようにして抱きついてから、真剣な表情で、

「今度会ったときは、ちゃんとセックスしようよ。ね……。麻耶のバージンを奪って」

まるで宣言するかのように、大胆な言葉を悠に投げかけて、廊下を小走りに走り去った。

葬儀を終えて家に帰る途中も、美夏絵は口数が少なく、気が晴れない様子だった。

(ママはすごく落ちこんでいる……)

突然、鬱病にでもなったのかと悠は心配になった。

帰宅すると、美咲はさっそくピアノ教室へと出かけていった。家には母親と悠だけが残された。彼女は居間のソファにへたりこむように座ると、

「なんだか、眩暈がするわ……」

そう呟いた。顔色が青白い。

「横になったら」

悠がすすめると、

「そうね。ともかく着替えなくっちゃ」

立ちあがって寝室へ歩きだしたが、ふいによるめくと、

「ああ……」

小さく叫んでクタクタと膝が砕けたようになり、廊下にうずくまった。

「ママ！ どうしたのさ」

悠が駆けよって抱き起こすと、美夏絵の顔は死人のように真っ青で、目を閉じている。

(貧血だな……)

悠はずっしりと思ひ母親の体を抱きかかえた。ふだんならとてもできそうもないのに、なんとか寝室のベッドまで抱いていけた。

(どうしたものか……)

ベッドの上に仰臥させて、しばし立ちすくんだ悠だが、すぐに学校で教わった貧血の時の手当を思い出した。

(ええと、頭を低くして、着ているものを緩めるんだっけ……)

考えてみれば身につけているドレスはぴったりして、かなりきつそうだ。悠は躊躇わずに母親の黒いドレスのホックやらボタンやら、ベルトなどを外し、脱がせにかかった。

一時的に意識を喪っている美夏絵は、息子にされるがまま、やがて黒いスリッパ一枚にされた。

(ブラジャーもだな……)

やはり胸を締めつけている下着は外すべきだと思い、母親の黒いブラジャーを点検する。背中の中のホックにしばらく手こずったものの、ようやく外すことができた。ワイヤーの入ったカップのしっかりしたブラだ。

(やつぱり。こんなもので締めつけてちゃ、苦しいと思うよ……)

肩紐を外したので、まっ白い豊かな隆起がこぼれ出た。

(わ。ママのおっぱいはすごい……)

あらためて母親のグラマーな肉体の魅力に気押される年頃の息子である。ぽってりした暗褐色の乳首に吸いつきたい衝動をこらえ、あわててスリップの肩紐をあげて胸を覆ってやる悠だ。

胸もとと裾まわりをレースで飾ったセクシイなスリップ一枚で仰臥している肉体からは、年増ざかりの女の、むっと蒸れるような牝の体臭が、ジャン・パトウの香水と混ざりあって立ち昇り、悠の牡の本能を刺激する。彼は汗が噴き出るのを覚えた。

(ストッキングも脱がさなきゃ……)

さすがに母親の下半身に触るのは気がひけたが、この最だとはかり、悠はスリップの裾から手をさしこみ、パンティストッキングの腰ゴムを掴んでひきおろした。むっちり肉のついたヒップを持ちあげ、黒いナイロンを剥いでゆく。まるでもう一枚の皮膚を剥くようだ。

裾がたくしあげられたので、美夏絵が穿いているパンティが見えた。

ブラジャーとペアになった、黒いナイロン製だ。なやましい恥丘の盛りあがった部分から、レースの網目をすかして濃密な恥叢の繁茂が見えた。悠はドキッとした。

(へえ。ママのヘアはこんもりしてる……)

パンストを脱がす手を止めて、しばし魅惑的な光景に見惚れてしまった。

悠の手でドレス、ブラジャー、パンティストッキングを脱がされても、美夏絵は目を閉じたまま「ママ」と息子が呼びかけてもピクリとも反応しない。ただ胸のふくらみがわずかに上下しているだけだ。

(さて、つぎはどうしたものか……)

あまりにも艶めかしい母親の下着姿からしいて目をそらすようにながら、悠は考えた。

(そうだ。なにか気づけを……。ブランデーがある……)

悠は居間に戻り、サイドボードから父親の贈答品であるブランデーのボトルを持ってきた。バカラのボトルに入ったカミュだ。

(ところで、どうやって飲ませよう?)

昏睡した状態では、グラスで飲ませてもこぼすだけだ。悠はふと、子供のとき、自分が庭で木登りをして落ち、気絶したときのことを思い出した。

(あのとき、ママは口うつしでブランデーを飲ませてくれたっけ。そうだ……)

それが最良の方法に思えた。

(ママにキスするわけか。ま、意識不明だから、いいか……)

悠は琥珀色の芳香を放つ液体を口に含み、そうっと母親の顔の上に自分の顔を近づけた。都合よく美夏絵の唇はわずかに開かれている。香水の匂いが強く、悠は胸がときめくのを覚えた。白雪姫の眠りを醒す王子になったような気がしなくてもない。

ピッタリと柔らかい唇に唇を押し重ね、その隙間からブランデーを注ぎこんだ。とろとろと強い酒精が美夏絵の口に流しこまれ、

「う……」

低くうめいた美夏絵がピクツとうごいたようだが、目はあいかわらず閉じたままだ。しかし、無意識の条件反射か、コクリと喉が鳴った。

(しめしめ、飲んだぞ……)

しかし、美夏絵は意識を取りもどす気配を見せない。悠は少し心配になった。

(医者を呼んだほうがいいかな……?)

もう一度、ブランデーを飲ませてみることにした。唇を押しつけると、自分の舌でこじあけるようにして、また琥珀色の酒を流しこむ。

酒精の芳香が母の口からたちのぼり悠の唾液とまざる。母親の唇や歯茎を舌で触れ、悠はふいに官能を刺激され、強く勃起するのを自覚した。そうっと舌をさらにさしのへ、母親の舌を吸うようにして、

(これは人工呼吸だ……)

自分に言い聞かせながら息を吹きこんでやり、ついで吸う。二、三度くり返したところで、「うっ、うーん……」

美夏絵は低く唸ってから、うつすらと瞼を開いた。

「ママ……」

悠が呼びかけると、ちかぢかと息子の顔があるのに驚いた様子で、

「え？ なあに？ あ……。悠ちゃん、ママ、どうしたの？」

夢から覚めたようにあたりを見まわす。

「心配したよ。廊下でフラフラッとなって、ドスンと床に倒れてしま
うんだもの」

「そうなの？ 貧血起こしたのね……」

頬に血の色が戻ってきた。息子がようやく安心した。

「あら。ママの服を脱がしてくれたの……」

ようやく自分が下着姿でベッドに寝かされているのに気づき、美夏
絵はハッとしたふうだが、あわてて身を起こしたとたんにまた眩暈が
したらしく、ぐったりと伏せた。

「だめだよ、もう少し休んでなくちゃ……」

「うん……」

ぐたっと仰臥して目を閉じながら、そうっとスリップの上から自分
の胸やヒップに触って、美夏絵はびっくりしたように、

「まあ……。ブラジャーもパンストも脱がされちゃった」

「体を締めつけてると悪いと思って」

「そう。気がきくのね」

くすつと笑って、舌で唇を舐め、はじめて気がついたらしく、

「ブランデー、飲ませてくれたの？」

「うん。気つけにね」

「口うつして？ 誰かにキスされてるような気がしたけど」

「うん……」

悠はちよつと赧くなった。

「ありがとう。悠ちゃん……」

しばらく母親は口をつむぎ目を閉じ、静かに息をしていたが、つと
手を伸ばして息子が傍にいるのを確かめると、

「ね、もう一度ブランデーをちょうだい。口うつして……」

悠はびっくりした。母親は意識を回復しているのだから、ブランデー
を飲みたければ自分で飲めばいいのだ。

（頭を動かすとまだ眩暈がするのかな）

そう解釈して悠は口にブランデーを含んだ。

（何度もやってると、こっちが酔っぱらってしまっな）

少しは自分でも飲んでしまったせいかな、悠はぼろっとなしている。やや唇を開けて待ち受ける母親の上に顔をかぶせ、唇を押しあてる。

（妙な気分だ。ママにこんなことしてるなんて……）

とろっと唾液とまじったブランドーを流しこんでやると母親はコクコクと喉を鳴らして飲みこむ。悠が唇を話そつとすると、

「……………」

美夏絵は息子の頸に両腕を巻きつけるようにしてぐいとひき寄せ、今度は自分から唇を押しつけるようにした。母親の舌が悠の唇からなにかへ滑りこみ、彼の舌にからみついた。

「む……………」

ブランドーの芳香が唾液とともに悠の口腔いっぱいに送り返されてきた。

（ママ……………。冗談はやめて……………）

悠は叫ぼうとしたが、母親は強い力で悠を引きつけて情熱の接吻を続ける。十七歳の少年は、母親の突然の錯乱が理解できない。

（どうしたの……………!?!?）

しかし、母親の舌が自分の舌にからみつき根もとが痺れるほど強く吸われると、悠の理性も麻痺するようだった。麻耶の技巧とは競べられないほど美夏絵の接吻は巧みで、すでにブランドーのむせかえる香りと熟れた牝の体臭に酔っている若者の体はカッと熱く燃え、ますますぼろっとなつた。

母親は目を閉じたまま一心に息子の唇を吸い、舌を彼の口腔のなかで掻きまわすようにして粘膜を刺激した。

「む、うぐ……………」

悠も無意識で母親の豊満な肉体を抱きしめていた。彼は上着を脱いでいたから、シャツとスリッパをとおして母親の乳首が硬く尖っているのを感じた。

（ママは昂奮しているのか……………?）

自分も激しく性的な昂奮を覚えている。ズボンの下で股間が盛りあがり、美夏絵の股間に押しつけられるかたちになっている。母親はヒップを下からうち揺するようにして息子の腰にすりつけるように身をくねらせたが、

「あ、あつ………！」

ふいに悠の唇から自分の唇を離すと、まるで突然に毒がまわったかのように喘ぎ、ぶるぶるっと身を顫わせた。ぐぐつ、と悠の頸にまわした手に力がこめられ、悠は母親の頬に頬をすりつける姿勢で、自分の体の下で彼女が熱病患者のようにひとしきりわなわなと顫え、

「は、あつ、あはつ………」

まるで酸素を要求する魚のように喘ぐのを聞いた。

一連の痙攣がさざなみのように走って消えると、ぐったりと四十二歳の母親の体から力が抜けた。ふいに息子が気がついた。

（これは、麻耶がぼくに愛撫されてイッたときと同じ反応だ……）

しかし、悠は母親のどこも刺激したわけではない。ただ激しく舌を吸いあう接吻をかわしただけなのだ。それで女性が絶頂するものだろうか。性的体験の未熟な少年には理解できなかった。

「悠ちゃん………」

やがて母親が彼を抱きしめていた手を離して、低い囁くような声で告げた。

「なに？」

「ありがとう。ママ、少し眠る……。もう行っていいわよ………」

悠は母親の体に薄い毛布をかけてやり、そつと寝室を出た。なにがなんだかわからないまま。

しばらくして、夕食の支度に来てきた母親はなにこともない様子で、悠は母親が自分にあんなに情熱的に接吻したのは夢ではなかったか、と思ったものだった。

圭の死でさざ波がたつた悠の生活も、また平穩に戻った。一時、うち沈んでいた母親の美夏絵も、表面上はいつもどおりに振るまうようになった。

梅雨があけた頃になって、悠の父親、黒須柊二が帰国した。といっても、すぐにイギリスで開かれる学会に出席し、その後で西ドイツと

北欧諸国を視察するので、わずか一週間しか日本に滞在しないという。もつとも、悠が子供の頃から柀二はそうやって家を留守にしている、それがあたり前のことになっている。

父親と息子のあいだに通いあつものが少ないのは、あまりにも研究一筋にうちこむ父に息子が触れ合う機会が少なすぎたせいかもしれない。

(今夜は、ママは親父とセックスをするのかな……)

父親が帰ってきた夜、悠は自分の部屋でぼんやりそんなことを考えていた。

黒須柀二はちょうど五十歳。美夏絵は四十二歳。まだまだ夫婦生活を楽しめる年齢はずだ。しかし、悠には、父親に抱かれる母の姿を想像すると、嫌悪感が湧く。できれば美しい母は、どことなく親しみの覚えられない父親には抱かれてほしくない。

(これがエディプス・コンプレックスってやつかな……。ぼくはママを愛してるから、潜在的にママを独占している親父を憎んでるのだから……)

ふと、数年前、近郊でエリートサラリーマン夫婦の息子が、両親をバットで撲殺した事件のことを思いだした。殺意の原因のなかには、父親に叱られた後、少年は父親が母親を抱いている現場を目撃したからだ。という説があった。

(やつぱり、あれも父親から母親を奪いかえそう。というエディプス・コンプレックスが爆発したからかな……)

本でかじったフロイトの理論を自分にあてはめたりしていると、母親の美夏絵が階段の下から彼を呼んだ。

「悠ちゃん……。書齋に来てちょうだい。パパがお話したいことがあるんですって」

(なんだろっ?)

悠は階下に降りてゆきながら訝しく思った。子供のことは母親まかせの父が、直接、自分になにか言う、などというのは珍しい。

「……」

階段の下にいた母親が息子を見上げた。その顔は、また貧血を起すのではないかと思つほど青白かった。

「どつしたの、ママ」

「うづん、なんでもないわ」

ふいにくるつと背を向け、母親は自分の部屋のほうへ走っていった。両手で顔を覆っている。泣いているようだ。

（いったい、どうしたんだ……？）

悠は狐につままれたような気持ちになった。ただ、父親の話というのが母親にとって、そして自分にとっても喜ばしいものではなさそうだ、という見当はついた。

（いやな予感がするな……）

書斎のドアをノックした。

「悠です」

「ああ、入れ」

悠は父親の仕事部屋に足を踏み入れた。柗二が吸っているパイプ煙草の煙が充滿して、思わず咳こみそうになる。彼はその匂いが好きではなかった。

「なんの用？」

「まあ、そこに座れ」

仕事机に向かってなにか書きものをしていた大学教授は、顎で応接セットの椅子を示した。悠が座ると、

「どうだね、学校のほうは……」

自分も向かい合わせに座ってパイプに新しい煙草を詰めだす。そういった様子には、なにか切りだしにくい話を、どうやって切りだしたものが、迷う様子があった。

「ええ、なんとか……」

「で、どうするんだ。学部は……」

（きたな……）

悠は緊張した。いずれは訊かれることだ。

「やつぱり、ぼくとしては文学部に行きたいんだけど……」

高名なレーザー工学の研究者は、チラと上目づかに息子を見た。

「そうか。やはり文科系か……」

「はあ」

悠は父親の言葉づかいに微妙なニュアンスがこめられているのに気づいた。黒須一族は理工系の秀才を輩出していて、一族の子供たちは自分が将来、理工系へすすむことを子供の頃から当然だと思いこんで

いる。それだけに悠に理工系の才能がそなわっていないのをうすうす知っている父親は、苦々しい思いを味わっているはずだ。そしていま、悠はハッキリと文学部へ進みたいと言った。

ところが柊二は、予想に反して平然としている。

「ま、それもいいだろう……。どうもおまえは、理工系の才能に恵まれていないようだからな……」

(おやおや、ものわかりがいいじゃないか)

そのことでは、いずれ父親と一戦交えずにはすまないだろうと覚悟していた悠は、拍子抜けした気持ちになった。

「ところで、だ……」

父親はようやくパイプに火を点け、ふかぶかと煙を吐き出してから言った。

「おまえにはシヨックなことだろうが、どうしても言わなきゃならんことがある。気を落ち着けて聞いてくれ」

わざと息子から視線をそらして柊二は切りだした。

(なにを話す気だろう……?)

どうやら彼の進路についての話題は、ある深刻な話題に入る前の挨拶めいたものにすぎないらしい。悠は緊張して父親の言葉を待ち受けた。

少し言いよんどんでから、柊二は悠の予想外の事実を告げた。

「おまえは、じつは、京伍と菜穂子さんのあいだに生まれた子供なのだ……」

「えっ!？」

悠は自分の耳を疑った。

「そうなのだ……。生まれてすぐ、おまえは私たちところにもらわれてきたんだ……」

悠は呆然としたまま、父親の語る、自分の出生の秘密を聞かされた。

黒須柊二は三十代なかばで美夏絵と結婚したのだが、妻は三年たっても妊娠しなかった。夫婦で検査を受けたところ、不妊の原因は夫のほうにあることが判明した。柊二の睾丸に機能障害があり、健全な精子の絶対量が不足しているという。だから通常の性向により妊娠の可能性がきわめて少ない。柊二の場合も、その確率は一パーセント以下だと告げられた。

こういった場合、方法は二つある。ひとつは夫の精液を直接に妻の子宮内に注入して受精の確率を高めてやることだ。柊二夫婦もこれを試したが、失敗した。精子自体の活力が不足していたためらしい。

もう一つの方法は、他者の健全な精液をもらって人工授精させる方法である。このとき、生まれてくる子供と夫のあいだには、当然、血のつながりは無い。

「一族以外の血が入るのは困る」

名門意識の強い柊二は、この方法で子供を得ることを拒んだ。

そうやって夫婦が悩んでいるとき、義理の妹にあたる菜穂子が二番目の男の子を生んだ。

「あいつは菜穂子さんがまた妊娠したとき、もついたらないと言って墮させようとしたが、あの人は拒みとおして出産した。そうやって生まれたのがおまえなのだ」

「……」

しかし、母親の菜穂子は出産時の体力消耗と感染症で一時危篤状態になり、健康を回復するまでずいぶん長いあいだ、療養生活を送らねばならなかった。

「そのときに、菜穂子さんとおまえの面倒を見たのが美夏絵だ……」

おまえも知っていたとおり、うちのママはどういうものか、あの人のことをいつも気にかけていたからな……」

京伍は、病床にある妻や新生児を省みもせず遊蕩に耽り、見かねた美夏絵が菜穂子の介護と悠の世話をしやっていたという。

「そうしているうちに、美夏絵は生まれればかりのおまえに特別な愛情を持つようになった。自分の子供のような気がしてきたというのだな。そこで、私と京伍と菜穂子さんと話し合い、おまえを私たちの養子にすることに決めたのだ」

柊二としては、どこの誰ともわからない男性の子供を人工授精で得るよりも、たとえ気の合わない末弟の子であっても、まちがいはなく黒須一族の血を受け継いだ子供の方がいい。という計算を働かせたにちがいない。

京伍はいともあっさり「男の子はひとりいればいい。欲しかったらやるよ」と承諾したという。菜穂子は抵抗もあつたものの、子供のない美夏絵に同情したことと、自分の健康状態を考えたすえ、悠を柊

二夫妻に養子にすることを了承した。

「そうやって、まだ三ヶ月ぐらいの頃に、おまえは私たちのところにもらわれて来たのだ。このことはいつかおまえに話しておこうと思っ
てはいたのだが、どうも、その機会がなかなかつかめなくてな……」

しきりにパイプをふかしながら、そう弁解する柀二だった。

こうして柀二夫妻は念願の子供を得ることができたわけだが、や
がて皮肉なことが怒った。子供ができないと思われていた夫婦のあい
だに、三年後、浩が生まれてきたのだ。

「どうやら、私の生殖機能が回復してきたらしい。その証拠に、それ
からまた、あいつは美味を生んだからな……」

一時は絶望していただけに、自分の血を継いだ男子が生まれたこと
に柀二は狂喜した。そうなると悠の扱いが微妙になる。しかも、実の
父の血をひいてか、悠は理科系の才能には恵まれていないようだし、
父親としては次男の浩のほうに期待をかけたくなる。

（なるほど、そうか……。親父のぼくに対する態度が冷たかったのは、
ぼくが京伍叔父さんの子だったからか……）

柀二の話聞いてようやく理解できた気がする。つまり悠は、浩が
生まれた段階で養父の愛情を期待できない存在となったのだ。

「じゃあ、浩が生まれたのなら、そのときにぼくを京伍叔父さんのと
ころに戻せばよかったじゃないの……」

「ふむ。それも考えたことは考えたのだ。菜穂子さんも、やはりおま
えを引き取りたいと思っていたようだし……。しかし美夏絵がおまえ
に執着して、手放すことにすくく反対したのだ

……」

赤児のときから自分の手で育てあげた悠を実子が生まれたからといっ
て猫の仔を処分するように手放す気になれないのが、やはり女心とい
うものだろう。菜穂子のほうもまた麻耶を生んだこともあり、悠はそ
のまま柀二夫妻の長男として育てられることになった。

もっとも、三年前に京伍が死んだ後、菜穂子と柀二夫婦のあいだに
はある了解が得られていた。それは、菜穂子のひとり息子、圭にもし
ものことがあった場合は、悠を返す というものだ。麻耶という娘
はいるが、やはり家名を継ぐのは男子だという意識が黒須一族にはあ
る。

（そうだったのか。ママがあるとき、ぼくを抱きしめたのは、そのためだったのか……）

圭が死んだと聞いたとき、美夏絵がまっ先に思い浮かべたのは、悠を菜穂子に返さなければならぬ日が来た　ということだったのだ。悠はそのときの母親の衝撃をよっやく理解することができた。

悠はこれが自分ひとりの考えではないことを強調するように告げた。

「このことは、親族一同も了解していることなんだ……」

「じゃ、ぼくが養子だということは、親戚の人たちはみんな、知っているの？」

悠はびつくりして聞いた。

「そうだ。まあ、伯父さんや叔母さんたちはみな知っている。いこたちでは知っているものは少ないはずだが……」

「道理で……」

圭の葬儀のとき、親戚たちの意味ありげな視線の理由がわかった。

彼らは圭の死によって、悠の運命が大きく変わることを知っていたからだ。

「うーん……」

悠は唸った。あまりにも突然の打ち上げ話を理解するためには、頭がこんがらかって整理がつかない。ただ、父親がいま、悠にそのことを打ち明けた理由は一つしかない。

「そうすると、ぼくはこの家を出てゆかねばならない　ということですか。ママや美咲と別れて」

「うむ。そのことについて、私がアメリカにいるときから大伯父さんなどから電話で相談があつてな……。菜穂子さんは菜穂子さんで圭くんがいなくなった悲しみを埋めるためにもおまえに戻ってきてほしいと言っているし……。まあ、みなでいろいろ相談した結果、やっぱりこの際、おまえが菜穂子さんの家に戻るのが最良の方法だろう　と　いうことになったのだ」

「で、ママはどう言ってるの」

父親の考えは聞かなくてもわかる。

「相当嘆いていたが、やはり、約束もあるしな……。同じ母親として菜穂子さんの悲しみもわかるし……」

「そうか……。それじゃ、もういまから、親父さんは伯父さんになって、ママは伯母さん、そして浩と美咲はいとことというわけか……」

悠がちよつと自棄的な言葉を吐くと、

「おまえがショックなことはわかる」

あくまでも理性的な態度を失わない大学教授は、十七年間息子として育ててきた悠に、

「しかし、おまえが黒須一族の一員であることは変わらん。名前も変わるわけではないし、学校もそのままだ。ただ、住む家ががってくるだけで、おまえはおまえなのだ」

柊二の頭のなかでは、悠が菜穂子のもとに戻ることは、たいしたことではないという気持ちがあるようだ。

「……………それじゃ、ぼくはいつかから菜穂子叔母さん……………、いや、実のお母さんのところに行けばいいんですか」

「まあ、おまえの気持ちの整理がつきしだい、ということだ。べつに、法律的な手続きに合わせることもあるまい。そつだな……………、ちよつど夏休みが近い。夏休みに入ったら向こうに行く、というのはどうだ？
もちろん、おまえの持ち物はすべて持ってゆくがいい」

「……………」

悠は沈黙した。柊二は難病の宣告を終えた医師のように安堵した顔になって、もう心は机の上の資料の山に戻っているようだ。

「そつだね。じゃ、そつするよ」

「そつか」

柊二と悠の対話は終わった。

（うーん、ショックもショック、大ショックだなあ……………。ぼくがこの家の子じゃなかったなんて……………）

悠は自分の部屋に帰るとベッドにひっくり返り、天井を睨んだ。彼が養子であることはおそらく戸籍謄本に書いてあるにちがいない。しかし悠は、これまで自分の戸籍を見る機会がなかったのだ。

（なるほど、これでおれが親父の才能を受けつがなかった理由がわかった……）

悠の本棚には理科系統の本はほとんどない。小説、詩、京伍叔父が亡くなってからにわかに興味を持って集めだした、シウルレアリズム系統の画家の画集などがぎっしり並んでいる。そしてクラシック、ロック、ニューミュージックのレコード……。自分でも最近はギターに凝りだしたところだ。そういった芸術的なものに対する志向は、終二の血ではなく、黒須一族の異端児、幻想と怪奇の画家として名を知られる黒須京伍の血だったのだ。

そこで突然、脳裏に麻耶の顔が浮かんだ。

「うわあ……」

大きな声で唸ってしまった。

（ぼくは実の妹と、いろんな淫らなことをしてきたのか……！）

この前などは麻耶にペニスを口で愛撫されて、可愛い顔に精液を浴びせてしまった。麻耶は麻耶で「今度会ったときには絶対、セックスしようね」と言って誘っている。

（へたをすると、おまえは自分の妹の処女を奪ってしまうところだったのだぞ……）

従妹だと思っ気持が悠をして、ある程度大胆なセックスの遊戯に耽ることを許していたところがある。

妹の美咲も醜い子ではない。麻耶とはちがってコロツと太めだが、つぶらな瞳、ふっくらした頬の印象的な愛くるしい魅力を持った少女だ。そんな美咲に悠が性的な遊戯を仕かける気が起きないのは、実の妹だという意識が働いているからだろう。

（どうなってるんだ。肉親のあいだの愛情とか、異性に対する欲望というのは……？）

自分が母親の肉体に魅力を感じ、性的な欲望すら覚えるとき、悠は罪悪感を意識する。それは相手が性的欲望の対象にしてはいけない存在 肉親だという自覚のせいだ。

しかしいま、悠と美夏絵は叔母と甥の関係で、血はつながっていないことがわかった。そうすると、今度は性欲の対象にしてよいのだろうか？

（どうなんだろう？ 家族の愛とか、セックスってなんなのだろう？）

しかし、悠にはもう一つあきらかなことがあった。

（ぼくがこんなにセックスを意識するのは、実の親父　黒須京伍という異端の画家の血のせいなのだ……）

京伍は終生、遊蕩に耽りいかがわしい噂とスキャンダルに包まれて死んだ。だとすれば自分も、実の父親のように淫蕩で奔放な生き方が運命づけられているのだろうか？　悠はそこまで考えて身震いいた。

（ぼくはどんなふうな人生を歩むのだろうか？　そして、どんなふうに住んでゆかねばならないのだろうか？）

まるで大海のさなかに投げだされた者のように、悠は自分がすぎるものもなく、頼りない存在だということを急に意識していた。

暗い森のなかで迷子になった子供のような不安が彼を包んだ。なにが知らず寂しく悲しい気持ちになる。そのとき、

「悠ちゃん……？」

ノックがあつて、ドアの向こうで低い声がした。美夏絵の声だ。彼女は夫から、悠が自分たち夫婦の子ではないこと、彼は実母の菜穂子のもとに戻ることにしたことを伝えたと報告を受けた。

「なに。平静だったさ。もう分別のついた年頃の男の子だ。ショックでもあるまい……」

柊二はそう樂觀的な言葉を吐いたが、美夏絵は心配だった。悠は感受性の強い子で、夫のように理性の勝った人間ではないのだ。

入ってきた美夏絵は悠の肩に手を置いて、

「やっぱり……。ショックだった？」

「うん……」

美夏絵の顔を見て、ふいに悠は涙ぐみたいような切ない気持ちになった。これまで十七年間、母親と信じて甘え、頼り、ときには反抗もしてきた女性は、じつは自分と血のつながりのない叔母だったのだ。そして、まもなく彼女と別れて、この家を出てゆかねばならない。

「ごめんね、悠ちゃん。こんなことになって……。もっと前から教えていれば……」

美夏絵は瞬時に悠の寂しい気持ちを理解したようだ。ベッドの枕もとに腰かけて、悠の頭を抱いて自分の胸に押し当てるようにした。齧えて泣いているわが子をあやす、母親の本能的な反応だ。

悠はあたたかい体温、柔らかで弾力に富んだ肌の感触、懐かしく快

い香りに包まれた。それは彼の悲しみや寂しさ、不安といったものをすみやかに追い払ってくれた。彼もまた無意識的に行動した。もっとも頼りになるもの　美夏絵の乳房をまさぐったのだ。

「ママ……」

「まあ、悠……」

悠に強い力でしがみつかれ、美夏絵はベッドの上へのけぞるかたちに横たわった。息子　まもなく実母のもとに返すことになる　は美夏絵の纏ったネグリジェの胸もとに顔を押し当て、前をはだけると豊富な乳房にしがみついた。

「いいわ。ママのおっぱい、吸いなさい」

美夏絵はとっさに、精神的に動揺している彼を落ち着かせるためには、子供っぽい行動を拒むべきではないと思ったようだ。柔らかい体から力が抜けた。

悠は片方の乳房にむしゃぶりつき、赤ん坊がもう一方も自分のものだと主張するように驚掴みにした。実際に母乳を飲むかのように乳房を吸った。

「どれだけ時間がすぎたろうか。悠はハッとわれに返った。

「だいじょうぶ？　悠ちゃん……。元気になった？」

夢中で吸っていた乳房から唇を離して顔を上げると、美夏絵の慈母のような笑みを浮かべた顔があった。手は優しく彼の髪を撫でている。

「ママ……。ごめん……」

急に恥ずかしさがこみあげてきた。十七にもなった男の子が、まるで赤ん坊のように脅えて泣きながら母親の乳房を吸っていたのだ。しかし、そうやって母親の胸にすがっていることは、一方では悪い気持ちではなく、温かくて柔らかな乳房から離れがたい気もする。

そんな息子の気持ちを感じたのか、

「いいのよ、このままでいて……」

「うん……」

二人はそのままの姿勢で毛布に横たわっていた。夜も更け、弟や妹たちは熟睡しているらしく、彼らの個室からはなんの物音もしない。聞こえるのは美夏絵と悠の呼吸だけだ。

悠はまた乳房を吸いながら、しばらくとうとうと微睡んだらしい。気がつくくと、美夏絵の手で服を脱がされ、下着だけにされていた。おそ

らく寝衣に着替えさせようとしたのだろう。

母親は薄いナイロンの寝衣だけなので、その下からコロンとまざりあつた体臭が仄かに香っている。それは刺激的で、しかもどこか懐かしいものだった。

「……………」

悠は母親の手が自分のブリーフの股間の上にあてがわれ、布地の上からペニスが優しく撫でられるのを感じた。

不思議なことに驚きはなく、髪を撫でられたり頬ずりされるような愛撫の延長として受けとめていた。悠は母親の手が股間の隆起をまさぐるのにまかせ、また乳首に吸いついた。

それは彼に吸われつづけたために充血しきってぼつてりと勃起している。麻耶の乳首は勃起してもなんとなく頼りない硬さだったが、美夏絵のはいかにも母親らしい、存在感のある硬度を伴った乳首だった。

(ひと晩じゅう、いや、一日じゅうでもこっしっていたい……………)

悠は心地よく愛撫されながらそう思っていた。しかし、若い牡の肉体は、意識とは別に確実な反応を示してゆく。しだいに充血し、硬さを増し、ブリーフを突っ張らせながら逞しく隆起してゆく。

「ああ……………」

ふいに母親がその逞しく、熱を帯びた器官の輪郭を下着の上からなぞりながら熱い吐息を吐いた。ようやく悠は思い出した。まだ小学生の頃、発熱した夜、寝衣を替えようとして汗を拭ってくれた母親が、そうやって股間を弄び、やがて生まれてはじめて味わう快感感覚の高みに彼を導いてくれたことを……………。

(ママはぼくの体に興味を持っているのだろうか……………?)

悠は思いきって頼んでみることにした。

「ね、ママ……………」

「なあに?」

「お願い……………。ずっと前、ぼくが風邪をひいたときに触ってくれたよね? あのときみたいにしてくれない?」

「まあ……………!」

愛撫の手がとまり、薄い闇のなかで美夏絵の顔が赧くなった。

「悠ちゃん、あのときのこと、覚えていたの? 熱でぼうつとしてたのに……………」

「覚えてるよ。だって、あれではじめて、射精ってのを経験したんだもの」

「そうだったの……」

「あれか」オナニーを覚えたんだ。つまり、ママがオナニーを教えてくださいましたんだよ」

「そういうことになるの？」

美夏絵はクスツと笑ったようだ。

「そうだよ。だから、オナニーするときはどうしてもママのことを思い浮かべちゃっ」

「まっ」

美夏絵はまた赧くなった。

「ね。もう少ししたらこの家から出てゆくんだもの。ぼくがずっと願っていたことをしてくれてもいいじゃない？ それに、こんなになってるんだしさ……」

「そうね……」

美夏絵は悠の要求を受け入れた。おそらく憐愍の念からだろう、思いきったように息子のブリーフをひきおろし、むきだしにした牡の器官を握りしめてきたのだ。

「ああ」

悠はぶるつと顫えた。麻耶のぎこちないしごき方とはまったく違った、繊やかな一本一本の指が独立して蠢くような巧みな愛撫があたえられた。

（うわ。なんて上手なんだ……）

それは貞淑な人妻であり賢母である女の仕種とは思えないテクニクだった。どこでそのような技巧をマスターしたのか、それとも女というものは閨房で本能的に身につけてしまっのか、とにかく、まだ童貞の少年の身も心も甘く切なく痺れさせる技巧で睾丸から会陰までも刺激し、美夏絵は悠を性感の桃源郷へと導いてゆく。

「どう？ 悠ちゃん……」

熱っぽい声で訊いてくる。

「ああ、すごくいいよ。ママ……」

「悠ちゃん、もうすっかり大人ね。こんなに大きくなって……。ママ、おどろいたわ」

悠の亀頭の先端は完全に露出し、透明な液は熱をこめて愛撫する美夏絵の指をもヌラヌラと濡らしている。そのぬめりで一番敏感な尿道口の下側に微妙なバイブレーションをとまなう刺激を与えられると、悠はたまらずに折り返し不能点に追いやられてゆく。

「あ、あつ。ママ……」

「いくの、悠ちゃん!？」

あわてたように美夏絵はいい、

「待って」

もそもそヒップを動かした。

「いいわ」

柔らかい温かい布片がびんと屹立した砲身にあてがわれた。精液で寝具や寝衣を汚すことを恐れた美夏絵は、自分の穿いていたパンティを脱ぎ、それで息子のペニスをくるみこんでやったのだ。

すべすべしたナイロンの感触が、余計に昂奮を高めた。

「ママ、いく……!」

切迫した声を張りあげ、悠は豊満な母親の肉体にしがみついた。腰がびくびくと前後に躍動し、どくどくと熱いスペルマの液を噴きあげて若い牡は絶頂した。

「悠ちゃんったら……。あんなに大きい声をだして、びっくりしたわ」
悠をやわやわと揉みしだき、彼のエキスを最後の一滴までパンティのなかに受けとめてやりながら、美夏絵は囁いた。射精時の悠の反応は、それほど激烈なものだったからだ。

しかし、弟や妹たちの個室からはなんの物音もしない。

「だいじょうぶみたい……」

耳をそばだてた美夏絵は安心したように言い、悠のペニスにあてがっていたベージュ色のナイロンの下着できれいに拭いてやった。拭い終わるとそれを払げてねっとりした汚れを眺めて、

「あらあら。ずいぶん出したのね……」

嬉しそうな声で驚いてみせた。汗みずくになった悠の額を掌でそつと撫で、

「まあ、すごい汗」

ようやく脱力感から回復した悠が目を開けると、すぐ前に美夏絵のはだけた胸もとからメロンのように豊かに実った白い球体が揺れている。悠が掌でそれをくるんだ。

「あ」

美夏絵は呻いた。

「さつき、あんなに吸われたものだから、痛いみたい……」

そっぴいなながらふたたび悠を抱きよせ、

「悠ちゃんは、ママのおっぱいが本当に好きな子だったものね……」

自分の指で悠のエキスを噴きあげさせた美夏絵は嬉しそつで、二人のあいだには母子というより、秘密を共有しあつた者同士にみられる、親密な感情が生まれていた。

悠は母親の乳房をまさぐりながら訊いてみた。

「ぼくは、ママのお乳を実際に飲んだことがあるの？」

「……それが不思議なのよ。悠をひきとつてからしばらくすると、おっぱいが張ってきて、ある日突然、出るようになったの。悠があまり熱心に毎日吸つたせいかしら」

「へえ……」

「そんなに量は出なかつたけど、ホルモンかなにかのせいかしらね。そうすると、悠ちゃんが本当に自分が生んだ子供のような気がして、嬉しかつたわ……」

悠は離乳期になつてもなかなか母親の乳房から離れようとしなかつた。なにか悲しいことやショックなことがあると、すぐに母親の胸に顔を埋めるために飛びついてくる癖があり、それは小学校に入る少し前まで治らなかつたという。

「浩のほうがあつさりしてて、乳離れしてからは、もうそんなことはなかつたのに」

「ふうん……」

悠はあらためて美夏絵の豊かに張りつめた、衰えの少しも見えない乳房をまさぐり、握つて確かめてみた。すると美夏絵は、ふたたび悠の股間に手を伸ばして、

「ああやっておっぱいにすがってた子がこんなに立派になって……。信じられないわ」

悠の萎えたペニスは美夏絵の手でまさぐられると、ふたたび力を漲らせた。

「あらあら……。へえ、元気なのね、男の子って……」

美夏絵は嬉しそうに言い、毛布をはねのけて悠の男性器官を検分してみる。

「いやだよ、そんなに見ちゃ……」

「いいじゃない。ここまで大きくしてあげたんだから、その成果を見せてもらおう権利ぐらい、あるんじゃない？」

「そんな……」

しかし、美夏絵の手指はただ観察するための動きではない。慈しむようにくるみ、揉み、撫でさする。

「ああ……」

悠はふたたび快美な感覚に圧倒された。

「また、こんなに硬くなって……。本当に元気なのね……」

美夏絵の声が熱を帯びている。ふいに悠の脳裏に、この前、寝室で孤独な自己愛戯に耽っていた母親の惱殺的な姿態が浮かんだ。あのと、チラと見えた秘草は豊かに繁茂していた。

「ママ。じゃ、ぼくにも見せてよ」

「えっ!? ママのを?」

「うん。ママの体。あそこ……」

「まあ。いやだわ、悠ちゃん……」

息子が大胆に自分の肉体を見たいと言いだしたので、美夏絵はいささか驚いたようだが、その声には叱責の響きはなく、かえって面白がっているようなニュアンスがあった。

「だって、ぼく、女の人の体を見たことも、触ったこともないんだよ……」

嘘である。麻耶の裸体をまさぐったことはある。もっとも、性器の奥まで探索したことはないが。

「そっなの? 悠ちゃん、まだ童貞なの?」

「そっだよ。もちろん」

「ふうん……。じゃ、性教育が必要だね」

闇のなかで美夏絵の瞳が妖しく輝いたようだ。悠とこの家ので過すのもあと何日とないのだ。やがて自分の息子でなくなる悠の脳裏に自分の肉体を刻みこませてやりたい欲望が生まれたのかもしれない。

「じゃ、今晚、悠ちゃんに女に人の体を教えてあげる。でも、この部屋じゃダメ。ママのお部屋に行きましょ……」

悠はパジャマを纏い、二人はそうつと足音をしのばせて階段を降り、美夏絵の寝室へ行った。チラと書斎のほうを見ると明かりは消えている。旅の疲れで終二は眠ってしまったのだろう。

寝室のドアをぴったりと閉ざすと、美夏絵はあっさりとネグリジェを脱ぎ捨て、一糸纏わぬ全裸になるとダブルサイズのベッドの上に仰臥した。腿はぴっちりと密着させている。ベッドサイドのランプの明かりを受けて、年増ざかりのグラマラスな女体は、むっちりと脂肪をのせて眩いばかりにエロティシズムの光を輝かせている。

「さあ、悠ちゃん……」

目をまるくして自分のヌードを見つめる悠を呼ぶ美夏絵の声は、妖しく囁れていた。

「これが、女の人の体よ」

「素敵だ……。ママ、最高にきれいだ……」

悠はそう賛嘆した。パジャマのズボンの下でペニスがまた熱と力を帯びだす。

「ママ。ここを見せて……」

悠は美夏絵の脚のあいだに跪くようにして、両手で覆い隠している秘部へ顔を寄せていった。

「ここを見たいの？ ママの一番羞ずかしい所を？」

「ちがうよ。ママの一番魅力的なところさ」

「……」

美夏絵は両手をのけた。豊かな繁茂をのせた秘丘があらわになった。

悠は子供の頃、母親といっしょに入浴していたのだから、当然この繁みを見ているはずなのに記憶がない。

いま、まぢかに見るそれは、驚くほど濃密に繁茂していて。麻耶の繁みが萌えだした草原だとすれば、美夏絵のは密林といってよかった。

麻耶のはいかにもやわらかそうな漆黒の恥草だったが、美夏絵のはやや栗色がかって縮れ、からみあっているように見える。

形状も、麻耶のがチンマリと扇型なのに、美夏絵のは縦長に臍の近くまで楕円形を形づくっている。

「触っていい？」

「いいわ……」

美夏絵はうわずったような声で答えた。

そつと指でこんもりした恥叢を撫でる。サクサクとして剛い感触が掌に不思議に心地よい。

「ああ……、くすぐりたい」

美夏絵は白い、脂の乗った腹部の肉をつねらせた。エアロビクスやジャズダンスなどの美容体操教室に通っているせいで、ウエストは同じ年輩の女性とくらべて引き締まり、醜い贅肉がない。白く滑らかな肌から麝香に似た官能的な香りがたちのぼった。

「……」

悠は刺激的な芳香に引き寄せられるように顔をそつと近づけ、黒い繁みに鼻を押しあてるようにした。すると美夏絵は、それを待ち受けたかのように下肢を拡げて、隠されていた女の魅力の源泉地帯をあからさまにして息子の目に展示してみせた。

（あつ）

唇に似た器官が、まわりに密生している黒い繁みに縁取られ、そのなかに隠される様子で息づいていた。悠はまっ先に、

（麻耶とはずいぶんちがう……）

麻耶のが早春の野に咲く花のように清楚な可憐さだとすれば、母親のは熱帯樹林の奥で咲きほころんだ大輪の花のような婀娜つぽさ、あでやかさだ。両側の肉の堤はよく脂肪がついてふつくらと隆起し、その内側からはぼつてりと肉厚の花弁　小陰唇が餌を招き寄せる食虫花のように複雑な形状を展開させている。

花弁の外側から内側へかけての色彩の変化も、麻耶のが董色からセピア色への控え目なものに比して、美夏絵のはガーネット、茜、蘇枋色、さらにスカーレットと多彩な変化を見せている。熟れきった肉体の貴婦人が濃い紅をさして媚笑する唇のように毒つぽい魅惑が発散する。

それらの全体は、牡の器官を受け入れる　というより、牡を挑発して子宮に到る開口部に陰茎を突き立てさせる　ための器官だとい

うことを強烈にアピールしていた。

男なら誰でも、活火山のカルデラを思わせる構造の肉の裂け目に、自分の男根をたたきこみ、存分に決り抜く衝動に駆られずにはおかない、そんな血を滾らせるような光景だ。

「ああ……」

悠はひめやかな肉の割れ目から立ちのぼる芳香に体が顫えた。美夏絵は入浴したばかりで、その後甘い香りのコロンをふりかけているのだが、それでもなおある種の動物的な匂いが漂っている。それは麻耶の性器から発散していた酸っぱいツンとくる香りとはちがった、乳酪臭にも似ている。

（へえ、男性を経験した成熟した女性って、ここの匂いもちがうのか……）

あらためて女性の肉体の不思議さに感動した少年は、指をそっと伸ばし、やや湿り気を帯びている唇とも花びらとも形容しがたい艶めかしい柔肉を拵げた。

「ああ、悠ちゃん」

美夏絵は両手で火照る顔を覆った。しかし逞しいほどの肉がついた太腿は、彼の探查を受け入れるためにもっと開かれるのだった。

（わ。濡れてるんだ……）

ベッドサイドのランプの仄明かりが、美夏絵の恥唇の奥の構造をくつきりと見せていた。濡れてきらめく珊瑚色の粘膜。その美しい輝きは麻耶のほとんど変わらない。薄白い液でじっとり濡れているのは、悠を愛撫したり、いま裸身を晒していることで美夏絵自身が昂奮していることの証拠だ。

「綺麗だね、ママ……」

悠は呻くように賛嘆の言葉を吐き、さらに両の指で濃密な恥毛をかきわけるようにして包皮もめくりあげた。充血して紅鮭色を呈した肉の真珠がのぞけた。麻耶の小粒の真珠とはくらべものにならない大きさだ。自分の小指の先ほどもあるようだ。

（クリトリスって、こんなに大きくなるのか……？）

麻耶のはまだ発育しきっていないのか、それとも母親のが異常が大きいのか、悠にはなんとも判断がつかねた。ただ、その真珠核が女性の奥から豊かな快感を噴き湧かせるための点火ボタンだということ

を、彼はすでに知っている。

しかし、彼が生まれてはじめて女体の神秘を眺めているのだと信じている美夏絵は、

「そこが、クリトリスっていうの」

かすれた声で教えてやるのだった。

「そこを触られると、感じるの」

悠はこっそり覗き見たときに母親がその部分をしきりにまさぐっていたことを思い出し、勃起しているペニスをさらに膨張させた。

「ね、ママ……。どっやったら感じるのか、教えて」

やはりつわずつた声で頼むと、

「こっするの……」

顔を覆っていた右手をおろしてきた。そうっと悩ましい丘の上におき、サワサワとした叢をひとさし指と薬指をつかって掻きわかるようにしてクリトリスを露出させた。

「強く触ったらダメ。最初はこっやって、そっつとね……。優しく……」

息子に自分の蠱惑の源泉を露出して見せているという意識が昂りを呼ぶのか、悠は粘膜の奥からとろとろと透明に近い液体が滲み出てくるのを認めた。

マニキュアは落としているが、手入れのいい艶のある爪をのせたむっちりしたひとさし指が包皮の上下から圧迫するように撫でおろしてゆく。つまりクリトリスは包皮の上から刺激されることになる。

(ふうん。やっぱり麻耶と同じなんだ)

悠は感心した。もちろん冷静な状態ではない。胸はドキドキ早鐘をうつようど、息はハアハアと荒い。ペニスは痛いほどに怒張しきっている。先端からは透明な液が糸をひいている。

「見える？ 悠ちゃん」

「うん、見えるよ」

「ああ……」

美夏絵は自己愛撫の動きをやめない。粘膜を露出させた溝のなかを人さし指と中指で上下に擦っている。濡れた粘膜がニチャニチャと淫靡な音をたてた。指先が濡れて光っている。熟れきった女は腰をシートから浮かせるようにしたので、滴が垂れた会陰部から暗い紫色の菊

状の肉のすぼまりまでが見えた。

悠は敏感な部分を愛撫する母親の指の動きが、ゆるやかに、またこまかく早く、微妙な律動をとめないながら蠢くのを見て驚いた。

（まるで楽器を演奏するみたいだ）

ときおりさざ波のような痙攣が白い艶やかな下腹や内腿を走る。息づかいは荒く、ハッ、ハッと喘ぐと腹部がふいこのように上下している。じつとりと汗ばんだ肌は紅潮してゆくようだ。

「ママ。自分でいじって気持ちいいの？」

「そうよ。気持ちいいわ」

「そうやってオナニーするんだね」

「そう……」

「そこだけ弄るの？」

「うっん。膣も」

「どうするの。やってみて……」

「……」

息子に自分の指戯を見せつけている美夏絵は、もう理性を麻痺させてしまったようだ。指がもつと下へとのび、下肢がさらにぐっと割り抜けられる。パツクリと秘唇が割れ、性器全体は円形に近い、まさにカルデラ火口の形になった。

（なるほど……）

麻耶を探查したときはよくわからなかった構造が、美夏絵の場合はよくわかった。処女膜が消滅したせいだろうか、子宮にいたる通路の部分が両手の指を用いて拡張されたため、膣ははっきり円筒状となって示されたからだ。

「これが膣？」

「そうよ。ここから男の人のペニスが入るの……」

「へえ」

濡れて輝くコーラルピンクの粘膜が、まるで鍾乳洞のように複雑な凹凸で内装された膣の奥を覗かせる。

「ああ」

若い牡は激しく昂った。その部分にペニスを突き立てたいという、本能的な衝動が彼を駆り立てた。自制心が吹き飛んだ。

「ママ……。入れさせて」

叫ぶとしゃにむに熱く弾力にとんだ肉の上におおいがぶさった。

「あつ、悠ちゃん……。だめ……。っ」

突然の攻撃に美夏絵は狼狽した声をあげた。

あるいは最終的に彼の性器を受け入れることを予想していたのかも
しれないが、こんなに早く攻撃されるとは思っていなかったのだ。

「悠ちゃん……。っ」

「いいだろっ、ママ。ぼくを大人にして」

悠は美夏絵の下肢のあいだに自分の腰を割りこませ、鉄のように硬く、怒張しきった欲望器官をあてがった。角度も位置も関係なく、ただ本能的につきまぐる。

「だめ。そうじゃないったら。落ち着いて、……。あっ！」

熱いぬめりに先端が埋めこまれた。まったく偶然というかたちで結合が行なわれた。ずぶずぶと沼に踏みこむかたちで、悠の灼けた砲身が柔らかい粘膜を押しわかるようにして突きこまれた。

「あ、うっ」

少年は呻いた。はじめて味わう女体の感覚が彼を酔わせた。

「すてきだ……。っ」

指や唇の刺激とはちがった、ある程度の緊縮をともないながら彼の猛々しい欲望を受け入れる媚肉の筒。

「お、おう……。っ」

美夏絵は悩ましい声を張りあげた。息子として育てあげた少年に押しひしがれ、下肢を割り裂かれて凶暴な侵略の意志を秘めた熱い肉の杭を打ちこまれ、嚙り泣くような声を吐いて呻き、悶えた。

「悠ちゃん……。ああ、むっ」

目がくらむような快美が脊髄を中心に拡散し、腰から下が溶けるような甘美な感覚に悠はがくがくと下肢をうち揺すった。熱いぬめりがまるで息づくように彼を締めつけてくる。先刻、一度嘔きあげたのに、彼は急速に絶頂へと昇りつめていった。

「おお、ママ」

狼狽した声を発する暇もなく、

「うっ、ぐ……。っ！」

全身が射出に備えてぐぐつと緊張し、それから上体が弓なりに反り、腰が最後のひと突きを敢行すると、

「いくー！」

悲鳴のような声をふり絞り、悠はあっけなく噴いた。スペルマを含んだどろどろと滾る液を思いきり柔らかい肉の奥へとしぶかせた。びゅびゅっと断続的に子宮の奥を叩いて。

6

「ごめん……、ママ」

ひとしきり美夏絵の豊満な裸身の上で身を顫わせ、苦悶にも似た絶頂時の呻きを吐き出しつつ、女体の奥に熱い精を噴きあげた少年は、やがてわれに戻ると、小声で詫言った。

爛熟した女芯の眺めに激情をかきたたられ、制止もきかずに強引に挿入してしまい、しかもアツというまに洩らしてしまったことを反省する余裕をようやく取りもどした悠なのだ。愛の行為というよりレイプに近い一方的な行為だったのではないか。

「いいのよ……。ママのを見て夢中になったんでしょ。それだけ魅力を感じてくれたんだもの、嬉しいわ……」

悠の暴走を許す美夏絵の頬は紅潮し、瞳は官能の炎をまだきらめかせ、声もうるみを帯びている。

「でも、かまわないの？ そのまま出しちゃったけど……」

「妊娠のこと？ だいじょうぶ。心配しないでいいのよ」

愛情のこもった声で息子を安堵させ、熟れた体のママは汗ばんでぬらぬらする彼のきゅっとひきしまった腰を抱きしめた。

「じつとして……。そのまま」

憤怒にも似た激情を放出した後、悠の牡器官は萎えつつあったが、美夏絵の粘膜は腔腸動物が食物を摂取するときのようにひくひく蠢き、まだ滲み出るエキスを絞り取るような動きをみせる。

（すごい、ママの体……）

それは意識したものでなく、ようやく燃えたってきた女体が自動的に示す反応のようだ。美夏絵は目を閉じ、時おり「く、うっ」とくぐもった呻きを洩らして、息子に犯された結果生み出された快樂の余

韻をじっくり味わっている風情だ。

悠は母親の閉じた瞼の端から涙が溢れ、頬を伝い落ちるのを見た。

「ごめんね、ママ。ほんとに……」

ふいにパツチリと目を開いた女は、悠の顔をまじまじと見つめ、微笑んだ。観音像のような慈愛に溢れた笑み。

「馬鹿ね、謝ることなんてないって言ってるでしょう。……ママ、いま最高に幸せな気分なの。だって悠ちゃんを自分の体で男にしてあげることができたんだもの……」

美夏絵は十七年、息子として育てあげた少年と交わったことに、罪悪感を感じていないようだ。

「不思議ね。こんなこと、本当は許されないことかもしれないのに、ママ、ちっとも悪いことをしたと思わないの……」

「ほくもそうだよ」

「血がつながっていないから　なんていいわけはしないわ。だって悠ちゃんはママの心のなかでは、自分で生んだ息子なんだから」

「……」

「ママが一生懸命育てた悠ちゃんが、こんなに立派な男になった、ってこと、自分の体で確かめたかった。……それ、悪いことかしら？」

悠の答えを期待せず、自分で自分に訊いている美夏絵だ。

「だって、誰にも迷惑かけるわけじゃなし、いいわよね。悠ちゃんも気持ちよかったんだし

……」

「うん。最高だった。セックスするってこんなに素晴らしいんだってことを教えてくれたママに感謝するよ」

「ふふ。ママこそ……。悠ちゃんのペニスって素敵よ。ママの体のなかで暴れて、どくどくって精液を浴びせてくるときの勢い……。あんなのはじめて……」

美夏絵は悠の顔を引き寄せ、唇を重ねて熱烈に接吻した。舌がからみあう。甘い唾液を吞ませられ、悠はまたぼうつとなった。汗に濡れた肌を擦りあわせっていると、まだ微妙に蠢いている粘膜にくわえこまれたままのペニスに力がみなぎりだした。

「あら」

美夏絵が嬉しそうに叫んだ。

「悠ちゃん……、もう元気になったの?」

母と息子とか、叔母と甥とかの関係を忘れ二匹の獣と化した二人は、もう一度 今度はじっくりとたがいの快楽を高めあいながら熱い肉を交わらせた。

さすがに二度も嘔きあげた後なので、悠には冷静に美夏絵と立ち向かう余裕があり、呻き、喘ぎ、悶え、のたうち、嚔り泣く女体はやがて歓喜の絶頂に追いつめられた。

「悠ちゃんっ……!! ママ、いつちゃんっ!」

がくがくと裸身が躍動し、のけ反り、息子の体をぎゅっと抱きしめ、美夏絵は鋭い悲鳴に似た声をあげて絶頂した。

「ああ、悠ちゃん……。ママ、もう死んでもいい……」

二度、子宮の入口に若い牡の精を勢いよく注ぎこまれた女は、汗にまみれた裸身をシーツの上でくねらせ、たえだえの息のあいまにそう呟いた。

「ぼくもだよ、ママ」

悠はつながったままに姿勢だ。しばらくして、

「ありがとう、悠ちゃん……。ママをこんなに悦ばせてくれて」

「そう? だったら恩がえしたね。ここまで大人にしてくれたママに……」

「恩がえし? ふふっ、そうね、これくらいいい思いをさせてもらってもいいのかな」

体を離すと二度注がれた牡の液がとろとろと膣口から溢れ出てくる。

「わあ、こんなに……。ほんとうに元気のいい悠ちゃんね」

嬉しそうにティッシュで拭く美夏絵だ。

「だけど、パパはどうなの? ぼくたちがこうやってるのはパパを裏切ってることになるけど……」

ようやく悠は、同じ屋根の下にいる柊二のことを思い出した。

「いいのよ、パパのことは心配しなくても……」

美夏絵はケロリとした顔だ。もともと柊二は性的にエネルギー豊富なタイプではなく、美咲が生まれ自分も四十を過ぎると、ほとんど妻を抱こうとしなくなった。いまはもう、研究に没頭する妨げになることも思っているかのようには、妻との交渉も避けている。

「信じられないな……。ママのこんなに素晴らしい体をほろっっておく

なんて……」

悠は呆れた。だからこの前のように、自慰で欲望を発散させるしかないのだろう。女ざかりの熱い肉体をもてあましてきた美夏絵に同情してしまっ。

「ママ。ぼくが菜穂子叔母さんのところに言っても、時どき会って愛しあおうよ。ね?」

「悠ちゃんがそつしたければ、いいわ。でも、悠ちゃんはそのうち素敵な恋人ができるだろうから、無理しなくていいのよ」

「ぼくの恋人はママだよ」

「あら。嬉しい……」

二人はまっ裸のまま抱きあって眠り、明け方、また交わった。

翌朝、悠はなかなか起きてこなかった。

「どうしたんだ、悠は」

父親の柊二が訊くと、

「今日は学校を休みたい。やはりショックだったのかしら。昨夜はずっと眠れなかったというの」

「そうか」

夫はそれ以上詮索もせずに、食事を終わるとそそくさと大学に出かけていった。

彼は妻が昨夜、悠と三度も交わったことにまったく気がついていない。夜も明ける頃、悠はそっと美夏絵のベッドを脱け出て自分の部屋に戻ったのだ。

悠が起きてきたのは、もう昼近い時間だった。やはりエネルギーを相当消耗したので、空腹を覚えて目が覚めたのだ。

弟や妹も学校に出かけて、家のなかにいるのは悠と美夏絵だけだ。

「ね、ママ。愛しあおうよ」

熟睡して精力を回復させた若い牡は、食事をすますと美夏絵に迫った。

「元気ね、悠ちゃん……。ママはくたくたなのに……」

言いつつも悠を浴室に導き、体を洗ってやる美夏絵だ。自分も素っ裸になり、タイルに跪ついて悠の勃起を口に含む。

「あつ、ママ……」

美夏絵のフェラチオは麻耶の幼稚な口唇愛撫とは格段の差があった。彼女は男の感覚をよく理解し、睾丸、会陰、肛門までを巧みに舌、唇、歯、指を使って責めたて、男根を極限まで昂らせるのだった。

「ああ、たまらない……」

悠は母親に挑みかかった。

「ね、後ろから……」

美夏絵は一系纏わぬ豊麗なヌードをタイルに這わせた。自分を牝犬のように犯せというのだ。

「すごい」

むき卵のように艶やかで、熟しきった女の魅惑ではちきれそうなヒップを、悠は抱いた。ま昼の光のなかで熱い怒張に貫かれた女体がうち顫えた。

一度、夥しく噴きあげるものを受けとめた女は、寝室に息子を誘う。

「ね、ママ。スリッパを着てくれない？」

悠は頼んだ。

「スリッパ？ ああ。悠ちゃんはスリッパが好きなのね。ママがスリッパ着てると、いつも目を輝かせて……」

「えっ、知ってたの」

「当然でしょ。……何色がいい？」

「藤色の」

「ふうん。上品なのがいいのね」

まさか、それを着て自慰に耽った美夏絵を見て最高に昂奮したとは言えない。

その夜も、また次の夜も、悠が黒須柊二の家を去るまで、悠と美夏絵は肉交に耽った。美夏絵は男女間の性愛テクニクをすべて教えこんでやったのだ。

第三章 兄いもうと

1

高校が夏休みに入った。悠が本郷の菜穂子の家へ行く日がきたのだ。とうに養子縁組抹消の手続きも済んでいる。

その日が来るのを一番嘆き悲しんだのは、妹の美咲だ。

「お兄ちゃん……」

家を出てゆく悠に向かって小学校六年生の少女は抱きついて、しばらく離そうとしなかった。すぐ上の兄、浩がコンピュータに没頭して少しもかまおうとしないので、美咲は優しい悠を慕っていたのだ。

「馬鹿だな、美咲。これで会えなくなるわけじゃないんだよ。これからも時どきこの家に来るし、美咲だって好きなときに菜穂子叔母さんの所に遊びに来ればいいじゃないか……」

しがみついて啜り泣く妹の体を抱いて慰める悠は、美咲の肉体もまたふつくと胸や腰がふくらみ、女らしい芳香を漂わせているのに気づいてドキッとした。

（こいつも、いつのまにか魅力的に女の子になってきたんだ……）

妹として見ていた美咲は、いま、美しい従妹なのだ。

美咲が嘆き悲しむのとは対照的に、弟の浩はクールなものだった。彼は悠が実の兄ではないと知らされても驚いた様子を見せなかった。悠は訊いてみた。

「浩。おまえはぼくがママの実の子じゃないってこと、知ってたのか？」

「言われたことはないけど、うすうす気づいてはいたよ」

浩がまだ小学生だった頃、父親の柊二は彼の成績表を見て算数、理科の成績が抜群に良いことを知っておおいに喜んだ。そのとき、

「うむ、浩はやっぱり私の子だ」

そう呟いて褒めたという。

「そのときに思ったのを、『じゃ、兄さんは本当の子じゃないのかな』ってね」

「そうか……」

「それに、菜穂子叔母さんが来たとき、兄さんのことをじっと眺めたものね」

「それは気づかなかったな……」

菜穂子はやはり自分の子の成長ぶりを気にかけていたのだろっ。

（あのひとは、それなりにずっと母親の気持ちでほくを見ていてくれたんだ……）

そう思うと、自分を手ばなしたことを憎む気持ちも消える。

（そのおかげで、ママというすばらしい女性に育てられたわけだし……）

「まあ、兄さんの才能は文学とは芸術の方面に向いてるよ。だから菜穂子叔母さんのところに行ったほうが、結果的には幸福だと思うよ……」

……

弟の生意気な口調に、悠は苦笑した。

「そうだな……。この家をしょって立つのはおまえに任せるよ。ママと美味を頼むぞ」

「うん」

そんな会話をかわして悠は家を出たのだ。

美夏絵とは、また時おり「恩がえし」のために会うことを約束している。彼女と離れて暮らすことについて感慨はあったが、別れの悲しさはなかった。

（考えてみれば、誰だっていつかは、母親と別れて暮らすことになるんだから……）

本郷にある黒須京伍未亡人の家は、終戦後に建てられた木造の二階建の邸宅だ。ある銀行頭取が自分の嗜好で建てた、ハーフティンバー

様式という英国風の本格的な洋館である。周囲に高い塀をはりめぐらし、庭木は鬱蒼と茂って門の周囲などは昼なお暗いほどだ。玄関ホールに立つと高い天井に音が反響する。

京伍は幻想的怪奇的な画風の画家だっただけに、どこことなく陰鬱な風情のこの建物が気に入り、強引に購入したという。

（わかるな……。ほくもこつという雰囲気の建物のほうが好きだ）

柀二が建てた家はモダンな設計で、非常に暮らしやすいが、それだけに遊びとか無駄な部分がなく、味気ないといえは味気なかった。

悠を迎えたこの館の女主人、黒須菜穂子は、

「いらつしやい、悠さん。よく来てくれたわね……」

葬儀のときに見た青白い顔には、うつすら血の気がさしている。長男の死というショックからよく立ち直ったものと見える。

「ママと呼んでいいですか」

そう提案すると、嬉しそうに笑い、気品ある未亡人は、

「もちろんよ。嬉しいわ。……ママはあなたをどう呼べばいいのかしら？ 悠さん？」

「それじゃ他人行儀ですね」

「でも、悠ちゃん、じゃなれなれしいわ。……悠くん、ならどう？」

「それでいいですよ」

二人はたがいの顔を見あって笑った。すると菜穂子は真剣な顔になって悠をのぞきこむようにして、

「悠くん……。ママを怨んでいない？」

「どうしてですか」

「だって……。赤ちゃんのときに手ばなしてしまって、それで美夏絵さんにあんなになついていたのに、急にまた引き取るなんてことになつて……」

「でも、事情があつたことはママ……。美夏絵ママから聞きました。

そりゃ、複雑な気持ちだけど、二人のお母さんを持つのも悪くない気持ちです。愛してくれているなら……」

「ええ。愛してるわ、悠くん……」

菜穂子は赤児のときに手ばなし、いま自分の手もとに帰ってきた息子に歩み寄ると、両手で少年のほっとした体をしっかりと抱きしめた。

（うわ、意外とグラマーなんだ）

ぴったりと肉体が密着したとたんに、悠は驚きにうたれた。見た目には華奢な肉体だが、ドレスをとおして感じられる乳房やヒップの肉づきは意外なくらい豊かだ。着痩せするタイプなのだろうか。

そして、まだ四十にならない熟れた女体からたちのぼる芳香が、悠をつつとりさせた。香水は母親のよりもっとフローラル系の強い香りだが、肌からの匂いとミックスした香りは、美夏絵に負けにくいくらい官能的で刺激的だった。暖かい体に包まれながら、悠は勃起した。

「ああ、悠くん……。お母さん、幸せ」

菜穂子は息子の欲情には気づかない様子で涙ぐみながら十分ほども彼を抱きしめたのだった。

悠に与えられた個室は、母屋の二階で、圭が使っていた部屋の隣りにある十畳ほどの洋室だ。本来は客室だったにちがいない。

「圭の部屋をそのまま使えばいいんでしょうけど、いまは入る気にもなれないの。そのうち片づけたら……」

菜穂子はそう言った。わが子の思い出が詰まっているからだろう。

麻耶の部屋は廊下をはさんでま向かいだ。菜穂子は悠と麻耶の関係を心配していないようだ。

(この調子では、麻耶の攻撃を受けるな)

そう思っている以案の定、

「いらつしゃい、悠兄さん……」

菜穂子との母と息子の関係を確認する儀式をこっそり眺めていたらしい麻耶は、真夜中になると、そつと悠の部屋に入りこんできて、ベッドに潜りこんできた。

「これで、悠兄さんといっしょに暮らせるのね」

薄いネグリジエ一枚の麻耶に抱きつかれ、悠はどきまぎした。彼女を実の妹とは知らずに性的な遊び相手にしてしまったことに、後ろめたさを感じているからだ。

「そつだよ。でも、いとこ同士という関係じゃないぞ。ぼくは麻耶の実の兄なんだから、いままでとはちがうぞ」

「あら、どつちがうの？」

目をまるくして無邪気に訊いてくる。

「……つまり、兄と妹はふつう、セックスみたいなことはしないんだ。だから、麻耶とはもうああいっただことはしない」

「どうして？ 兄と妹だからって、好きなのが嫌いになるわけじゃないんでしょ？」

「だけど、セックスみたいなことはダメ」

「いやよ、そんなの。麻耶はね、悠兄さんに処女をあげるって固く誓ってたんだから」

「ばか、よせよ」

菜穂子に聞かれるのではないかと悠は心配になった。悠と麻耶がそんな関係だと知ったら、彼女はびっくりして腰を抜かすだろう。

「とにかくダメなの。いとこ同士ならともかく、今度は本当に本物の近親相姦になっちゃうんだから」

「近親相姦のどこが悪いの？ じゃ、この前可愛がってくれたときは、麻耶のことを本当に愛してくれてなかったのね！？」

可愛い口を尖らせてしつこく反論してくる妹だ。

「そういうわけじゃない。わけじゃないけど……」

悠は困ってしまった。自分でも説明がつかない。いま目の前にいる麻耶も、去年、夏の海岸で愛撫しあった麻耶も同じ女の子なのだ。自分だって別人になったわけではない。

「とにかくぼくはおまえとセックスはしないんだ」

「いいわ。絶対してみせる」

麻耶はひき下がらない。悠は唸った。

「どうしてそんなに悩むのよ」

「これが悩まずにいられるか。兄貴にセックスを迫る妹なんて聞いたことがない」

「だって、悠兄さんだって麻耶とセックスしたいんでしょ？ ね？」

そう言っただけ毛布をはねのけ、自分のふくよかな胸やヒップのふくらみを悠に見せびらかす。それは魅惑的な眺めで、悠の頭はなおさら理性と本能の谷間で混乱する。

「……そりゃ、したい」

「だったら、すればいいんだわ。わたしたちがセックスしたって、誰が迷惑するわけじゃないし」

美夏絵が口走ったことと同じ言葉を麻耶も口にした。

「うーん……」

悠は困りはてたが、それでも断固として宣言した。

「だめだ。とにかくぼくは実の妹とセックスをするわけにはいかないんだ！」

それでも結局、二人は接吻と手指の愛撫で満足しあつた。

2

悠が菜穂子のもとへ来てすぐ、圭の四十九日法要がふたたびF寺で、ごく身内の者だけを集めてひっそりと行なわれた。

柘二夫婦の養子となっていた悠が、実母である菜穂子のもとへ戻つたことは、その席で一族に報告された。

中陰の満ちるのを待ちかねたように、菜穂子は悠とともに軽井沢の別荘へ赴いた。彼女はことのほか暑さに弱い体質なので、子供たちが夏休みになったらすぐ避暑に出かけるのを恒例としていたのだが、今は圭の死があつたために遅れていた。

(どんな別荘なんだろう?)

悠はその別荘をまだ一度も見ることがなかったので、楽しみだった。

「悠兄さんは驚くわ。すごく古い建物なんだから」と麻耶は教えた。

画家・黒須京伍がその山荘を買つたのは、いまから十年あまりも前になる。

彼はいたく軽井沢が気に入り、やがて敷地の一角にアトリエを建て、年間を通じてそこで制作に専念するようになった。菜穂子は東京にいて息子や娘の世話にするかたわら、週末は軽井沢へ行き、夫の面倒をみる。という生活が、彼が焼死するまで続いた。

「圭兄さんは気に入ってたみたいだけど、麻耶はあの別荘、あまり好きじゃないんだ……。だって日当たりは悪いし、東京の家より暗くてじめじめしてるんだもの。それに、パパが焼け死んだ場所でしょう? ママがごつしてあそこを売らないのかわからないわ。土地だけでも、相当な値段で売れるって話なのに……」

麻耶はそう不満げに言う。しかし、菜穂子は自分なりに愛着を持つ

ているのだらう。老朽した部分を修理して、まだまだ使うつもりらしい。

出発の日が来た。麻耶だけは箱根で合唱部の合宿があるため、一週間ほどしてから軽井沢へ来るのだという。

菜穂子は赤いアウディ200クワトロを持っていて、助手席に悠を乗せた。関越自動車道を飛ばせば本郷の家を出てから二時間と少しで軽井沢に着く。

軽井沢の高度はおよそ一千メートル。猛暑の東京と比べると、やはり空気はひんやりとして肌に心地よい。

「この駅前が新軽井沢。ここの人は新道って言うてるわ。明治の中頃に国道と鉄道がとおって、新しくここに町ができたから」

「じゃ、旧軽というのは、以前からある町のことなの？」

「そうよ。ほら、こっちの賑やかなほうね。地もとの人は旧道っていうけど、この通りが古い中山道の宿場町の通りだったからよ。……これをまつすぐ行くと、昔、旅人が歩いて越えた碓氷峠に通じるの。熊野権現って由緒ある神社があつて、軽井沢高原と関東平野が見渡せる見晴らし台があるから、あとで連れて行ってあげる」

この土地をよく知らない悠のために、ハンドルを握りながら菜穂子は説明してやった。

まるで原宿か六本木のように若者たちで賑わう商店街を抜けると、周囲は急に森閑として山の斜面が迫ってきた。浅間山は手前の山に隠れて見えない。

車は、清冽な溪流を越える橋を渡ってから旧碓氷峠に登る広い道はずれた。少し行くと舗装が途切れ、落葉松林のなかを縫う、轍の跡がえぐれた荒れた道になる。車のすれちがいても容易でない細い道だ。菜穂子はわりと手慣れたハンドルさばきでアウディを走らせた。時どき、路面の石が車体の底にあたり、ゴツゴツといやな音をたてた。悠は意外だった。

（へえ。軽井沢といっても、こんな寂しいところもあるんだ……）

ところどころ木の間がくれに山荘が何件か見え隠れするが、尾根と尾根に挟まれた谷筋の土地なので陽光が遮られて暗く、観光気分の若者たちも足を踏み入れる気分にならないらしく、静謐さを保っている地帯らしい。

「さあ、ついたわ」

ひときわ急峻な坂を昇りつめてから菜穂子が言った。カーブを曲がると、忽然と、古びた建物が落葉松の木の間にこしに姿を現わした。

(うわ。まるで怪奇映画に出てくるお邸だな……！)

麻耶が言つとおり、見るからに陰気な雰囲気を漂わせた黒いスレート葺き二階建の洋館である。広い敷地はまっ黒な浅間の焼石を用いた低い塀に囲まれている。

林のなかにうづくまって獲物を待ち伏せする老いた野獣のような、どこことなく不吉な印象は、外壁の漆喰が長い年月のあいだに黒ずみ苔むし、さらに蔦が一面に這いかぶさってしまったているせいだからだろう。ただでさえ谷間で不足気味の日照が遮られているせいもある。

赤錆びた鉄の門扉は開けはなたれていて、門から正面玄関に到る道は砂利を敷きつめてある。

菜穂子はアウディを車まわしに駐めた。

「ああ、奥様。いらっしゃい。これはこれは新しいお坊っちゃまも……」

七十ほどではないかと思われる老人が、車の音を聞きつけて玄関の黒光りする櫛の扉を開けた。

(新しいお坊っちゃま、か……)

悠は苦笑した。

老人は土屋という名で、この山荘を買って以来、管理を頼んでいる土地の人物だという。屋内は彼の手でよく清掃され、女主人と新しい息子を待ち受けていた。

なかに一歩、足を踏み入れて、悠はクラシクな内装に驚かされた。いたるところアールヌーボー風の曲線が用いられ、精緻な木彫のほどこされた重厚な梁、柱、窓框などから、この建物が明治後期か大正初期の建物だということが悠にもわかった。

(ふうん。たしかに雰囲気のある家だな……)

悠は本郷の家よりも、この山荘のほうがもっと気にいった。最近京都内でもこういった洋館はめったに見られなくなった。菜穂子が手放す気になれないのもうなずける。

そもそもはさる公爵が避暑用に建てたものだが、戦後人手にわたり、一時は精神病院の院長が特別な患者を治療するため、入院施設として

使用していたという。

「その当時は窓という窓に鉄格子がはめられていましたな……。狂人がいる、ということまで、土地の人間もこのお邸には、あまり近よらなかつたものですよ。まあ実際は凶暴な患者はいなかつたようですが……」

人のよさそうな管理人は、もの珍しげにあたりを眺めまわす悠に教えてくれた。

その院長の死後は売りに出されたものの、設備が旧式で住みにくく、買手もなのままに放置されていたのを、黒須京伍が手に入れ、かなり金をかけて住めるようにしたのだ。

京伍の死後、菜穂子はこの土地と建物を売ろうと考えたこともあったが、息子の圭が反対し、結局、維持しつづけることになったのだという。

夕食前、悠は庭に散歩に出た。

まだこの周辺の地価が安い時代買ったものだから敷地は広い。緩い斜面だが干坪ちかくはありそうだ。周囲はまばらに植えこんだ落葉松が成長し、たださえ不足な陽光を遮って森閑とした雰囲気醸しだしている。地面には長年にわたって降り積もった落葉が濃いベージュ色のふかふかした絨緞のようだ。

館からすこし離れたところに、ぼつかりと木がはえていない切り開かれた空き地があった。暮れなずむ空からの光がさしこんで、そこだけが、物の形が判然とするくらいに明るい、不思議な空間を形成していた。

近寄ると夏草が繁るなかにゴロゴロと石材が転がっている。見ると暖炉の崩れた跡だ。

「ここがアトリエのあったところ……。あなたのパパが焼け死んだのはここよ」

ふいに背後で声がした。山荘にいとばかり思っていた菜穂子が、留守にしていた邸の周辺を見まわりにでも出てきたらしい。落葉松の落葉は足音を消してしまう。

「ふうん。ここなの……」

悠は、実の父が事故で焼け死んだという場所を感慨にとらわれて眺めまわした。

夕闇が迫る落葉松林は、鳥の声のなく静謐だった。確かに喧噪から逃れて幻想の世界に耽溺するには恰好の場所だ。

「あのひとはこの土地を買ってから、落葉松を切り倒してアトリエを建てたの。ピラミッド形に木を組み合わせた、ちょっとユニークな建物だったんだけど……」

黒須京伍は、作品の制作に熱中すると、母屋には帰らず、ここで寝泊りしていたという。ある夜、おそらくは石油ストーブの過熱がなかで猛火がアトリエを包み、主の画家は制作中の作品とともに焼かれたのだ。

悠は夏草のあいだを踏みわけてゆく。すると足の下に固いコンクリートの感触があった。

（これがどだい……？）

夕闇のなかで目をこらすと、十坪ほどのほぼ正方形の敷地一面にコンクリートが打ちこまれている。まるで舞台かなにかのようだ。

「このコンクリートはなんのため？」

「ここは湿気がひどいの。古い井戸みたいなものもあって、湿気が床からあがると絵に悪いと言って、主人はまずコンクリートを平たく流しこんで、その上にアトリエを組み立てたのよ」つまりアトリエは、頑丈なコンクリートを人工岩盤の上に、ピロティ形式で建てられたのだ。焼けた建物の残骸は片づけられたが、その下のコンクリートスラブは残されて、それはところどころひび割れているが、まだまだ頑丈だ。

「これを取り除くとなると大変だね」

「そうなの。これを壊すための機材をここまで運びこむには、道から拡張しなければならぬ、っていうのよ。相当大がかりな工事になって費用もすごくかかる。っていうから、しかたなくそのままにしてあるんだけど」

ふたりが肩を並べて山荘に戻ると、車まわしにアイボリー色のベンツがのりこんできたのが見えた。500SEL。圭の葬儀のときに見た、最高級車。

「まあ、石堂さんだわ……」

気品のある未亡人が眉をひそめた。鬱陶しいような感情の響きがこめられているのを悠は聞きのがさなかった。

「圭兄さんの葬儀のときに来ていた、体格のいい男の人でしょう？赤坂にレストランをもっているとか……」

「ええ、そうよ」

「うちとどんな関係の人なんですか」

悠の質問に菜穂子は一瞬、口ごもった。

「あの人は……パパの絵のファンでね、前々からの知りあいなの。私がブティックをやるときもいろいろ面倒を見てくれたんだけど……」

悠と菜穂子が車まわしに近づくと、ちよつと石堂が車から降りるところだった。ヘラスレスのように頑丈な肉体をゴルフウェアに包んでいる。白いポロシャツは盛りあがった筋肉ではちきれそうだ。

石堂はなれなれしい口調で、

「やあ、菜穂子さん。ひさしぶり。ちよつとゴルフ帰りに寄ってみたんだよ。もう来てるかなと思って……」

そこで悠を見た。一瞬、ぎくつとしたような表情が走った。

「お。きみは……！？」

「悠です。圭の弟で、伯父のところの養子に……」

菜穂子が紹介すると、

「あつ、そうか。きみが例の……。いやあ、驚いたよ。まるで圭くんそっくりだから」

「そうですか」

「うん。ちよつと暗かったし、光線の具合もあるんだろうが……。いや、やっぱり京伍さんの血を継いでいるのはまちがいない。わはは」

石堂は一瞬の狼狽を笑いにまぎらした。

よく日に焼けた逞しい肉体は、中年にありがちな贅肉は見られない。

彼のレスラーのような肉体からは周囲を圧するようなエネルギーが発散しているようだ。

「じゃ、着いたばかりだというから、まだ落ち着かないでしょう。いずれまた来ますよ」

石堂は急に気を変えた様子で、メルセデスにふたたび乗りこみ、帰っていった。

（どうしてぼくを見て、あんなにびくくりしたのだろう？）

悠が訝っていると、その心を読んで、

「悠くんを圭だと思いきんで、幽霊が出たのだと思ったんじゃない？」

菜穂子が微かに笑った。

この山荘を建てた公爵は、英国の貴族の館をかなり精密に模倣したらしい。

一階には居間、応接室兼用の書斎のほか、球つき台の置かれている娯楽室、喫煙室、ベイ・ウィンドウが張り出したサンルームまである。ほかには、ゆづに二十人は食事ができる大テーブルがおかれた食堂、台所、食器室、家事室、リネン室があり、裏手から使用人のための和風の棟につながっている。

母屋の二階には個室が四室ある。菜穂子の寝室、そして圭と麻耶の個室。残りの一つが来客用の寝室だ。天井は高く、古風なシャンデリア風の照明が吊されている。

各室にはそれぞれバスルームが付着していて、猫脚のついたクラシックなスタイルの珪瑯びきの浴室が、白いタイルの床に据えられていた。

ここでも悠は、使われていなかった来客用の部屋をあたえられた。母親は、やはり死んだ息子の部屋をとうぶんそのまましておきたいらしい。

亡き兄の部屋は悠の部屋と廊下を挟んで向かいあっている。悠は夜になってひとりになったとき、そうつと覗いてみた。やはり実の兄がどんな人間だったか、部屋を見ることで知りたかったからだ。

ベッドと机が置かれ、隣の妹の部屋に接する壁側に、造りつけのクロゼットと本棚。造りは悠の部屋と鏡像になっているほかは、まったく変わらない。菜穂子の話によると、圭は夏ばかりではなく、週末や連休などを利用してよく独りでやってきて滞在したという。そのせいか、室内には圭の体臭がまだ漂っているようだ。事故で死んだ日も、二十一歳の大学生はこの部屋で目覚め、それから車で出かけていったのだ。

一応は勉強もしたのだろうか、机の上には筆記用具や辞書、ノートの種類も見える。本棚を見るとかなり本が並べられていた。

小説はミステリやSFが多い。それに混じってサドの作品や、『O嬢の物語』のような好色文学もけっこうある。

クロゼットを開けると、意外なことにかんりの数の服がハンガーに吊るされていた。ブルゾンやセーターなどカジュアルなものが多い。どれも若者たちが憧れる有名ブランドのもので、悠はあらためて自分

より四歳年上の兄が、刹那的な快樂を愛する、浪費家のプレイボーイだということを確認させられた。

終二の家も裕福で、悠も何不自由なく育てられた身だが、衣服をこのように贅沢に着こなす趣味はない。

(圭兄さんは、かなり好き勝手に生きた人らしい……)
やはり悠は、実の兄に対して好感を抱くことができなかった。

3

これまで軽井沢で暮らしたことがなかった悠にとって、山荘での毎日は楽しかった。菜穂子は鬼押し出しや八風山を経て神津牧場など、周辺の名所へドライブに連れていってくれた。圭を失った悲しみも、悠を得たことで埋めあわせられたのだろうか。典雅な未亡人は日々顔色もよく、以前の元気さを取りもどしたようだった。

しかし、突然、事件が起こった。

軽井沢にやってきて五日目。別荘でも生活にも慣れてきた頃だ。

その日は菜穂子が、やはり軽井沢に避暑に来ているブティックの常連客たちとゴルフに出かけたので、悠は一日を独りで過ごすことになった。

(よし。今日は別荘のまわりを探検だ……)

彼はまだ周囲の地理をよく把握していなかったので、徒歩で探索してみることにした。

「おや、悠坊っちゃん。お出かけですか」

彼がテラスから外に出ると、庭先にいた管理人の土屋老人が声をかけた。

サンルームに面したあたりはさすがに夏草が勢いよく繁って見苦しいので、これから草を刈るつもりらしい。邸石で下刈り鎌を研いでいる。悠はしばらく土地の老人が鎌の刃を鋭く研いでゆくのを眺めている。その手つきは熟練して見事なものだ。

「どれ、切れ具合は……」

試しに近くの雑草の茎に刃を当てると、力もいれないのに茎はスッ

バリと切断された。

「すごい切れ味!」

悠が褒めると老人は機嫌をよくして、この別荘にまつわるいろいろな話を問わず語りによべってくれた。この土地に生まれ育ち、いまも何軒もの別荘の管理をまかされているだけに、町の歴史や別荘族の事情に詳しい。

悠はふと、好奇心にかられてこの別荘の前の持ち主 精神病院院長のことを聞いてみた。「どうしてここに精神病の患者なんか連れてきたの?」

「いや、あとになってわかったことですが、その院長という人は、えらく身分の高い人ばかり専門に診る医者だったらいいですな。つまり、やんごとないお方の家族とか一流企業の経営者とか……。そういう人たちはいくら金がかかってもいいから、心を病んで治療している身内がいることを隠したがるもんです」

「なるほど……。じゃあ、ずいぶん儲かったらろっね」

「ええ、そうはもう。運転手つきのリンカーンなんか乗りまわしてましたからね。一応は東京の病院の軽井沢分院ということをやってましたけど……。いま、書斎と応接室になってる部屋が院長室で、娯楽室を診察室にしていたんですよ」

つまり、この山荘は富豪や名家の誉れ高い一族が、身内の恥となる精神病患者たちを押しこめておく一種の座敷牢だったのだ……。

「それで、患者は何人ぐらいいたの?」

「二階に四部屋あるでしょう? あれが全部病室でしたから、最高でも四人というわけです。二人のときもあれば、三人のときもありましたかね……。まあ一人から何十万、何百万ともらっていたでしょうからね、それでも充分、経営は成りたっていたんですよ」

悠はびっくりした。自分が寝ている洋室が十年前までは精神病患者が拘禁されていた病室 現代の座敷牢のような部屋だったとは……。

「急に薄気味悪くなったなあ……。自殺したり死んだりした人はいなかったの?」

「さあ、なかのことは秘密になってましたからね……。逃げ出して近くの林のなかで首を吊った患者はひとりいましたが、家のなかで死んだ人はいなかったのじゃないですか」

しかし、土屋老人はもつとショッキングな話をしてくれたのだ。

「死人といえ、院長自身がここで殺されたんですよ」

「えっ!? 殺された!?!」

悠は目を丸くした。

「そうなんです。医者のくせに金もつけに目がくらんだ罰ですかね。

夜中に強盗が押し入ったとかで、そいつと争って殴り殺されたと報道されましたが」

「へえ……」

「院長が殺されたので、ここにいた患者は全部移されて、土地と建物は売りに出されたわけです。ところがそういう因縁はあるし、建物も老朽してましたから買手がつかず、一時は幽霊屋敷みたいでしたな。坊っちゃんのお父さんが買つまではね……」

「親父もよく買ったね、こんな山荘を」

「はあ、なにしろ変わった人でしたからなあ。精神病院のこととか院長が殺された話なんかを聞いたら、よけいおもしろがって、それで買う気になったようです」

しかし怪奇趣味の画家・黒須京伍が、今度は山荘の庭に建てたアトリエで焼死した。惨劇がまた起きたのだ。土地の者は「やはりそこは呪われた土地だ」と言いかわしているという。

「え!? 呪われた土地? じゃ、山荘ができる前からなにかいわくがあるの?」

びっくりして悠は問いただした。老人はちよつと当惑顔になって口ごもつた。

「はあ……。こんなことを話してもいいものやら……」

いっしょに住む家族がいなくて、一人で暮らしているという老人は、おしゃべりの相手ができたので口が軽くなったのだろう、菜穂子も知らないという、昔からの土地の言い伝えを語りだした。

「坊っちゃんのお父さまがアトリエを建てたところに、古い井戸があったんですよ。ほら、あのコンクリートを打ちこんであるところに……。土地のものは以前から、“夜泣き井戸”と言つてましてな……」

この山荘の近くは明治初期までは旧中山道が通っていた。江戸時代のいつの頃か、山賊がこのあたりに跋扈し、旅人たちを襲って金品を奪つては殺し、遺骸をその古井戸に投げこんだという。そのために、

夜になると古井戸から泣き声が聞こえる　というのが、夜泣き井戸の由来である。

「その井戸は石で周囲を囲ったかなり深い井戸で、たしかにあそこにありますよ。とつくに涸れていたのに、この山荘を建てた公爵という人も、すっかり蓋をして誰も近づけませんでしたな。ところがあなたのお父さまが、あそこにアトリエを建てるといって、結局埋めてしまわれたんです……」

「じゃ、おやじが死んだのは、その井戸を埋めた祟りだというわけ？」

「はあ、やはり埋めるときはそれなりの供養のようなものが必要だったのではないか　土地の者はそう言ってますな」

「ママはそのことをいつ知ったの？」

「圭坊っちゃんまがなくなつたあと、耳に入ったようですね。それで『夫や息子が亡くなったのはそのせいだったのかしら』と、一時は真剣に悩んでましたよ。そうとう気弱になつておいででしたから、私もこの館を売っておしまいになるのかな　と思つてたんですが、悠坊っちゃんまがいらしてここが気に入つた様子を見て、その気はなくなつた、とおつちやつてましたよ」

「へえ……」

母親が自分のために決断を変えたなどとは知らなかったが、なんとなく嬉しかった。しかし、この土地にまつわる話は、迷信といえればそれまでだが、不気味な話である。

そのとき、ふいに背後から野太い男の声がかかった。

「よう」

ふり向くと、石堂健介が立っていた。黒いレイバンのサングラスをかけている。ずかずかと庭に踏みいつてきて、

「いくらベルを押しても誰も出ないから、こつちにまわつたんだが……」

…。菜穂子さんは今日はいないのか」

土屋老人に対して、自分の召使に接するような態度と物言いだ。

「はあ。お友達と朝から2日のほうへゴルフへ行きましたが……」

「なんだ」

「その後、レイクニュータウンでお食事されるとか」

「それじゃ、とつぶん帰つてこないな」

独りごとのように言つと、チラと悠を見やつて、気やすい口調で、

「悠くん だっけ。どうだい、この別荘？ 荒れてるし不便だし、まわりは寂しいし……。きみみたいな若い人は、あまり好きになれないだろう？」

そう訊いてきた。

「いいえ。気にいってますよ。こついう雰囲気、ぼく好きなんです」
ハッキリそう言つと、逞しい肉体を持った中年男はびっくりしたような顔をした。

「気に入ってる？ こんなところが？」

「ええ」

「ふーん……」

石堂は悠をねめまわすようにして呟いた。

「きみも兄さんみたいに変わった子だな……」

くるりと踵を返すと、

「なに、たいした用じゃないんだ。また出なおそう」

やがてメルセデスの排気音が林のなかを遠ざかってゆく。

「あの人も不思議な人ですな」

土屋老人は呟いた。

「奥様に結婚を申しこんで、断られても断られても、しつこくつきま
とつて……」

「えっ!？」

石堂が母親の菜穂子にプロポーズをしているというのは初耳だった。

「おや、ご存じじゃなかったんですか」

「だつて……、ぼくは最近まで石堂って人のことも知らなかったんだ
もの」

「なるほど。そうでしたな……。こりゃ悪いことを言ってしまうし
たかな」

老人は頭をかいた。

「まあ、お母さまもあのとおり、まだまだ若くて美しい方ですから、
再婚を申しこまれても不思議ではないですが、あの石堂さんは金持ち
だとしても、どうも品がない。奥様には釣りあわない男ですな……」

「どうやら土屋老人も、石堂の傲岸不遜な態度を気に入ってはいない
ようだ。」

（あの石堂という男、どうして菜穂子ママにつきまとうんだろう……？
おやじの絵のファンだった　と説明してたけど、いったいどうい
う関係なのか……）

雑木林に覆われているゆるい山の斜面をぶらぶらと登りながら、悠
はもの思いに耽っていた。土屋老人から、この上に林道が走っていて、
そこから峠へ出る野鳥探索のための道を歩くといい散歩になると聞い
たからだ。

ようやく林道に出たときは汗をかいていた。教えられた方向へ向かっ
てぶらぶらと歩くと、ところどころに瀟洒な別荘が点在している。

するうち、急に周囲の森が切れて視界が開けた。尾根の突端に出た
のだ。そこは急な崖を切り開いて道をつけたので、眼下の軽井沢市街
から南のゴルフ場がある平坦な土地までずうっと見晴らせる。よく晴
れているので、わずかに噴気の見える火山の火口も山並の向こうに仰
ぎ見ることができた。

（いい眺めだ……）

林道が急カーブを描いている。一番見晴らしのいい地点に立って、
悠はしばし爽やかな風に吹かれて高原の眺めを楽しんだ。

そのとき、一台の自動車がいま来た道の向こうから近づいてきた。
シルバークレイに塗装された四輪駆動のパジェロだった。

悠はやりすごすために路肩へ退いた。ガードレールはなく、運転を
まちがえばかなり高い崖から転落することになる。

（恐ろしい道だな。ここから落ちたら助からないぞ）

崖の下を見下ろしながらそんなことを考えた悠だ。

ブオオ！

排気音が近づいた。なにげなくパジェロを見ると、運転手は若い男
らしいが、顔はおろしたサンバイザーの陰になってよく見えない。

（あれっ！？）

ごついパジェロの車体がまぢかに迫って、ようやく悠は危機に気づ
いた。カーブなのに、運転者はほとんどスピードをゆるめずに、悠に
向かってまっすぐ突っこんでくるのだ。

「ばか。やめろ！」

背後は崖である。後ろに下がるわけにはゆかない。悠は逃げようが

なかった。

「グワッ！」

パジエロはぎりぎりのところでブレーキをかけてハンドルを切った。しかし、左側のヘッドライト部分で悠を薙ぎ払うようにはね飛ばした。

「うわああ」

悠は激しい衝撃を受け、宙にはね飛ばされた。光景がでんぐりかえり、また激しい衝撃を感じ、あとはなにもかもわからなくなった。

4

悠が意識を回復したとき、彼の体は包帯でぐるぐる巻きにされて病院のベッドにくくりつけられていた。

崖のすぐ下の藪に、ひっかかるようなかたちで落ちて気を失っていた少年を発見したのは、近くの別荘工事の現場に向かっていた建築会社の現場監督だった。

作業員が呼ばれて駆けつけ、ひとりが命綱をつけて崖をぶらさがり、気絶している悠の体を林道までひき揚げた。救急車が彼を町立病院まで運んだ。

さいわい、藪がクッションの役をはたしてくれたので、あちこちに打撲傷やすり傷を負ってはいるが命には別状がないことがわかった。

しかしレントゲン撮影をした結果、左足の踵の部分にひびが入り、右手首も挫いていた。

足首にはギプスがはめられ、手首もしっかりと添え木で固定されてしまった。つまり、とうぶんのあいだは身動きができないということだ。

「まあ、落ち方が悪かったら岩に当たって命はなかったらうな。不幸中の幸いだよ」

ひき逃げ事件ということで軽井沢署からやってきた警官は、病院にやってくると、そう慰めてくれた。

「あのスーパー林道は、山道に慣れていないドライバーがよく事故を起こすんだ。きみをはね飛ばしたパジエロも、東京あたりから来た車で、カーブを曲がりそこね、路肩に立っていたきみにぶつけてしまい、

あわてて逃げたんだろう。手配はしてるがナンバーがわからないのでは見つかるかどうか……。なにしろパジエロはこらへん、多いからなあ」

警官は偶発的な事故だと判断している。それでなくても、政財界の要人がぞくぞくのりこんでくる時期だけに、避暑地の警察は多忙をきわめているのだ。被害者の傷が全治三週間と比較的軽いこともあって、捜査に対する熱意は感じられなかった。

（でも、カーブに突っこんでくるとき、まるでぼくをはね飛ばそうとも思っているかのようだったの……）

実際、悠は事故の直前、パジエロの運転者の殺意のようなものを感じていた。しかし、誰がなんのために悠を崖から突き落とそうとするのだろうか。狂人でもないかぎり、自殺的といっていい無茶なことをやらかす理由がない。

報せを聞いて菜穂子が駆けつけてきたのは、警官の事情聴取が終わったときだ。

「悠くん……！ どうしたの？」

まっ青になった母親はベッドにくくりつけられた息子を見て悲鳴のような声をあげ、とびついてきた。

「だいじょうぶだよ、ママ。崖から落ちたけど、ただくじいただけだから……」

強い力で抱きしめられ、悠は息が止まった。菜穂子は泣きそうな声だ。

「ああ……。まばかりでなく、あなたまで失ったら、ママ、生きてられないわ」

「オーバーだな。心配ないって」

逆に慰めながら、悠は実の母の熱い肉体とむせかえる体臭に包まれた。

菜穂子はゴルフの途中だったのだろう。香水 後で知ったのだが、彼女はゲランを愛用している の香りとミックスした熟れた女の肉から発散する体臭が惱殺的な芳香となって、悠の牡の器官を刺激する。（うわ、いい匂いだ……。でも、菜穂子ママのおっぱいも柔らかくていい感じ！）

もちろん美夏絵ほど豊満ではないが、もっとこりこりした密度をも

つ乳房の谷間に悠の顔が押しつけられるようになり、悠は窒息するのではないかと思っただくらいだ。

脳震盪の影響が心配されたので、悠はひと晩入院させられたが、後遺症もないようなので、翌日には退院することができた。

とはいえ、足首の骨に入ったひびが治るまで二、三週間はギプスをはめたままだという。とつぶんは自由に歩きまわることができない身になってしまった。

「やれやれ、せつかくの夏休みなのに、どこへも行けなくなっちゃって……）」

別荘に帰って自分の部屋のベッドに寝かされた悠は、溜息をついた。

「さあ、元気を出して……」

逆に、菜穂子のほうがいきいきとしてきた。不自由になった息子の世話をするのが嬉しくてならないようだ。

「ぼくの世話をする事で、母と子供の間関係を再確認できるからだろ（う……）」

悠もそうやって面倒を見てもらうことに悪い気はしなかった。

麻耶が合宿を終え、軽井沢へやってきたのは、その翌日だ。

「悠兄さん！ 大怪我をしたんだって!？」

山荘に到着するなり、彼女はオーバーな声をあげて彼の部屋に飛びこんできた。

「そんな大怪我じゃないってば」

「でも、ギプスしてるじゃない。可哀想だわ……」

いきなりしがみついてきて、接吻する。甘酸っぱい美少女の髪や肌の匂いが鼻をくすぐり、悠は真昼なのに勃起した。

「こら、ママに見られたらどうするんだ……」

「だいじょうぶ。ママは町に買物に出かけたから」

白い夏服のまま、ベッドに横たわっている兄の上に馬乗りになる大胆な姿勢で、ひとしきり熱烈に舌をからめ唾液をすする濃厚な接吻をする妹だ。手は彼の股間をまさぐる。

「よせよ、麻耶……」

「すーいー！ こんなにっ……。とっっても怪我したなんて思え

ないわ」

嬉しそうな顔をして麻耶は、悠の寝衣の下に指を潜らせ、ズキズキ脈打っている男の器官を握りしめた。

「ね、出してないんでしょ？　すぐ溜まってるみたい」

そのとおりだ。事故の後、悠はオナニーをしていない。

「わかるのか」

「だって、その手じゃできないでしょう」

挫いた右手首はまだ湿布されて包帯がぐるぐる巻きた。

「麻耶が出てあげようか」

兄に接吻を浴びせながら、実の妹は怒張しきった肉を愛撫しだした。

「あ、うっ……。よせよ、麻耶……！」

悠は柔らかい掌で握られ、しごきたてられると思わず呻き声を洩らした。

「ああ、合宿でも悠兄さんのこれを思い出して、とても触りたかったわ……」

麻耶は心底嬉しそうに言い、からめた指を巧妙に蠢かす。

「あ、あうっ！」

たまらずに悠は噴きあげた。粘り気の強いやや黄色が濃い精液が麻耶の手指をねっとり汚した。

「やっぱり溜まってたのね、こんなに……」

放出した後の虚脱感から回復し、悠が目を開けると、彼のペニスを拭い終えた麻耶がサマードレスを脱ぐところだった。

「麻耶……」

びっくりした悠に向かって、早熟で好奇心の強い美少女は婉然と笑ってみせた。

「わたしがいなくて退屈だったでしょう？　慰めてあげるね」

パンティも床に脱ぎ捨て、一糸纏わぬ全裸になると、すばやく悠の横に飛びこんできた。

悠は狼狽した。

「ばか、麻耶。言ったらどう？ ぼくたちは実の兄と妹なんだ。こんなことしちゃいけない関係なんだ」

「誰が決めたのよ、そんなこと」

麻耶は悠のパジャマの前をはだけ、素肌を愛撫してくる。股間の萎えた器官もくるみこまれ、柔らかく揉まれると、たちまち元気を取りもどす。美少女の指はまるで魔法使いだ。

「事故で悠兄さんが大怪我をした、って聞いたとき、麻耶、ほんとに泣いちゃったわ。そして、悠兄さんがこのまま死んでしまったら、一生、セックスしなかったことを後悔すると思っただわ……」

真剣な目と声だ。

「しかし……」

悠は妹の迫力に気押された恰好だ。

「ちょうどいいチャンスだわ。今日は絶対にするんだから」

そう言つと、がばと顔を兄のむきだしの股間に埋めた。

「あつ、麻耶！ ま、待てよ……」

巧みな愛撫でふたたび膨張しだした器官がぱっくりと美少女の唇にくわえこまれた。

悠は呻いた。

（冗談じゃない。これは一種の強姦だ……）

悠は必死になって妹をはねのけようとしたが、右手がきかないうえ、左足はギブスで固定されている。いわば半身不随の状態では、強い意志をもつて襲いかかってきた麻耶に抵抗できるわけがない。

「麻耶、やめろつてば。……あー！」

美少女はいまや兄の股間にうずくまり、そそりたつ男根をすっぽり頬ばり、頭を勢いよく上下させながら唇と下と歯を使って強烈な刺激をあたえるのに熱中しだした。

「む……」

悠の全身は甘い快感に溶け痺れたようになり、抵抗の気力が失せた。

若い牡の器官は、信じられないくらい短い時間のうちに血管を浮き彫りにさせ、天を突くほどに屹立した。

「今度はわたしよ……」

麻耶は含んでいたペニスから口を離して、まともに兄の顔の上にま

たがってきた。

悠は見た。白い下腹にふわりと霞む秘毛の叢、その下にキスを待つもうひとつの唇を。十五歳の少女は昂奮していた。ツンと鼻をつく酸味の強い性器の匂い。悠は濡れた粘膜を唇で受けとめた。塩からい磯くさい匂いが鼻腔に溢れる。

「ああ、悠兄さん……っ！」

美少女の若鹿のようなバネを内蔵した肉体がしなやかにそりかえる。ねっとりとした蜜液を悠は夢中で舐めすすった。やや塩からく、それでいて微妙な甘さをもつ液はとるととると燦く粘膜の奥から泉のごとく溢れる。

「気持ちいい……っ。あっ。はあっ」

麻耶の呻きも甘く嘍り泣くようだ。

しばらくして悠の顔にかかっていた圧力が消えた。麻耶は体をうかし、悠の怒張を握りしめた。

「悠兄さん。これ、麻耶にちょうだい……」

熱にうかされた者のようなかすれ声で言い、またがってきた。

「麻耶……」

悠は熱い割れ目にあてがわれたペニスが、割れ目をおし拡げるのを感じた。濡れて熱い肉の亀裂。見上げると、麻耶はなかば目を閉じるようにしている。兄のペニスはしっかりと根元で押さえ、自分の秘裂にあてがって、

ずん。

思いきり体重をかけてきた。

「あっ」

「あ、うっ」

同時に悠と麻耶の唇から切ない呻きが洩れた。悠は緊い感触を覚えた。粘膜が抵抗している。悠の自由になる左手が無意識に伸びて自分の童貞を奪おうとする少女のヒップを抱きよせた。

「むっ……っ！」

麻耶は唇を噛みしめ、背をぴんと伸ばし、鉄のように硬く勃起しているペニスにもう一度、ずんと体重をかけた。

めり。

粘膜が軋み、ふいに抵抗が緩んだ。悠の欲望器官はすっぽりと熱い

潤みに包まれた。

「あ、ああっ……。悠兄さん……っ」
美少女は兄の名を呼び、汗まみれの裸身をわなわな顫わせた。文字どおり身を切り裂く苦痛を味わって、ついに悠を肉の処女地に導いたのだ。

「む……！」

悠ははじめて味わう麻耶の粘膜器官の感触に酔った。それは生まれてはじめて体験した美夏絵のすっぱりと包みこんだうえで締めつけてくる感触とはちがって、最初からきつちりと嵌まった感じで、文字どおり抜き差しならない緊縮感だ。

「あ、ああ……」

閉じた麻耶の脛から涙が溢れる。苦痛と感激のいりまじった涙が頬を伝い、悠の胸に滴る。「麻耶……」

悠もかすれ声で応じた。腰は無意識に突きあげられ、騎乗する姿勢の美少女のヒップを揺すりたてる。

「ああ……ん」

苦痛が薄れたのか、麻耶の吐き出す声が心なしか甘やかに感じられる。悠は、

(とうとう、麻耶と結ばれた……)

不思議な感動に襲われ、同時に激しく昂奮している自分に気づいていた。実の妹と交わっているという自覚が欲情をぐらぐらと沸騰させている。禁忌を犯したことがかえって欲望の火に油を注いだのだ。

悠は快感の炎に全身を炙られ、急速に限界点を越えた。

「あ、あうっ。麻耶……！」

妹の名を叫び、同時に勢いよくどろどろと滾るスペルマをその膣奥へと嘔きあげた。

悠が放出した牡のエキスを全部、はじめて貫通された性愛器官の奥で受けとめた麻耶はしばらくその感覚の余韻を味わうかのようにそのまま騎乗する姿勢を保っていたが、

「はあっ」

息を弾ませ、汗に濡れた兄の胸へ倒れこんで頬ずりする。満ち足り

た顔で、

「やったね！ 麻耶、悠兄さんの最初の女になったわ！」

悠はまだ甘美な感覚に下半身が溶け痺れたようで、けだるさのなかに浸っている。

「射精するとき、ペニスがびくんびくんって顫えるのがわかったわ。

大感動……！」

「痛くなかったのか？」

「入るときに脳天までピンとくるみたいだった……。でも、一度入っちゃったら、あとはあまり痛くなくなったの」

クックツと嬉しそうに笑った。処女を愛する者に捧げた少女の誇らしげな笑い。彼女は脱ぎ捨てたパンティをとりあげて、それを結合部分にあてがってから腰を浮かし、そつと連結をといた。溢れだした悠の放出液と血液は薄く柔らかい布片に吸い取られた。

「これ、記念にとつておこつと」

さほどの量ではないが、スペルマの白濁液と混じってピンク色になった血液の汚れを拡げて見せ、また嬉しそうに笑ってみせる麻耶だった。

処女を喪失したとたん、麻耶は積極的になった。

喪失当日の夜も、彼女は母親が薬で眠った頃を見はからって、兄の部屋にそつと忍びこんできた。

さつさとベッドに潜りこんでくると、

「心配しないで。悠兄さんを永遠に麻耶のものにする、なんて言わないから……」

麻耶はあっけらかんとして言い、兄の寝衣の下に手をさしのべ、ペニスをまさぐりだす。彼女は彼女なりに行為の限界を自認しているようで、強引に結合を仕掛けたのも、ちゃんと危険な時期でないことを計算したうえでのことだ。それでも、

(こんなことで、いいのか……)

悠は悩まずにはいられない。

従兄妹という関係ならともかく、自分と麻耶は実の兄妹なのだ。それなのにセックスを交わすというのは、世間一般の常識では許されない行為のほうだ。

しかし、行なう前は抵抗があったのに、一度強引に麻耶に求められて交わってからは、自分でも驚くほど罪悪感がない。
(どうしてだろっ?)

麻耶があまりにも無邪気なせいかもしれない。

彼女は、悠が実の兄だから性交の対象にしてはいけない という倫理的な観念などに最初からとらわれていない様子だ。ただひたすら、幼いときから憧れていた異性である悠と裸で愛撫しあい、たがいに刺激しあい、甘美な快感に酔い痴れることしか頭にない。

悠がギブスをしている足首を庇わねばならないため、今度はベッドの縁に悠が腰かけ、まっ裸になった麻耶は、その膝の上から跨る姿勢で交わった。それは誰に教えられたことでもないのに、ごく自然に結合が果たされた。

「あ、うっっ……!」

十分に花心が潤ってから貫いたのだが、やはりまだ十分に拡張されていたわけではなかったのか、少女は苦痛の呻きをあげてひしと兄の首にしがみつくようにした。

「痛いのか」

「うっん。だいじょうぶ……」

けなげに首をふって悠の器官を全部受け入れると、

「あ、はっっ」

唇を噛みしめながら、悠が腰を揺すりあげてくるのに合わせる。二度目だから痛みは最初るときほどではないらしく、すぐに律動的な性愛行為に耽溺していく様子だ。

緊く締めつけてくる感覚に負けて、悠は早目にスペルマを噴きあげた。

「素敵……」

麻耶は悠に突き入れられても、まだクリトリス愛撫で味わうような快感を得てはいないようだ。しかし、兄が歡喜の呻きを吐いてびくびくと体を痙攣させながら噴射すると、情熱の証しともいうべき牡のエキスを勢いよく浴びせられるという精神的な悦びが彼女を昂らせるら

しく、全身を桜色に紅潮させたまま全裸の美少女はしばらく兄の膝の上で呻いたり身を顫わせたりしていた

そんな妹が愛しく、薄い布地で作られた可愛いデザインのパンティで麻耶の秘部を拭い清めてやると、悠は自分の唇と舌でそこに情熱的なキスを浴びせ、彼女のオルガスムスをあたえてやった。

愛撫しながら目を近づけてよく見ると、膣の入口から少し入った部分に粘膜が張り出している部分があり、その下側が切れて出血した痕跡がある。

（これが処女膜だったのか……）

ようやく女体の構造がわかってきた悠は、その部分をそうつと舌で愛撫してやるのだった。兄と妹は、ふた晩続けて寢床をともし、その間に六回も交わった。最後には麻耶も、兄の器官を受け入れた部分で快感を得はじめたらしく、母親の寝室にまで聞こえるのではないかと思うほど、悩乱した声をはりあげたものだ。

しかし、睡眠薬を常用している母親は、息子と娘がベッドをともにし、男と女の快楽に耽溺しているなどは、夢にも思っていない様子だ。

ふたりの夜の戯れは、三日めになって麻耶が外泊することになって中断された。彼女の同級生で親しい友人がやはり千ヶ滝の自分の家の別荘に来ていて、誕生日のパーティーをやるからと、泊りがけで招待されたのだ。

「残念。今晚は悠兄さんとセックスできないけど、がまんしてね……」

麻耶はそう兄に耳打ちしてから、午後に、母親の運転する来るまで出かけていった。

（ちようど良かった。ふた晩で六回も麻耶のなかに射精してたから、やっぱりバテ気味なもの……）

いくら若くて性欲が充ち溢れている年頃とはいえ、つい麻耶のかぐわしい肉体に夢中になりすぎたようだ。菜穂子でさえ、朝食のときに、「悠くん……。顔色が冴えないわ。眠れないの？ どこか傷が痛いんじゃないの？」

と心配顔で質問してきたほどだ。

（午後は昼寝でもしようか……）

菜穂子は千ヶ滝から帰る途中、西武の百貨店に寄ってくるという。

午後はひとりで山荘の留守番だ。

いや、独りではなかった。家事室のほうで洗濯機がゴトゴト動いている音がしている。土屋老人の親戚だという中年女性が家政婦として毎日来ている。掃除や洗濯をし、夕食の支度をして帰ってゆくのだ。いまは家族の衣類を洗濯しているらしい。

（そうだ、ぼくのジーンズを洗ってもらおう……）

悠は自分の部屋にゆき、ジーンズを持って家事室へ入っていった。家政婦の姿はない。洗濯機を動かしたまま、どこかの部屋でも掃除しているのだろう。

（あれ……！？）

悠はまだ洗っていない衣類が入っている籠にジーンズを入れようとして、ハツと手をとめた。

サックスブルーの布片が籠の端からはみ出ているのが見えたからだ。レース飾りのついた、なまめかしい女性の下着だ。

（菜穂子ママのランジェリーだ……）

悠の胸がときめいた。美夏絵と同様、菜穂子も年頃の息子の前では露出した肌や下着姿などを見せないよう気を使っているらしく、実際、悠はまだ実の母の下着姿を目にとめたことがない。下着さえ、いま見るのはじめてなのだ。

家政婦がいないのをさいわい、悠はそうつと下着類の入った籠に近寄って浅葱色の下着を手にとってみた。

（うわ。すごくセクシー……！）

それは絹とポリエステルを混紡した素材らしく、絨やかな光沢もち、スベスベとしているが同時に肌にしっとり纏わりつくような感触ももっている、いかにも高価そうなレース飾りのついたスリッパだった。たぶん、同色のサマードレスに合わせて選んだ肌着にちがいない。

「あ」

そのとき、ハラリと床に落ちたものがある。同じ色、同じ素材のパンティだった。それは直接家族の目に触れるのを厭うように、スリッパにくるみこまれていた。

（菜穂子ママのパンティ……！）

悠はドキッとした。カツと頭に血がのぼる。美しい母親の、一番秘められた部分を覆って、体臭や分泌物を吸いとった布片がいま、目の

前にある。

悠は夢中でそれをポケットにねじこんで、大急ぎで家事室を飛び出した。

自分の部屋に閉じこもってベッドの上で胸をドキドキさせながら、美しい実母の穿いていたパンティを拵げてみる。

(いい匂い……!)

鼻を近づけるまでもなく、高価な素材の布片からは菜穂子の愛用しているゲランの香水の香りがたちのぼった。ということは、彼女は自分の秘部にもつねに香水、あるいはコロンをふりかけているのだ。

麻耶のパンティはだいたい木綿素材で、まるめると掌におさまってしまつぐらい小さいビキニが主だが、菜穂子のはもつとゆつたりしたデザインである。そのかわりレースをふんだんに使った素材なので、恥丘のあたりは透けて見えそうだ。悠は腰ゴムのところを引っ張ってみた。布地は伸縮性に富んでいる。

(へえ。こんなのを穿いたらすべすべしてピッタリして、気持ちいいだろうなあ)

そう思いつつ、やはり一番汚れている部分を目で確かめてみる悠だ。昂奮のため、裏返しにする手がふるぶるとどうしようもなく顫える。

パンティの底、布地が二重になって女性器官から分泌される汚れを吸収する部分は、目で見てわかるほど汚れてはいない。

(麻耶のとは大ちがいだな……)

悠は麻耶の脱ぎ捨てた下着をこっそり探査したことがあるが、日に日に女らしく成長している美少女は分泌活動も盛んなのか、パンティの底はいつも黄褐色の染みになっていて、尿とまざりあった酸っぱいような甘いような刺激的な匂いを発散させている。

それに比べると菜穂子のはほとんど汚れていないと言っているくらいだ。それでも顔を寄せてみると、秘唇が密着する部分からほんのりと女の匂い チーズの匂いに似たような醗酵臭を嗅ぎわけることができた。

(ふうん、ママのあそこは、こんな匂いがするの……。麻耶のとは全然ちがう……)

成熟した女性の匂いをふかぶかと嗅いで、悠は激しく昂奮し勃起した。

(ああ。たままない……)

昨夜だけでも三回、麻耶のなかに噴きあげたのに、悠の牡の器官はむくむくと充血し、膨張し、ショーツの下から突きあげて痛いほどだ。

悠は菜穂子の艶めかしい下着を顔に押し当てながらベッドに仰向けに倒れこみ、下半身を剥き出しにした。

勢いよく天を突くペニス。それは湯気が出そうなくらいに熱を帯びている。

悠はゲランの香水とミックスしていつそつ惱殺的な、母親の秘部の匂いを嗅ぎながら、分身を摩擦しだした。

「ああ、ママ……！」

目を閉じると瞼の裏にほっそりとしてしなやかな菜穂子の肉体が浮かびあがる。悠は妄想のなかで実の母親を裸に剥いた……。

「お、おっっ」

急激に鋭い甘美な感覚が突きあげ、悠はあわてて繊やかな布片をあてがった。

ドビュー！

のけぞった若い牡の男根から熱い、どろどろ溶けた欲情が噴き出し、エロティックな下着をべっとり汚した。

しばらくして、悠は閉じた目を開けた。

(ママのパンティに射精して、汚してしまった……)

罪悪感が鋭い刺となって悠の良心を突く。たとえば美夏絵の自慰シーンを覗き見た後のように……。

(妹とセックスしたうえに、自分を生んだ母親の下着を盗んで、昂奮してオナニーするなんて……。ぼくはまるで色情狂だ……)

虚脱感と罪の意識にとらわれたまましばらく仰臥していた少年は、ふと妙なものに気がついた。

(あれは、なんだろっ……?)

ベッドにあおむけになっていると、ちょうど目のゆく角度に、シャ

ンデリアふうの照明が天井から吊り下げられている。いっぶう変わったデザインで、真鍮らしい金属製の腕木を十字に交差させて燭台をかたどり、その上に小型電球が四個ついている。

十字に交差した腕木にやたら複雑な模様が彫りこまれて、キラキラ光るガラスも数個、象嵌されている。

ところが、そのうちの一つ、ベッドを斜め上から見下ろす位置にあるガラスが、偶然に微妙な光線の具合でキラリと光ったのだが、それがレンズのように見えたのだ。

(へんなものがあるなあ……)

悠はベッドの上に立ちあがって注意深く観察してみた。するとさらに不思議なことに気づいた。

ふつつシャンデリアの類は鎖で吊るされるものだが、この照明具は天井から突き出している真鍮の円筒の先端に取りつけられている。それは電源コードを隠すためのデザインと思えないこともないが、別のもの なにかケーブルのようなものも収められる太さだ。

もし、光るガラスのひとつが本当にレンズだしたら、なにかこの部屋を覗くための仕掛け 覗きカメラのようなものが、腕木を彫りこんだなかに隠されているのではないだろうか。

(でも、なんのために……?)

そのとき、この二階の個室がすべて精神病患者を閉じこめておいた病室として使われていたという、土屋老人の話を出した。

(ひょっとしたら患者の監視装置なのか……?)

向かいあった圭の部屋に行き、シャンデリアを観察した。やっぱり悠の部屋と同じデザインで、同じ位置にレンズのようなガラスが嵌めこまれている。では、麻耶や菜穂子の部屋にも同じ器具が取りつけられているにちがいない。悠の推理はまちがっていないようだ。

(あれは部屋のなかを覗き見るカメラだー)

では、覗き見る人間はどこから見るのだろうか?

(屋根裏部屋しかない……)

悠は思いあたった。この洋館は二階建てであるが、屋根裏に物置部屋がある。そこなら四つの部屋すべてを監視するのに絶好だ。

(調べてみよう……)

悠はこの古い洋館のなかに、秘密の仕掛けを発見したことにゾクゾ

クするような昂奮を覚え、疲れも忘れた。

屋根裏部屋に上がるには、廊下の奥にある梯子に近い狭く急な階段を昇らなければならぬ。最近は何となく使われていないらしく、埃だらけだった。まだ足首をギプスで固定し、手首の捻挫も完全には治っていない悠は、体のバランスをとりながら慎重に登らなければならなかった。

撥ねあげ式になって上に押し上げて開く扉を開けて屋根裏に出ると、梁や柱が剥き出しになって交差している、意外と広い空間だった。

破風に面した壁には天窓がついていて、強い西日が差しこんでいる。

片隅に不要になった家具の類が積み重ねられているだけで、がらんとした空間には黴と埃の匂いだけが充満していた。

(仕掛けはどこにあるんだろっ……?)

すぐにわかった。中央の柱の傍に箱型のテーブルのような奇妙な家具が置かれていたからだ。頑丈な木で作られていて、床にボルトで取りつけられている。

(どうなっているのか……)

箱の表面はただのなんの変哲もない板だが、調べてみると一方に蝶番が取りつけられて蓋になっていることがわかった。

(うまくできてる。特定の角度から押さないと蓋が開かない仕掛けになっっているんだ……)

仕掛けを見つけて蓋を開けると、四個の円筒が突き出していた。先端は望遠鏡の接眼部のような構造になっていて、内側にネジが切っただけである。

(やっぱり……!)

悠はそのひとつに目を当てた。円形の視野のなかに個室を真上から見た眺めが写っていた。やや乱れたベッド。薄青い下着がほおり投げられている。いままで悠が横たわっていたベッドだ。

(はあー。うまくできてる……)

悠は驚き、かつ感心した。たぶん診察用内視鏡に使われているのと同じファイバースコープのケーブルを使っているのだろう。先端には小さな広角レンズが取りつけられ、ベッドを中心とした部屋の様子を覗き見ることができる。

おそらく、この洋館に秘密の狂人たちを拘禁した精神科医が、患者の様子を監視するためにこのような装置を取りつけたのにちがいない。これだとテレビカメラのように大きくないから、患者にも気づかずに観察することができる。

（覗き見することができのなら、声やなんかを盗聴する装置もついているはずだ……）

箱の側面を探ると抽斗があり、そのなかにイヤホンが入っていた。それぞれに接眼レンズの傍にはイヤホンのプラグを差しこむ穴がある。シャンデリアには隠しマイクも取りつけられているにちがいない。

悠がスイッチを押すと電源が入ったらしく、イヤホンから微かにブーンという音がして、階下の部屋の開けなはした窓からとびこむ鳥の鳴き声が、拡大されて聞こえてきた。

長いあいだ放置されていたのに盗聴装置は壊れておらず、まだ作動するのだ。

（こんなものがあるのを、誰もいままで気がつかなかつたのだろうか……？）

この監視装置を取りつけた院長は、この装置のことを自分だけの秘密にしていたのだろう。彼はある日突然、侵入者に殺されてしまったという。その結果、この装置の存在を知るものは誰もいなくなってしまった。そう考えられなくもない。

悠の感じとしては、入院施設として使われなくなって以来、放置されてきたようだ。

（この筒の内側に切つてあるネジは、カメラを取りつけるためのものかな……）

そう思いながらもう一度、自分の部屋を覗き見ていたが、「あつ」

思わず声を出すほどびっくりした。自分の部屋に突然、誰かが入ってきたからだ。

菜穂子だった。

彼女は悠が予想していたのより早く帰宅して、まだ怪我の治りきっていない息子の様子を窺いにやってきたのだろう。

菜穂子は悠がいないので、不思議そうに室内を見まわしている。その視線がベッドの上でぴたりと停まった。同時に悠も凍ったように身

を強張らせた。

(しまった……！)

そこには悠の精液で汚されたばかりの、菜穂子のパンティが投げ捨てられていたのだ。

悠は全身から冷汗が吹き出した。しかし、なにをすることもできるはずがない。

ちよっとびっくりした様子でそのサックスブルーの布片を取りあげた女主人は、拡げてみてショックを受け、体をこわばらせた。レンズをとおして、その光景がありありと悠に伝えられた。菜穂子は自分のセクシーな下着に息子がなにをしたのか理解したのだ。

(ああ。どうしよう……！？)

自分の穿いていた下着を持ち出され、精液で汚されたのだ。母親は怒るにちがいない。

悠が驚いたことに、彼女は予期したのとちがう反応を見せた。

自分のパンティを調べ、栗の花の匂いのするねばっこし液にまみれているのを発見した女は、その部分に顔を近づけるようにした。

(ぼくの匂いを嗅いでいる……)

悠が母親の秘部の匂いをふかぶかと嗅いだのと同じ行動だ。菜穂子は息子が洩らした牡のエキスからたち昇る青臭い栗の花の香りを嗅いでいるのだ。

ほぼ斜め上から見下ろしているので、レンズは菜穂子の表情を捉えられない。しかし、彼女がその匂いを不快に思っていないことは観察者である悠にもわかった。まるでパンティ全体に顔を埋めんばかりにしている。

(菜穂子ママは、ぼくの精液の匂いに昂奮しているのだろうか……？)

悠が女性の秘部の匂いに昂奮するのと同様に、女性は男のザーメンが発散する匂いを魅力的なものだと思っただろうか。

(そういえば麻耶も、ぼくのをクンクンと嬉しそうに嗅いでたっけ) するうち、天井裏の悠から覗かれていることに気づかない菜穂子は、そのパンティを手にしたまま部屋を出ていった。

(洗いにゆくのだろうか)

しかし、菜穂子は自分の部屋に入っていったのだ。悠は彼女の部屋の隠しレンズをとおしてそれを確認し、訝しんだ。

(ぼくの汚したパンティを持って、なにをするんだろっ……?)

さらに悠が驚くことが展開された。

いきなり菜穂子が麻のドレスを脱ぎ捨てたのだ。下はベージュ色のスリッパだった。裾を捲りあげると同色のパンティを穿いていて、それをすりと脱ぎ捨てた成熟した女は、息子が汚したパンティに脚をおした……。

(あっ)

悠は自分の目を疑った。

菜穂子はベッドカバーをかけたままの自分のベッドの上に仰臥した。

彼女のほっそりとした肢体は、天井裏で覗き見る悠の視野のまんなかにある。

手足が細めで華奢な感じがする菜穂子だが、四十という完熟の年齢を前にした女の肉体はそれなりにむっちりと脂をのせており、光沢のあるスリッパをまとわりつかせた胸や腰のふくらみは女の生命力を秘めてむっちり張り出している。あきらかに彼女は着痩せする体質なのだ。そして彼女は、片手で乳房を揉みしだきながら、もう一方の手でスリッパの裾をたくしあげた……。

悠は息を呑んだ。

(ママ……。ママはオナニーをする気だ！)

美夏絵に対して、鬱勃とした性欲とは無縁のように想像していたのと同様な感じを、悠は典雅で端麗な実母、菜穂子に対しても抱いていた。しかし、彼女もまた熱い欲情で血を滾らせることもある一匹の牝なのだということを、悠はそれから思い知らされた。

なかば目を閉じた菜穂子は、スリッパの肩紐をはずしてまるい乳房をむきだしにし、掌でくるむようにして揉みしだき、指で乳首をつまむようにして刺激しだした。そうすると、三人の子供に乳を吸わせた鷲色の乳首はみるみるうちに充血して勢いよく尖り出す。

スリッパの裾を捲りあげた指は、ヒップを覆ったサックスブルーの布片 セミ・ビキニのパンティの上からもっとも女らしく悩ましい肉の丘をそつと撫でる。

シエルピンクのマニキュアを施した優雅な指が、恥丘のふくらみを愛撫する動きは、若者の血を沸騰させるに充分なほど蠢惑的なものだった。悠の男根は勢いよく膨張し、ブリーフははり裂けんばかりに突き

上げられた。

(……)

喉はカラカラに干上がり、目は血走り、心臓は破れるのではないかと思つくりらいにドキンドキんと激しく鼓動する。

彼を生んだ女性は、いま胴体をくねらせ、唇をなかば開け、おそらくは甘美な呻きと吐息を洩らしつつどんだん孤独な陶酔の世界にのめりこんでいく。

(ああ、たまらない……)

小さなレンズをとおして見る成熟した女性のマスターベーションは、少年のもえさがる欲情に油を注いだ。悠は無意識のうちにシヨーツとブリーフをひきおろし、ドクドクと脈打つ自分の牡器官を握りしめていた。

菜穂子は両足を開き気味にし、膝をたて、臀をベッドから浮かした。妖しく蠢く指はパンティの底へと移動してゆく。その部分の内側は、息子が放出した牡のエキス液でねっとり汚れている。つまり彼女の秘唇は息子の強い香りのする新鮮なスペルマにまみれている。

菜穂子は布の二重になつた部分を股間に強く擦りつける動きをくり返した。そうすると彼女自身の粘膜器官から溢れだす蜜液と、悠の吐き出したばかりの粘液がいり混じり、パンティと皮膚のあいだで摩擦されることになる。悠の耳につけたイヤホンから、ニチャニチャいう淫靡きわまりない摩擦音がはつきり伝わってきた。

やがて悠の目にも、菜穂子の股間に食い込む部分がねっとりした液体で濡れそぼり、黒々とした染みがじんわりと輪郭を拡大してゆくのが認められた。

自分自身に与えた強烈な刺激が生み出す鋭い快感が痛みにも似た反応となり、菜穂子の肢体はのけ反ってぶるぶる顫えた。筋肉がひきつり、紅潮した美貌は苦悶の表情を浮かべ脂汗がねっとり額から首筋、胸もとに噴き出る。ふだんの気品ある物腰からは想像もできない淫らな牝獣と化した実母の痴態に、悠はまったく心を奪われて、自分も熱い呻きを洩らしつつ腰をうちゆすり、灼けるように熱い男根をしごきたてていた。

やがて布地の上からの刺激ではもの足りなくなった女は、指をパンティの下へと潜らせた。そこは牡のエキスと自分の愛液が混合した状

態になっている。しばらく秘唇の粘膜をかきまわすような動きを展開していた菜穂子だが、ツと指を引き抜く鼻へ近づけた。指先は糸をひくようなねっとりした液で濡れ、きらめいていた。

おそらくは自分の粘膜になすりつけたザーメンの匂いをふかぶかと嗅いだのだから、熟れた年齢の女はいつそ頬を紅潮させ、表情に深い陶酔の色が強まった。

(あ……)

悠はびっくりした。菜穂子は息子の液と自分の液で汚れた二本の指を唇のなかに押しこみ、子供がアイスクャンデーをしゃぶるように、舌を使って舐めたのだ。

(ママ。ほくの精液を舐めるなんて……。汚くないの!?)

しかし自分で自分を愛撫する孤独な性愛儀式に耽溺している女には、もう不潔とか淫猥という観念は消滅しているようだ。

ヒップを上下に揺すりたてる淫靡きわまりない動きを繰り広げ、いまやもう一本の手もパンティの下に潜りこんでいる。それらの指が布地の下でどのように動いているのか、薄青いシルクの下でさだかに見定めることはできなかったが、悠は母親が激しい快感を得てしだいに必然的な結末　オルガスムスへとこのぼりつめ近づいてゆくのがわかった。

「ああ、悠くん!」

レンズのなかで汗まみれの半裸の母親がそう叫び、びくびくと身震いし、頭を左右に激しく振りみだし、がくがくと腰をうち揺すった。それと同時に、覗き見ていた息子も短く鋭い叫びを発して下肢を痙攣させた。内腿の筋肉がひきつるような動きを見せ、ドクドクと熱い欲望の精が迸り、埃だらけの床に飛び散った。

麻耶が外泊するので、その日の夕食は菜穂子と彼がふたりきりで食卓をはさむことになった。

「今日の午後は、お部屋にいなかったわね。どこに行ったの?」

菜穂子が聞いた。ふだんは血の気の薄い臆たけた美貌が、その夜はうつすらと紅潮したようで、悠は彼女が少女時代にかえったようなみずみずしさを発散しているのに気づいてドギマギした。息子の新鮮な

精液の匂いを嗅ぎ、ねばっこいそれを自分の秘部になすりつけて行なった淫靡な行為が刺激となって、彼女は牝の美しさをふりまかせているのか。

「うん……。ちょっとこの近くを散歩していたの」

「足はどうなの？」

「まだ体重をかけると痛いけど、杖があればだいじょうぶ、歩けるよ」

「そう。でも無理しないでね」

なぜか寡黙になりがちな息子を見やる母親の視線の奥に、悪戯っ子が悪戯を楽しむような熱いきらめきを見て、悠はまたハッと胸を突かれた。

（困ったな……）

悠は当惑していた。なぜなら彼がこっそり持ち出した菜穂子のパンティは、彼が部屋にいないあいだに持ち去られたのだ。持ち去った菜穂子は、パンティが消えたことに息子が当惑しているのを見て、その反応を楽しんでいるようなところがある。

（ま、しかたがない。ここは知らんぷりをしてとおすすめしかない……）

悠にとつて、菜穂子はまだ、なんでも甘えて打ち明けられる存在ではない。そこが美夏絵とちがうところだ。しかし、こっそりと彼女の自慰する姿を見たことによつて、悠のなかにあるなにか障壁のようなものが崩れたのは確かだ。もの静かで優雅な気品を漂わせる美しい母親は、やはり熱い欲望の火を子宮の奥にくすぶらせている生き物なのだ。

（やっぱり菜穂子ママも美夏絵ママと同じように、欲求不満に悩まされていくひとなんだ……）

悠がふと美夏絵のことを懐かしく思い出したとき、電話のベルが鳴った。菜穂子が受話器をとりあげると、偶然にもそれは東京にいる美夏絵からだつた。

「悠くん。美夏絵さん、明日、軽井沢にいらっしやるんだって……」

「えっ」

悠は思わず腰を浮かした。

「なんでも、こちらに来ているお友だちと会う用事があるって言うてらしたけど、嘘だと思っわ。あなたの怪我のことが心配で、それで会いたくて来るみたいよ」

ぱっと息子の顔が明るくなったのを認め、菜穂子の目に嫉妬めいたものがきらめいた。

「美夏絵さんはやっぱり、ずうっと悠くんの母親だった人だものね…

…」

菜穂子はぼつりと呟いた。

第四章 伯母の秘密

1

翌日、美夏絵は正午すぎに南軽井沢のS ホテルに着き、そこから電話をよこした。浩はいつしよではなく、美咲だけ連れてきているという。

「ちようどいいわ。私、午後にはまた千ヶ滝に行つて、麻耶を連れてこなければいけないの。悠くんをホテルでおろして、それから麻耶を連れて戻ってくるわね」

つまりその間だけ悠は養母だった人といっしよになれるわけで、彼は菜穂子のそれとない心くばりに感謝した。

「悠ちゃん……」

ホテルのロビーで会った美夏絵は、まだギプスを左足にはめて杖をついている悠を見て涙ぐみそうな顔になってしがついてきた。懐かしいジャン・パトウの香水とミックスした濃厚な女の体臭が彼を包んだ。

(やっぱり美夏絵ママはすごいグラマーだなあ)

弾力に富んだ乳房の圧力を胸に感じながら、悠はあらためて美夏絵の豊満な肉体の魅力を確認した。思わずショートパンツの前がふくらんでくる。

「だいじょうぶ？ 怪我のほつは？」

「うん、もうずいぶん良くなったよ。来週になったらギプスもとれるというし……」

悠の後ろで菜穂子が軽く義姉を睨んで、

「白状しなさいな、美夏絵さん。やっぱり悠くんのが心配で、そ

れで飛んできたんでしょっ？」

「ええ、まあ……。お友だちに会うのは嘘じゃないんだけど……」

美夏絵は凶星をさされて赧くなって口ごもった。菜穂子はうなずいて、

「いいのよ。十七年も実の子のように可愛がった悠くんのことですもの。心配して当然よ……」

母親の腕から解放された悠は、今度は美咲にしがみつかれた。

「お兄ちゃん……」

甘い少女の香り。悠はついこの前まで妹として見ていた小学校六年生の従妹が、すこしのあいだに女らしさを増したのに目をみはった。

ふつくらとして太り気味だったのが、肉が全体にしまりだした。いままでも成長を優先させてきた少女の肉体が、突然に方針を転換して女性らしさの追求にかかりだしたようだった。

「美人になったな、美咲」

「ばかあ」

含羞んで見せるのがなんとも可憐だ。

「さあ、美咲ちゃん。これから麻耶を迎えに行くの。叔母さんといっしょに来ない？ そうだ、白糸の滝って綺麗な滝があるの。そっちをまわってドライブしましょう」

美夏絵と悠を、できるだけ二人きりにしてやろうと配慮した菜穂子は、美咲を連れて出ていった。

「悠ちゃん。ママ、お部屋をとってあるの。そっちに行きましょう……」

まるで再会した恋人に向けるような熱っぽい眼差しを向け、美夏絵は悠の腕に腕をからませてきた。

部屋は広い芝生の庭を見下ろすゆったりしたツインルームだったが、美夏絵はすぐにカーテンを引いて室内を暗くし、クーラーをきかせた。

「けっこ暑いね。軽井沢って、もっと涼しいかと思ったけど」

「昼のあいだはね。日が落ちたら寒いくらいだよ……」

抱きあって唇を押しつけあい、舌を吸いあい、唾液を呑みあった。

彼女の両手はせわしなく動き、悠の着ているものをはぎとる。それでも傷めた手首と足首を庇うようにして優しく少年をベッドに仰臥させる年上の女だ。

「よかつたわ。命に別状がなくて……」

悠の胸板や脇腹、それにブリーフの上から股間を愛撫しながら、美夏絵は囁く。

「圭さんが崖から落ちて死んだすぐあとに、今度は悠ちゃんをはね飛ばされて死ぬところだった。なんて……。菜穂子さんのところはなにかに呪われてるみたい。お祓いしてもらったほうがいいんじゃないかしら。私の大事な悠ちゃんを失いでもしたら、ママ、生きてられないわ……」

「オーバーだなあ」

苦笑しながらも、悠の脳裏をふと不吉な思いがよぎった。土屋老人は、土地の人たちがあの山荘が呪われていると思っっていることを語ってくれたではないか。

（ぼくの運が悪ければ、いまごろ美夏絵ママも菜穂子ママも泣き暮らしていたんだ……）

美夏絵は白地に黒い水玉のサマードレスを脱いだ。下は白いナイロン素材のスリッパ。それを脱ごうとするのを悠は制止した。

「ママ……。まだ脱がないですよ」

「そうか。悠ちゃんはママのスリッパが好きだったんだ」

嬉しそうに笑ってブラジャーとパンティストッキングだけを脱いでベッドにあがってきた美夏絵だ。悠は上から覆いかぶさってくる豊満な女体にしがみつき、レースのいっぱい使われたスリッパの胸元を突きあげている熟れたメロンのようなふくらみを、布地ごと押し掴みにして揉んだ。

ふいに子供のようになりたい気持ちになった。

「ママ。おっぱい……」

「いいわ、悠ちゃん。思いきり吸って……」

美夏絵はスリッパの肩紐を外し、見事な白い球体を二つとも露わにした。

やがて、少年に痛いほど乳首を吸われた年上の女は、むちむちした餅肌にはびっちり食い込んだパンティをじっとりと愛液で濡らし甘い呻きを吐いた。

めくるめく官能の時間が過ぎた。

悠は二度、つつげざまに美夏絵の子宮めがけて熱い牡の精をしぶか

せた。

「……ああ、まるで夢みたいだわ。悠ちゃんにこうやって愛されるなんて……」

汗ばんだ肌に光沢のあるスリップをまわりつかせただけの美夏絵は、オルガスムスの後の余韻を楽しむように裸身をベッドに横たえて言うのだった。

「恩がえしだよ、ママ。ほくをここまで育ててくれた……」

悠は少し休むとすぐに元気を回復し、美夏絵の乳房を吸い、スリップの裾から手をくぐらせて濡れそぼった秘部をまさぐりながら言う。しかし、急に真顔になって、

「ね、ママ。聞きたいことがあるんだ」

いままでいっしょに夢中で性愛の美酒に酔い痴れていた息子が、思いがけなく真剣な表情になって訊いてきたので、

「えっ？ なにを？」

びっくりしたように目をみひらいて、美夏絵はずっと年下の少年の顔を覗きこむ。

「浩のことさ」

「……」

「あいつ、本当におやじとママのあいだにできた子かい？」

「そんな……」

口ごもった美夏絵の体を愛撫する手がとまった。

「やめないで。ね、悠ちゃん……」

「だめ、質問にちゃんと答えないと、恩がえしをしてあげない……」

「まあ……」

意地悪な悠の態度に、ちょっと唇を噛んで睨むようにする美夏絵だ。

「どうして浩のこと、そう思うの？」

「だってさ、別荘の書齋に百科事典があったから調べてみたんだけど、精子の機能障害っていうのはそう簡単に回復するものじゃないですよ。浩が生まれたのは……結婚してから六年目ってことですよ。それまで妊娠しなかったのに、どうして六年もたってからできたのかな」

「なにが言いたいのか……？」

美夏絵は声のなかに、微かに脅えが含まれていた。

「つまり、浩はおやじの子供じゃない、ってことさ」

「……………」
美夏絵はしばらく沈黙した。

「話してよ。ママ、真相を…………」。ぼくが突然ママの本当の息子ではない、って言われたときから、ぼくはまわりの人と自分の関係をもう一度確かめないと気がすまなくなってきたんだ。そうでないと、不安でしょうがないんだ…………」

「そう…………。じゃ、全部話してあげるわ。ママの秘密…………。でも、話したらもう一度楽しませてくれる?」
「いいとも」

若い牡にもう一度突きまくられる快感を味わいたくて、四十をいくつか過ぎた女は、自分が墓場まで持ってゆこうとしていた秘密を打ち明けた。

「じつは、浩は近所で開業していたマッサージ師の息子なのよ」
「えっ!? マッサージ師?」

悠は一瞬、耳を疑った。養父の生殖機能に障害があったと聞かされて以来、自分だけではなく、浩と美咲についても父親はちがうのではないかと憶測していたが、まさか浩の真の父親が近所のマッサージ師だったとは…………。

「そうよ。ずっと前だけど、うちから歩いて五分ぐらいのところマッサージと指圧専門の金森治療院っていうのがあったのよ。もちろん悠ちゃんも物心つく前のことだから、覚えてないだろうけど…………」

その治療院を経営していたのは金森重雄という指圧師だった。年齢は当時三十五、六。目が不自由なために黒い眼鏡をかけてはいるが、俳優にしてもいいほど苦味ばっしたところのあるハンサムな顔だちで、しかも筋肉労働者のような逞しい肉体を持っていた。頭髪はすっかり剃りあげてテラテラ光るほどの坊主頭で、それがいかにも男臭い精力的な印象をあたえていたという。

子育てや家事に追われる主婦は多かれ少なかれ、誰もが肩こりや腰痛を訴えるものだが、そういった主婦たちの間で金森の評判はたいそう良かった。

彼は主婦たちの不快な症状の原因は、その大部分が精神的なストレスにあると見きわめていたらしい。彼のもとを訪ねた女たちが、帰るときは必ずいぶんサッパリとした気分になるのは、彼のマッサージ技術

よりも巧みな会話のせいだったにちがいない。

愚痴や悩みごとに耳を傾けてくれる相手がいるだけでも主婦たちを悩ませる症状は軽減するものらしい。目は不自由だが男性的な魅力を溢れさせ、会話が巧みで女たちのとりとめもない話を辛抱強く聞いてくれるという金森の治療院は、だからいつも予約客が絶えることがなかった。

悠の子育ても一段落した頃、やはり肩こりに悩まされた美夏絵は、人に勧められて、彼の指圧師の治療を受けることにした。

金森は美夏絵をひと目見て、この豊満な肉体を持つ人妻が、性生活が満たされていないことを見抜いたにちがいない。

たしかにその頃、夫の柊二は助教授に昇進したばかりで、最先端技術であるレーザー工学の分野で次々に重要な発見、発明をなし遂げて意欲満々だった。寝食を忘れて研究に没頭したので、当然ながら性交渉も途だえがちで、それが女ざかりの年齢に達した美夏絵を欲求不満に追いこんでいたのは事実だ。

彼女は、通いはじめてから二、三回のうちに、グラマラスな肉体を巧みに揉みほぐされつつ、問われるがままに夫婦生活のことから柊二の肉体的欠陥まですべてのことを、狡猾な指圧師に打ち明けてしまっていた。それは一種の催眠術のようなものだった。

四回目に訪ねたときは季節外れの雪が激しく降った日で、悪天候のためか待合室には人影もなかった。

「今日は黒須さんで終わりにしますよ」

指圧師は美夏絵を迎え入れると診療所の玄関に「本日終了」の札を掲げた。

彼女はまるで愛人の許を訪ねる女のように胸をときめかせて治療室で服を脱いだ。はじめて訪れたときはごく普通のランジェリーだったのが、回を重ねるごとにだんだん瀟洒なものになり、この日はごく薄い、しなしなとしたナイロンのスリッパを纏っていた。

もし好色な指圧師の視力が正常だったら、きわめて煽情的なローズ・ピンク色の肌着は、パンティも乳首も透けて見える薄さだということがわかったはずだ。

治療が始まって数分のうちに、とりわけ腰骨からヒップにかけてを人念に揉みほぐされた美夏絵は、パンティの底がぐっしり濡れるほ

ど愛液を溢れさせました。

薄いスリップの上から触れる指圧師は、熟れた人妻の秘部を覆っている布片が、サイドのリボンを解けばすぐに脱がすことができるボタン型のスキャンティだということに気がついたはずだ。もちろん色はスリップと合わせた深紅で、恥叢がまったく透けて見えるほど薄い。狭い治療室に発情した牝のかぐわしい匂いが満ち、やがて下腹部が溶けるような甘い疼きに耐えかねて、美夏絵は切なく錯乱した声で訴えた。

「先生……、どっにかしてー！」

指圧師のごつい驚くほど繊やかに動く指がスリップの裾を背中まで捲りあげ、ねっとりした液で濡れそぼったスキャンティのリボンを解いた。

「いいんですね、奥さん……」

指圧師は手ばやく裸になつて、強靱な征服の意志をみせて人妻の背後から挑みかかってきた……。

それから週に一度、美夏絵は金森重雄の治療室で彼と交わつた。しかし、どのような行為が行なわれたか、詳しいことを美夏絵はハッキリ思い出せない。一種の催眠術にかけられていた。としかいいようがない。行為が終わってハッと気がつく、下着はちゃんともどどおりになされていて、けだるい感覚はあるものの、気分はひどく爽快だった。

そうやって一ヶ月ほど通つた頃、金森は突然に脱税容疑で摘発された。多額の追徴金が課されて経営が破綻したため、治療院は閉鎖され、彼は姿を消してしまった。

近所の噂では、彼の上客だった夫人の亭主が官界の実力者で、指圧師と夫人のあいだの不倫行為に気づいて激怒し、国税当局を動かして彼を社会的に抹殺させたのだという。

当然、好色で淫蕩な性格の金森は、美夏絵以外にも何人もの主婦や未亡人などを犯していただろうから、その噂にはある程度の信憑性があった。

美夏絵はそれ以来、彼の消息を聞いたことはない。

妊娠したことに美夏絵が気づいたのは、金森が姿を消してからひと月以上たつてからだ。妊娠の相手は金森以外に考えられなかった。

「どうしてそのとき、墮ろすことを考えなかったの？」
悠が質問すると、

「だって……。ママはそのとき、はじめて自分の体のなかに生命が宿った。という感激を味わったのよ。そっちの悦びのほうが罪悪感よりも強かったの」

問題は柊二に疑われないようにすることであったが、さいわいにもその頃、たまたま帰宅した夫と久しぶりに性交していたので、その点では疑われる恐れは少なかった。

「そうして生まれたのが浩なの……」

悠は養母の告白を訊いて、しばし呆然となった。

（おやじが自分の子供と信じて疑わない浩が、なんと助平なマッサージ師の子供だったとは……）

では、浩がコンピュータを自由自在に使いこなせる能力は、理工系に秀でた黒須一族の血を継いだからではないのだ。

（なんと皮肉なことだろう……）

「じゃ、美咲はどうなの？ あいつの父親は誰？」

驚きからわれに返った悠は、美しい伯母。ついひと月前までは実の母だと信じて疑わなかった女性の豊満な肉体を弄りまわしながら、さらに質問した。

「美咲はね……」

しばし口ごもったが、浩のことを話してしまった以上、美咲のことについて拒むことはできない。美夏絵はついにもう一つの秘密を打ち明けた。

「……あの子の父親はハッキリわからないの。だって輪姦されたときに妊娠したから……」

またもや悠は、頭を殴られたようなショックを覚えたことだった。

浩を生んでから三年後の夏だった。柊二家は例年のように伊豆海岸の別荘で夏を過ごした。といっても柊二は一週間ほど滞在しただ

けで、そそくさと大学の研究所へと戻っていったので、美夏絵は夏の残りを、子供たち二人と別荘で過ごすことになった。

ある日、町まで自転車で買物に出かけた美夏絵は、夕立に追われて急いで帰る途中、別荘に通じる松林のなかを抜ける県道で、車に接触され、転倒した。

膝をすりむいただけで大きな怪我はなかったが、派手に転倒した拍子に、サマードレスの裾がぱあつとめくれ、薄いパンティを着けた股間が露わになってしまった。

車高を極端に低くしたスカイラインに乗っていた若者たちは、東京方面からくり出した暴走族らしかった。熟れざかりの人妻のあられもない恰好は、粗暴な若者たちの欲情をそそらずにはおかない。おりからの驟雨で周囲に人影はなかった。

「ちよっとオバンだが、うまそうじゃねえか。いただかせてもらおうぜ」

三人の若者は逃げようとする人妻を押さえつけ、人影のない松林の奥へと引き立てた。彼かは娘たちをナンパに来たのに獲物が見つからず、苛だっていたところだった。

「大人しくしろ。騒いだりしたら殺すぞ！」

凶暴な欲情にギラギラ目を輝かせた、牡の匂いを発散させる若者のひとり彼女にナイフを突きつけると、二人の子供を家に残してきた母親はひとたまりもなく屈服し、彼らの言うなりになった。

場所は、偶然にも悠が麻耶のヌード写真を撮影し、その後で性的遊戯に耽ったあの松林のなかだったらしい。

三人の若者は美夏絵の体からなにもかも剥ぎとり、まっ裸にしてから松葉で覆われた地面に押し倒し、かわるがわるに強姦した。

「ひとりに何回も犯されたわ。誰かが犯してるあいだ、別の男が私の口のなかにペニスを突っ込んで……。そうやってサンドイッチにされて、私が気を失うまでくり返して強姦したの」

そのときの記憶は、指圧師のときとはちがって鮮明らしい。美夏絵はさまざまな姿勢をとらされて鬨りつくされた詳細を、悠に打ち明けながら夥しく女の蜜を溢れさせるのだった

「そうね、三人目を受けいれたとき、私、絶頂してしまっただわ。それからは何度も何度も達したみたい。気がついたときは彼らの姿はなく

て、私ひとり松林のなかに、ほつり出されていたの……」

服は泥まみれ、あちこちに傷を負い、髪をふりみだした恰好で、よろめくように美夏絵は家に帰った。幼かった悠も浩も、母親の身になが起こつたか、全然気がつきはしなかったが……。

東京に帰ってきて、ふたたび美夏絵は生理の異常に気がついた。夫が別荘にいるとき、一度だけ交わっていたが、そのときは絶対に安全期間だった。とすれば暴走族の若者たちに輪姦されたときに妊娠したにちがいない。

「妊娠した事情が事情だけに、生むか墮ろすか迷つたわ。でも、やっぱり生むことに決めたの……」

その理由は、また自分の肉体に宿った生命に対する愛しさだけでは説明できない。

「いま思えば、パパに対して復讐してやろうという気持ちがあったのかもね……」

浩の出産で、自分の血を受け継いだ息子を得たと思ひこんだ柊二は、その頃から夫婦生活に興味を失い、ひたすら研究にうちこむようになった。事実、伊豆の別荘で交わつたのを最後として、美夏絵は夫と性交をしていないという。

「そんな……、ひどい男だね、おやじは」

悠はふくよかな美夏絵の肉体を抱きながら怒りさえ覚えたことだ。このように性感豊かで柔らかくいい匂いのする女体を傍にしながら、黒須柊二工学博士は十年近くも指一本触れていないという。それなら妻に裏切られてもしかたがない気がする。

(だけど、なんてことだ……)

しばし悠は絶句した。

浩の父親は美夏絵にもわかつているが、美咲の父親は、どこの誰ともわからない三人の暴走族青年のうちの一人。としかわからない。そういつた事情でなお、美咲を生む決意をした美夏絵の行動には、あきらかに因習的な黒須一族に対する反逆が感じられる。

「それでも、美咲のような可愛い利口な女の子が生まれてきたんだから、血筋なんてわからないもんだなあ……」

そう言いながら、悠でさえもふと、自分を疎んじてきた父親に対する復讐の快感めいたものを覚えていた。

（おやじのやつ、浩も美咲も自分の血どころか、一族の血が一滴も入っていないことを知ったら、どんなに驚くことか……）」

もちろん、美夏絵と悠が口をつぐんでいるかぎり、彼はその秘密を知ることなく墓場へ行くことになるのだ。その意味で悠はいまから、美夏絵の共犯者になるわけだ。

「ねえ、悠ちゃん……。ママは一番大事な秘密を教えたわ。お願いだからもう一度……」

可愛がってくれとねだって、年増美女は十七歳の少年の膝の上でむちむちしたヒップをうち揺るのだった。

「それにしても悪い女だね、ママは……。あんまや暴走族に簡単に身を任せて、そのうえ、平気でせいづらの子供を生むなんて」

悠は好色な指圧師や、凶暴な暴走族の若者に好きなように弄ばれる美夏絵の姿を想像して、血が滾るような昂奮を覚えた。

「そうよ、ふだんは大学教授夫人って顔をしてるけど、私は淫らでない女なのよ。悠ちゃん、こんなママを許して……」

悠に背後から乳房や股間を揉み、こねまわされて脂汗を噴きこぼしながら陶酔してゆく美貌の人妻だ。

「許せないよ。ぼくはずっとママのことを、浮気なんか絶対にしない貞淑なひとだと思っていたんだから……」

ふいに悠は、去年の夏、伊豆の別荘の離れで菜穂子が麻耶をお仕置きした光景を思い出した。そのとたん悠はさらに昂った。

（そつだ……！）

悠は強い口調で年上の女に命令した。

「ママは罰を受けないといけないよ」

「えっ!？」

「そこに四つん這いになるんだ!」

「ど、どつするの」

「お臀をぶつてやるのさ」

「まあ……」

一瞬びっくりして目をみはった美夏絵だが、すぐに悠の意図を理解した。自分を辱しめて責め鬨ることで昂奮を高めようとするのは攻撃的な男性の本能のようなものだ。

「わかったわ。私は悪い母親よ。悠ちゃんに思っ存分、お仕置きして

もらわないと……」

目を輝かせた女は、ベッドの傍のカーペットの上に犬のように這って、繊細なレース飾りのついたスリッパを腰の上まで思いきりまくりあげ、見事に脂ののりきつた白く豊かな双臀をさらけ出した。

「さあ、悠ちゃん。いけないママを思いきりぶっってお仕置きしてちょうだい」

悠はベッドの縁に腰かけた姿勢で、スリッパを傷めていない左手に持ち、むきだしにされたパンティも着けていない美夏絵のプリプリとはちきれそうなほどの量感をたたえた臀丘を打ち叩きはじめた。

バシッ、ピシッ！

脂肉が打ちのめされる残酷な音と、

「あっ！ ひいっ！」

美夏絵の悲鳴が交錯した。

悠は柔肉をうつつしたたかな手こたえに酔った。

「おお、悠ちゃん……。もつと、もつと。ママを撲って……！ いけないママをお仕置きしてえ！」

甘い泣き声を張りあげ黒髪をふり乱し、養子だった少年の力強い打撃をねだってゆさゆさと豊臀を色っぽくうち揺する美夏絵だ。悠は全身の血が沸騰し、男根が極限まで怒張するのを覚えた。

（お臀を打たれて、ママはかえって喜んで……。なんて淫らなんだ！）

悠のどこにそんな嗜虐癖があったのだろうか。白いヒップが打ち据えられてみるみるうちに桜色から鮮やかな赤、さらにところどころが赤紫色にまで変化してゆく光景をうっとり眺めながら、何度も何度もスリッパを打ちおろし、その手応えに昂る悠だった。

「おお、おお……。！」
いきなりいときわ高く悩乱の声を張りあげたかと思うと、ぶるぶると下肢を震わせた美夏絵は、
ジュルジュル。

放水の音をたて、絨毯の上に液体をしぶかせた。

「あっ」

悠はおどろいて美夏絵を責める手を止めた。美しい年増女は、少年の手で臀をしぶかれるうちに昂奮し、ついには失禁してしまったのだ。

「うめ！」

悠も理性を失い、獣となった。ギプスをはめた足首のことも忘れてベッドから飛びおり、自分に向けて臀丘を割る谷間の奥を露呈させている牝に挑みかかった。

3

淫猥きわまる肉欲の嵐が終息した後、美夏絵と悠は疲れて抱きあつたまま眠りこんだ。

目を覚ますと夕暮れどきだった。

「いけない。菜穂子さんが戻ってくるわ！」

美夏絵はあわてて悠をゆすぶり起こした。麻耶と美咲を連れて戻る菜穂子と、ロビーのティールームで待ち合わせ、その後でレストランで晚餐をともにすることになっているのだ。

悠は身を清め、化粧を直したり着替えをするのに時間がかかる美夏絵より先に、一階のティールームに行った。

菜穂子たちはまだ姿を見せていなかった。悠はホツとした。実の母に美夏絵との肉体関係を怪しまれたくなかったからだ。

（それにしても、美夏絵ママはすごいや……。あんなにセックスが好きなのに、ずつとおやじにほつっておかれたなんて、可哀相だ……）

母親の刺激的な打ち明け話に昂奮させられて、最後は豊臀をうち叩いて失禁するまで責めたてた悠だが、激情の嵐が去ってみると、美夏絵を非難する気持ちなどまったく失せて、かえって同情の気持ちを抱いている。

（おやじなんかと別れて、もっと精力的な男といっしょになってセックスを楽しめばよかったのに……）

そうやってティールームのテーブルに座ってぼうつとしていると、ふいに近くのテーブルに座っている二人の男の姿に気がついた。

（あれ？）

ひとりには、逞しい肉体に白いスーツをりゅうつと着こなした石堂健介ではないか。

悠とは観葉植物で遮られた位置なので、向こうは彼の存在に気がついていない。

（あいつ、なにをしているんだ……）

好奇心から、悠は石堂の様子を窺った。テーブルを挟んで向かいあっているのは、石堂より若く、三十そこそこぐらいの小柄な男だ。やはりよく陽に焼けた肌にサファリスーツを着こなし、サングラスをかけている。二人はなにやら熱心に話しこんでいた。

（こんなところであいつに会うなんて……）

悠はなんとなく石堂という男に好感を抱いていなかったから、菜穂子が来る前に彼らが立ち去ってくれればいいと思いつながら、彼らの会話を聞くともなしに聞いているうち、場ちがいな言葉を石堂が口にしたので、ドキッとした。

彼はこう言ったのだ。

「マイトのほうは手に入ったか？」

（マイトって、ダイナマイトのことかな！？）

しかし、赤坂で高級レストランを経営しているという男が、どうしてダイナマイトなどというものを欲しがるのだろう。悠はつい、聞き耳を立ててしまった。

サングラスをかけた男が答えている。

「ああ。知りあいが群馬のほうで建設会社をやってるんでな、工使用のをこつそりまわしてもらった。十本もあればだいじょうぶだろう」

まちがいはなく、彼らは危険な爆発物のことを語りあっているのだ。

「ドリルは？」

「それも手配した。だけど問題は爆発音だ。相当でかい音がするぞ」

「あそこは近くにあまり別荘がないし、そのうち閉めて帰るだろう。」

雨が降った夜ならだいじょうぶだと思う。どこも閉めきっているからな。嵐になってくれれば申しぶんないんだが

「……」

「台風が二つ、三つ接近してるといっせ」

「そのうちの一つでも、こっちにまっすぐ来てくれればいいんだが……」

「……」

「いろいろやったあげくに、最後は神頼みが」

黒いサングラスの奥で若い男が嘲笑する顔つきになった。どことな

く粗野で狡猾そうな顔だちだ。

（あの男、どっかで見たような……）

悠はふと、そんな気がした。

「おまえが失敗するからだ。あのときにガキをやっていたら、女はがっくりにして俺の言うとおりになったのに……」

「おれはやるだけのこととはやったんだぜ。危ない橋を渡って……。ただ、あいつの運がよかったんだ。……兄貴のほうはうまく片づけてやったじゃないか。おまえのほうこそ、読みが外れてばかりじゃないか」

年下の男がいきまいて反論するのを、

「わかった、わかった。あまり大きな声を出すな」

あわてて制する石堂だ。二人のあいだにはなにかよからぬ企みを相談している、邪悪な雰囲気は漂っている。

（なんのことだろう、『ガキをやる』だの『始末してやった』というのは……？）

どうやらサファリスーツの男は、石堂に頼まれて危険な行為を行なったものらしい。それも二回も……。

「そろそろ電話が入る。部屋に戻ろう」

石堂が促し、二人の男は席を立ててティールームから出て行った。それと入れ替わりに華やかなムウムウ風のドレスに着替えた美夏絵がやって来た。ベッドで乱れきった髪をアップにして纏めたせいか、上流夫人の気品が漂い、午後いっぱい悠の若い肉体を貪った好色で淫蕩な女の素顔は窺えない。

「あら、菜穂子さんたちはまだ？」

「うん」

「そうなの。遅いわね」

「美咲のために遠くまでドライブしたからじゃないかな」

悠と向かいあう席に腰をおろした年上の女は、

「あ」

ちいさい声を洩らし、美貌を少ししかめた。先刻、さんざんに悠に臀を打ち叩かれた跡がひりひりするのだろうか。

頬をほんのり桜色に染めた風情がなんともいえず濃艶で、悠はあれだけスペルマを注ぎこんでやった後だというのに、またもやペニスで充血するのを感じるのだった。

しかし、悠は先ほど耳にした石堂たちの会話がどうも気になって、美夏絵にそれとなく訊いてみることにした。

菜穂子と石堂は以前からの知りあいだから、義妹としばしば会っている美夏絵が、彼女を通じてなにか知っているかもしれない。

「いまさつきまでここに石堂健介がいたんだけど……」

「そうみたいね。エレベーターで降りたとき、チラと見かけたわ。バート中津がいつしよだったでしょう?」

美夏絵はこともなげに答える。

「あのサングラスをかけてサファリスーツを着た男? ママは知っているの?」

「ええ。いつだったかな……、赤坂の菜穂子さんのお店に行ったとき、ちょうど石堂さんがやってきて、二人で彼のお店に誘われて食事したことがあったの。そのとき、あのバード中津って人に紹介されたのよ」
菜穂子が赤坂に経営しているランジェリー・ブティックは、石堂の経営しているレストラン・クラブと同じビルにある。

「へえー。で、あいつは何者なの?」

「レーサーだったそうよ。悠ちゃんのほつが知ってるんじゃない?」

「あ、そうか……」

そういえば若者向けの週刊誌やなかで、バート中津というレーサーのことを読んだことがある。ハワイ生まれの日系二世で、レーサーとしての腕前も相当なものだったが、それよりも夜の町などでのプレイボーイぶりのほつが喧伝された男だ。

(それで、どこかで見えたような顔だと思っただのか……)

バート中津は二、三年前にレース中の事故で頭を強打して視神経を傷めた。傷めたといっても日常生活には影響がない程度のものであったらしいが、千分の一秒を争うプロのレーサーには致命的なことで、結局そのために引退を強いられた。

「そうか。道理ですとサングラスをかけているんだ……。だけど、

石堂とはどういう関係なの?」

「石動さんは去年、ロスに日本料理のレストランを出したのよ。バート中津は石堂さんとは遊び仲間だったから、その縁で向こうの店を任されているみたいね。共同出資者というかたちで」

「ふうん……」

なにやら不穏な会話を交わしていた二人の男は、事業のパートナーというわけだ。しかしアメリカにいるはずの男がどうして夏の軽井沢に来て、それもダイナマイトなんかの話をしているのだろう？

「石堂って男、菜穂子ママに結婚を申し込んでいるっていうけど、本当？ いまもしつこくつきまとして、別荘に訪ねてきたりするけど……」

「そうみたいね……」

美夏絵は義妹の身の上を案じるように溜息をついた。

「石堂さんは京伍さんと親しかつたみたい。京伍さんが亡くなってから、どういうものか未亡人になった菜穂子さんに迫ってるの」

「菜穂子ママはどんなつもりなんだろう？」

菜穂子がかもし石堂と再婚すれば、悠にとって彼は義理の父親になってしまう。あまり嬉しいことではない。

「菜穂子さんは何度もハッキリ断っているんだけど……」

「菜穂子ママはあいつが好きじゃないんだね？」

「そういうわけじゃないけど……。だってあのとおりの男性的魅力がある人だもの……。それに京伍さんの亡くなったあとはいろいろ世話にもなっているし、一時は真剣に再婚を考えたこともあったのはたしかよ。でも、念のために興信所を使って彼のことを調べてもらったら、前歴があまり芳しくないの。それで気が変わったようよ……」

「前歴って？」

「石堂さんって、通産省の役人だった人の息子だけど、子供のときから手のつけられない不良少年で、六本木や湘南あたりでは有名だったらしいわ。その後、映画の悪役で名を売ったけど、若い頃はヤクザや不良外人なんかとつきあって、ずいぶん無茶なことをやったみたいよ。

いまは紳士みたいな顔をしてるけど、時どき、お店には暴力団の幹部も顔を出すというし……」

悠はびっくりした。

「へえー……。男ぶりはいいし、金はあるそうだけど、人はみかけによらないもんだなあ」

「まあ、アメリカで出したお店もうまくいってないという話だし、つきまとうのは菜穂子さんの財産めあてじゃないかって気がしないでもないの。いまだって腹のなかではなにを考えているんだか……」

そのとき、ようやく菜穂子が麻耶と美咲を連れてやってきた。三人は北軽井沢まで行き、鬼押し出しを見物してきたのだという。美夏絵との会話はそこで中断した。悠は麻耶の笑顔と魅力的なショートパンツ姿を見たたん、石堂とバート中津のことなど忘れてしまった……。

一回つちそろってホテルでの夕食を楽しんだ後、菜穂子は美夏絵に、「ぜひ、今夜はうちに泊まっていらして」

熱心に誘った。美夏絵は、このホテルに一泊し、明日は南原に別荘をもつ女子大時代の友人を訪問する心づもりでいた。

「でも、このホテルの部屋もとっていることだし……」

「いいじゃない。荷物はここに置いておけば。明日、私がここに寄って南原までお送りするわ」

久しぶりに会ったのだからゆっくり話したい　と菜穂子は言い、とうとう美夏絵も折れて、美咲といっしょに山荘に泊まることを了承した。

「うわ、嬉しい！　じゃ、わたし、麻耶お姉さんといっしょに寝る！

ね、いいでしょう？」　美咲が麻耶にしがみついて歓声をあげた。

「いいわよ」

麻耶は可愛い従妹をいっしょのベッドに寝かせることに同意したが、チラと悠のほうを見て苦笑まじりに肩をすくめてみせた。その目は、

（あーあ、今夜は美咲ちゃんのおかげで、二人で楽しむのはおあずけね！）

そう語っていた。

美夏絵は悠のベッドに寝ることになり、悠はひと晩だけ、圭が使っていた部屋で眠ることになった。

山荘では母親同士は書齋で女だけの会話に耽り、悠と麻耶、美咲は居間でファミコンゲームを楽しんだ。全員がそれぞれの寝室にひきこもったのは真夜中近くだ。

(やれやれ、疲れた……。つい夢中になって美夏絵ママと三回もセックスしてしまったからなあ……)

実の兄が寝ていたベッドに潜りこみながら悠はのびのびと体を伸ばした。部屋のなかの圭の持ち物はそのままだが、ベッドだけは新しい寝具にとり替えられている。

隣りの部屋は麻耶の部屋で、壁越しに麻耶と美咲がふざけあっているらしく、笑いはしゃぐ声が微かに聞こえてくる。

(麻耶が美咲の相手をしてくれて、こっちは大助かりだし……) しばらくうとうとしたらしい。悠はふと目を覚ました。

(なんだろっ……?)

耳をすますと、隣室から甘く切ないような呻き声が洩れてきた。

(麻耶のやつ……)

悠はピンときた。去年、伊豆の別荘でも麻耶は、美咲を相手にして性的な遊戯に耽った。早熟な少女は今夜もまた、年下の従妹に淫らな遊びをしかけているにちがいない。

(どんなことをやっているのか……?)

まだ十五歳のくせにおそろしく淫蕩なところのある麻耶だ。悠は隣室でくり広げられている光景を想像してたちまち血が騒ぐのを覚えた。

(そうだ……。天井裏から覗いてやれ)

悠はそこに思いあたった。

そうつと部屋を抜けだし、廊下の突き当たりの梯子を登り、屋根裏部屋にあたった。

まっ暗闇のなかを手さぐりでそろそろと歩き、昨日発見した、例の覗き見装置の蓋を開けた。

菜穂子も美夏絵も照明を暗くしてぐっすり眠りこんでいる。しかし麻耶の部屋だけはまだあかあかと照明を点けているので、シャンデリア風の照明に隠されたレンズは、はっきりとベッドの上の少女たちを写しだしている。

「あ……！」

予想はしていたが、やはりベッドの上でくり広げられているあらゆる痴態を目のあたりにして、悠は驚きの声を洩らした。カッと全

身の血が滾り、ブリーフの下で男根が膨張した。視野の中央に美咲が仰臥しており、覆いかぶさるような恰好の麻耶が、年下の少女の乳房を吸っていた。

美咲は白いコットンのネグリジエを着ていたが、その前面のボタンは従妹の手によって全部外されており、前はすっかりはだけられてふくよかな肉体を覆うのはスヌーピーの描かれたビキニのパンティだけだ。

麻耶のほうは寝衣はすでに脱ぎ捨て、こちらのほうはピンク色の花模様をプリントしたビキニが、くりんとしたヒップを包んでいる。

小学校六年生の美咲は、以前はつぼみのような固さを秘めて尖っていた乳房が、マシユマロの柔らかさを持つ小高い丘へと変わっていた。汚れないピンク色の乳房を、三つ上の麻耶が唇のふくみ、舌で転がしたり吸ったり、しきりに刺激をあたえている。

麻耶の右手は美咲のやや広げた股間にあてがわれ、指がパンティの底の部分を探んだりさすったりする熱心な動きを見せている。

「……………」
乳房を吸われ、パンティごしに稚い秘部を指で愛撫されている美咲は、うっとりした表情で唇をなけば開いている。声は聞こえないが、おそらく甘く切ない呻きを放ちつつつけているにちがいない。

麻耶が時どき顔を上げ、従妹の表情をつかがうようにしながら、なにことか話しかけている。おそらく自分のあたえる刺激でどれだけ快感を得ているか、それを言葉で確かめているのだろう。

（そうか。声を……………）

あわててイヤホンを装着し、盗聴スイッチをいれると、悩乱した少女の切ない喘ぎが耳に飛びこんできた。

「あ、ああ……………っ。麻耶姉さあん……………っ！」

従妹の淫らな指で敏感な部分を弄られて、美咲がこらえきれずに洩らす快感の呻きだ。

「どっ、美咲ちゃん……………？ 気持ちいい？」

乳首を唇で、秘部を指で愛撫してやる麻耶が問う声も、ベッドの軋みもハッキリ聞こえる。「ああ、ん……………。はあっ……………」

美咲はヒップを浮かすようにして、従妹のあたえてくれるリズムに合わせるようにヒップを動かしている。その動きがしだいに激しく大

きくなり、

「あ、っ。……ヤン！」

鋭い叫びになり、びくんとふくよかな躰が顫えた。

「イツたのね、美咲……」

麻耶は満足したような笑みを浮かべ、汗を浮かせた頬や額を撫でてやりながら、貝殻のような耳に口を寄せて囁く。

「うん……」

恥ずかしそうに頬を紅潮させながら、ニツと無邪気な笑みを返す美咲。

「気持ちよかった？」

「うん」

「自分ひとりで楽しむのと、どっちが気持ちいい？」

「いやぁん……。麻耶姉さんにしてもらっほうがずっと気持ちいい」

美咲は鼻声で甘えて、自分を快楽境に導いてくれた美しい従妹に抱きつく。

「じゃ、今度は美咲ちゃんがお姉さんを喜ばせる番よ……」

「うん」

美咲が身を起こした。麻耶が彼女のネグリジェもパンティも脱がせ、丸はだかにした。

美咲の秘部が悠の目にも見えた。秘叢はまだ萌えていない。清らかな丘の眺めだ。

「わたしも脱ぐわね」

仰臥した麻耶も、ピンク色のビキニを脱ぎさる。白い腹部の丘をふうわりと覆っている栗色がかった三角形の叢が窃視する悠の網膜に鮮烈に飛びこんできた。

「きれいだ……」

悠が思わず賛嘆したほど、一糸纏わぬ麻耶のヌードはエロティックな美しさに輝いていた。まさに牧神を惑わすニンフの可憐なエロティシズムだ。

今度は美咲が従妹にかぶさるかたちで抱きあい、まっばだかの少女たちはひとしきり濃厚な接吻を行なった。

やがて、麻耶が年下の少女の手をとって自分の下腹へと導いた。

「さあ……」

かすれたような声で促す。

「うん……」

おそろおそろといった感じで美咲の指が、従妹の柔らかそうな恥草の奥へ触れていった。

「わ。濡れてる……！ こんなこい」

性体験の未熟な少女は、従妹の秘部が暖かくぬるぬるした液体を泉のごとく溢れさせているのを知って、びっくりしたような声をあげた。

「そうよ。美咲ちゃんにはやくここを可愛がってもらいたいから……」

麻耶は美咲が触りやすいように、すんなりした脚を大きく割り拡げ、膝をやや立てるようにしてヒップを浮かした。

「ああ……」

おずおずと年下の少女は、自分がしてもらったのと同じ行為を始めた。窃視レンズは広角なので、愛撫の微細なところまでは捉えることができないが、隠しマイクのほうは濡れた粘膜が摩擦されるビチャビチャという淫靡な音と、

「はあっ、ん……」

麻耶が洩らす切なくも甘い呻きを明瞭に捉えている。

刺激的な光景に悠のパジャマとブリーフの下で、男の欲望器官はいきり立ちスキンスキンと脈打っている。

「ね」

麻耶が甘えるような声で言った。

「え！？ だって……」

美咲が当惑した声を出した。そんなことをしたら処女膜に傷がつくではないか。

「ふふ。いいのよ……。麻耶、もうここまでいったんだから」

「えーッ」

美咲が大きな声を出した。

「麻耶姉さん、バージンをあげちゃったのぉ？ 誰に？」

「馬鹿ね。そんな大きい声、出さないで。……そうよ、この前、大好きな子にあげちゃったの」

さすがに相手が悠だとは明かさない。

「うわあー！」

羨ましげな贅嘆の声を洩らす美咲だ。

「だから、指を入れてもだいじょうぶなの」
「そう？　じゃ……………」

少女にも女性自身の構造に対する好奇心があるらしく、目を輝かせた美咲は従妹の下腹に顔を寄せるようにして、一方の手指でラビアをつまみ、濡れた粘膜部分を展開させてみた。

「入れるわ」
「うん……………」

美咲の人差し指がコーラル・ピンクの粘膜の奥を探りつつ、そうつと先端部が膣へと沈みこんだ。

「あ」

微かに眉をひそめ、ぴくんと腰をひくようにした美少女だ。

「痛いの？」

「ほんの少しね……………」

「あ、ほんとだ……………。きついけど入っちゃうよ」

美咲の人差し指が根元まで粘膜の奥に投入してゆく。

「中指も入れてみて」

「いいの？」

心配そうな声を出しながらも、言われたとおりにして二本の指をすっぽり若い性愛器官に埋めてしまった美咲だ。

「ああ…………ツ」

麻耶が白い喉を反らせるようにして吐息をついた。

「感じるの？」

「だと思っ……………。なんだかズーンという感じがして」

「なか、すごく濡れてるよ。ほら、こんなに溢れてくるもの」

ひとしきりビチャビチャと淫靡な音がして、

「あ、くくっ」

麻耶の裸身がひくひく顫えた。

「ごめん、痛かった？」

「ううん、だいじょうぶ……………。でも、なんだかヘンになりそう……………」

「やめる？」

「やめないで。こっちでクリちゃんを触って、そうつと掻きまわすようにしてくれる？」

「こっつ？」

「そつよ、そつ。あ、はあっ……！」

三歳下の可憐な従妹に自分の性を弄らせ、指を挿入させた早熟で淫蕩な美少女は、熱っぽい吐息を洩らしつつ、張り出したヒップをゆすった。白い桃のような乳房がふるふると揺れた。

「あつ、あつ。そつよ、そつ……！」

クリトリスと膣の内部を同時に刺激される快感に痺れた麻耶は、やがて、

「ひい、ーっ」

鳥の啼くような声を洩らしたかと思うと美咲の裸身にしがみつき、

「いやだ。イツちゃっ……！」

くく、くくっと喉を顫わせ、ねっとり脂汗を浮かせたミルク色した太股の筋肉が痙攣した。しばらくして、

「すごいんだ。やっぱりこしちゃうと感じるようになるんだね」

羨望の気持ちをごめて美咲が囁いた。彼女の声も昂奮にかすれている。汗に濡れた肌と肌を擦りあわせるようにして抱きあっている少女たち。

「ね、バージンあげたとき、痛かった？」

「痛かったよ。やっぱり身を切られるみたいな……。でもあげたのが好きな人だったから痛くても我慢できたし、ペニスがちゃんとなかまが入ってきたときはすっごく感動して、痛いのも忘れちゃったわ」

「へえー」

美咲は、まさかその相手が自分の兄だった人 悠とは夢にも思っていない。

「だけど、好きでもない人だったら、がまんできなくて泣いたと思う。

……美咲ちゃんも、バージンあげるときは、本当に好きな人にあげたほうがいいよ」

「うん……」

ふいに麻耶が美咲の目を覗きこむようにして、

「美咲ちゃんだったら、どんな子にバージンあげたい？ そんな人、いる？」

「……」

答えずに赧くなってそつと目を伏せた少女だ。

「ふふ。好きな人がいるってこと、わかってるのよ。……こら、隠す

な」

「あつ、やん」

ふざけて麻耶があちこちをくすぐって責めたると、とうとう屈伏した小学校六年の少女は打ち明けた。

「悠兄ちゃんが好き……。バージンあげてもいいくらい……」

少女たちの情熱的で破廉恥な相互愛撫に見入っていた悠は、突然に美咲の唇から自分の名が飛び出したので、

「えっ!？」

思わず驚きの声を発してしまった。

(ぼくにバージンを、だって!?)

しかし麻耶のほうは驚いた様子も見せず、

「ふふ。やつぱり、ね」

ニンマリと笑ったものだ。

「えーッ。麻耶姉さん、知ってたの?」

「美咲ちゃんが幽兄さんのことを好きだってこと? あったり前よ。

久しぶりに会ってあんなに嬉しそうにして、時どきひとりで顔を赧くしてるんだもの……」

「うわあ。やだ……!」

ずばりと言い当てられて両手で顔を覆って羞ずかしがる美咲だ。

彼女はいつも優しい兄である悠に、幼いときからよく懐いていた。

もちろん妹として兄を慕う感情は、恋心とはちがう。

ところが、悠が実の兄ではないということがわかったとき、悠が受けたのと同様な心理的衝撃が感受性の鋭い少女を強く揺さぶった。そして、悠が実の母である菜穂子のもとへ戻っていったとき、美咲は心にぼっかりと空洞があいたような寂しさを覚えた。そんなふうに離れて悠を想う心が、いつしか恋情めいたものに変化していったのは、ある意味では当然の成り行きかもしれない。

利発で早熟な麻耶は、久しぶりに悠に会って心をときめかせる美咲の内心を、鋭く見抜いていたのだ。

(へえー、美咲がぼくのことを……)

悠としては、やはり長いこと妹として見ていたこともあるし、なんといつてもまだまだ小学生なのだ。いままでは客観的に恋愛の対象として眺めることなど、思いもよらなかった。

しかし、彼女の肉体はますます女らしく発育してゆき、やがて魅力的な秘毛が悩ましく恥丘を飾る日も遠くないにちがいない。いまの麻耶の年頃になったら、従妹に負けなくらい魅力的な美少女になるだろう。

（そつなったら、ぼくだって美咲のことを、異性として好きになって不思議はない……）

自分たちの部屋をま上から悠が覗き見ていることなど夢にも思っていない少女たちは、打ち明け話に熱中している。

「わたし、麻耶姉さんが羨ましくてしかたなかったわ……。だって毎日、お兄ちゃん　悠兄さんといっしょに暮らせるんだもの……」

「ばか。やきもち妬いてるの?」

「だってえ……。悠兄さんは前から麻耶姉さんが好きだったんでしょ?　去年の夏なんかいつもいっしょだったじゃない」

美咲は美咲なりに、ちゃんと悠と麻耶のことを観察していたのだ。すると麻耶は溜息をついてみせた。

「あのね、美咲ちゃん。本当に悠兄さんが好きだったら、かえって今度のことはよかったのよ。……逆にわたしなんか、悲劇よ」

「どうして?」

「だって考えればわかるでしょう。わたしだって悠兄さんが好きだけど、いま、わたしたちは実の兄と妹なのよ。兄と妹なんて結婚もできないし、恋愛だっていけないと思われてるし、なーんにもいいことないわ。その点、美咲ちゃんなんか、今度はいとこ同士の関係になったんだから、悠兄さんと恋愛したっていいし、その気になれば結婚だって許されるのよ」

「ふーん、それもそうだね……」

ちよつと嬉しそうな顔になった美咲だが、すぐに暗い顔になって、「だけど、悠兄さんは女の人にもてるタイプだからだめだわ。美咲のことなんか気にもとめてくれないよ、きつと……」

麻耶は美咲を愛撫してやりながら、年下の少女にアドバイスしだした。

「悠兄さんはね、受験のこともあるし、自分から好きな女の子にアタックしてゆくタイプじゃないし、いまの学校は男子だけだから、大学に入るまではガールフレンドや恋人をつくるチャンスはないと思うんだ。」

だから、それまでに悠兄さんの心を美咲ちゃんがかまえちゃえばいいの」

「どうやって……?」

美咲は真剣な顔になって早熟な従妹に質問する。

「うーん、そうだね……。やっぱり機会ある」とに悠兄さんの傍にびったりくっついて、好きだっということを態度で示すんだね。一番いいのはね……」

麻耶は声を低めて、

「ヌードとか見せて誘惑しちゃうの」

「えーっ!?!」

美咲は大胆な提案にショックを受けて目をまるくする。

「ばかね。男の子って女の子のどきどきに一番惹かれるかって言うと、やっぱり女の子の体よ。抱きしめたりキスしたり、おっぱいやお臀を撫でたり揉んだり、いろんなところの匂いを嗅いだりするのが好きなの……。……。だけど、手はじめはヌード。女の子の裸を見たりするのが嫌いな男の子なんていないわ。美咲ちゃんだって、そろそろわたしがびっくりするくらい女らしい体になってきたんだから、裸を見せてあげれば悠兄さんは美咲ちゃんに夢中になっちゃうわ」

「ほんとう?」

「ほんとうだってば」

「でも、羞ずかしいよ……」

麻耶が美咲をけしかけるのを聞いて、悠は呆れてしまった。

(あいつ、美咲をぼくにけしかけて、いったい、どういっつもりなんだ……?)

美咲にとって麻耶は教師みたいなものだ。そのかされば、その気になってしまえば。現実に、麻耶の腕のなかで十二歳の少女は考えこむ目つきになっている。

悠は、そうつと屋根裏部屋を降りて自分のベッドに戻った。少女たちの同性愛戯は刺激的だったが、会話に自分のことが出てきたせいで、一時は激しく沸騰した欲情も失せてしまった。(冗談じゃないぞ。美夏絵ママとも麻耶ともセックスして、今度は美咲から迫られるなんて……)

そんなことを考えているうち、ふいに思いあたった。

（麻耶のやつ、ひょっとしたら美咲とぼくをくつつけて、結婚させてしまうつもりなのかもしれない……）

そうすれば、美咲に対して影響力を及ぼす立場にある麻耶は、間接的に悠をも支配できる。少なくともごく自然に悠との関係を保てる位置にいられるわけだ。もし悠が、麻耶とまったく関係のない女性と恋をし、結婚をしたりしたら、彼女は永久に兄を失うことになる……。

（麻耶はまったくなを考えてんだかわからないところがあるからなあ……。それぐらい先のことを計算して美咲をそそのかしているのかも……）

やがて悠は眠りこんだ。昼の美夏絵との性交で消耗していたせいか、いつになくぐっすりと熟睡した。

5

夢うつつに鳥の声を聞いた。

（朝か……）

寝がえりを打ったとたん、悠は柔らかくて暖かいものに触れた。

（あ!?!）

自分がぐっすり眠っているあいだに、誰かがベッドに潜りこんできていたのだ。

（麻耶が……）

とつさにそう思った。やっぱり悠とセックスをしたくなってるそのり潜りこんできたのだろうと思ったのだ。しかし、それにしておとなしい。麻耶なら悠が寝ていても体を弄りまわしにくるはずだ。

悠はゆっくり体の向きを変えて、自分の右隣りに横たわっている人物を見た。

美咲だった。

くりくりした大きな瞳がちょっと眩しそうに悠を見つめている。

「なんだ、美咲か……。びっくりしたよ」

「ごめん。起こしちゃった?」

おそるおそる訊いてくる。

「いや。いつもこの時間になると一度目が覚めるんだ。鳥の音がやましくて」

驚いて詰問したりすると、美咲の心を傷つけてしまうかもしれない。悠はしいてふつつの口調で語った。

「本当ね……。軽井沢にこんな鳥がいるなんて、思わなかったわ」「いまが鳥たちの朝ごはんの時間なのね」

少女も横になったまま耳をすます。まだ仄かに明るくなってきただけだが、森林地帯の鳥たちは早起きだ。てんでに餌を求めて林のなかを飛びまわるので、夜が白むころは都会では信じられないほど騒がしい。都会から来た人間は、この時間に目を覚まされてしまう。

そんな会話で、美咲は悠が睡眠を妨げられて怒っていないことを知り、ホッとしたようだ。それでも弁解する口調で、

「せっかくお兄ちゃんに会えても、今日はママのお友だちの家に泊まることになってるし、もうお別れでしょう。あまり話もできなかったから、寂しくなってる……」

「夏休みが終わればどっちにしたって東京に戻るんだから、いくらでも会えるさ……」

悠は右腕をこの前まで妹だと信じていた少女の頭の下に滑りこませ、腕枕をしてみた。顔と顔が近づき仄かな石鹸の香料が匂った。麻耶との相互愛撫を堪能したあと、シャワーを浴びたのだろう。

（麻耶に唆されて、美咲は態度で示す気になったんだな……）

熟睡したあとだけに、悠の若い牡の器官は朝の勃起現象を呈して勢いよくそそり立っている。かぐわしい少女の匂いとネグリジェの下のかくよかな肌の感触が性欲の一番強い時期の少年を刺激して、獣の本能は美咲を抱きしめ裸にして、自分の器官を柔肉の奥へ突き立てると命令している。しかし理性は、

（いくらなんでも、美咲を犯すなんて……）

滾る欲望が溢れ出そうとするのにブレーキをかけている。悠は可憐な少女の横で心はまっぶたつに引き裂かれていた。しかし、自制心が獣欲をかるうじて凌いだ。

しばらく少女の黒髪を撫でてやっってから、

「さあ、誰かに気づかれるとヘンに思われるから、もう麻耶のところにもどったほうがいいよ……」

「うん」

悠の妹だった少女は案外素直にうなずいた。悠はそうつと彼女の頬を両手ではさみ、その唇に軽く接吻してやった。

「あ……」

慕っている悠にキスされて、十二歳の少女はまっ赤になったが、嬉しそうに笑ってしがみついていた。

「悠兄さん、好き……」

軽いキスが、舌と舌の先をすりあわせるような、やや危険なキスになったが、美咲はそれ以上のことを望まず、

「じゃ、今度東京で会ったら、もつと可愛がってね」

そう言っただけで部屋を滑り出ていった。悠はふうつと息を吐いた。

（まいったな。麻耶にそそのかされてさっそく、ぼくのベッドに入ってくるなんて。あれでもつと誘惑されたら、犯していたかも……）

考えてみれば、美咲と自分は、まったく血がながっていない間柄ではある。しかし十数年、兄と妹だと信じていた二人なのだ。突然男と女の関係を結んだら、美咲のほうに情緒的に不安定になるのではないだろうか。

（やつぱり、もつと美咲が大きくなってからのことだ……）

悠はまた眠ることにして目を閉じた。寝床のなかにはまだ美咲の肌の匂いが残っている。

（そういえば、美咲はパンティを穿いてなかったな……）

彼女の腰を抱いたとき、ネグリジェの下は素肌だった。

その朝、美夏絵たちは菜穂子の運転する車で、ホテルに行き、さらに南原の知人の別荘へと赴いた。午後をそこで過ごし夕刻には電車で東京へ帰るといふ。

二人を見送った後、悠は土屋老人の運転する軽トラックに乗せてもらって町の病院へ行った。ギプスをとってもらったためだ。

「手首のほうはもつだいじょうぶだね。足首のほうは、まだ無理をし

ないように。走ったり飛んだりしちゃダメだよ」

そう言いながら外科医はギプスを外してくれた。テーピングを施されてはいるが、久しぶりに自由に脚を動かすことができるようになって、悠は解放感を味わった。なによりも杖を頼りにしなくても動きまわれるのが嬉しい。

帰る途中、車のラジオが台風情報を伝えた。南海上に発生した二つの台風のうち、一つは日本を離れたが、もう一つは沖繩の近くで、あたかも日本に上陸するスキをうかがっているかのような不気味さで停滞している という。

「この空模様では、台風がこつちまで来るかもしれないねえ」

土屋老人は空を見あげて呟いた。

「えっ、どうして?」

空はよく晴れて、サツと刷毛で掃いたような薄雲が高いところにかかっているだけだ。周囲の山並もくつきりと遠くまで見え、はやスキの穂波が白く靡く高原は、秋の気配を濃く感じさせながらも、あくまでの穏やかだ。

「長いあいだのカンみたいなもんさ」

「ふうん……」

土地の人間は長年の経験に裏打ちされた観天望気の技術にすぐれている。土屋老人の言うことは当たるかもしれない。

山荘の前には赤いアウトディが駐まっていた。美夏絵母娘を送っていった菜穂子は、すでに戻ってきているのだ。

まず母親にギプスがとれたことを報告しようと思ったが、菜穂子の姿が見えない。留守番をしてたはずの麻耶の姿もない。

(二人とも、どこにいるんだろう……?)

悠は二階へとあがっていった。階段の途中で菜穂子の声が聞こえた。そのきつい口調は麻耶を叱りつけているのだ。

「麻耶。言ったでしょう、美咲ちゃんを相手にいけないことをしちゃダメだって!」

「しないわよ、ママ……」

ちよっと脅えたような娘の声。

「嘘おっしやい。これ、なんなのよー」
「……………」

悠は階段の途中で足をとめ、そうつと声の聞こえるほうを眺めた。どうも自分が出てゆく雰囲気ではなさそうだ。

二人は麻耶の部屋にいた。ドアがあけはなされていて、菜穂子と麻耶の姿が見えた。腰に手をあて、立ちはだかるようにして母親の威厳を見せている。まん前でベッドに腰をおろし、首をすくめるようにしている麻耶。

悠は菜穂子が白い布片を二枚手にしているのを見た。漫画がデザインされたのと、ピンクの花模様がプリントされたパンティだ。

（昨夜二人が穿いていたパンティだ。二人とも脱ぎっぱなしにして出かけたのか……………」

ベッドを片づけにきた菜穂子がそれを見つけ、麻耶が年下の従妹に性的な悪戯をしかけたと見抜いて叱っているのだ。どうして美咲のパンティまであるのか。麻耶にしても弁解のしようがない。

「ごめんなさい。美咲ちゃんが可愛いから、つい抱いてふざけてたら……………」

とうとう昨夜の相互愛撫を告白させられてしまった。

「まあ、なんていけない子なの！ やっぱりお仕置きしなきゃダメね」

気品のある女主人は、待っていたように中学三年生の娘に向かって命令した。

「ママの部屋にきなさいー」

麻耶を自分の部屋に追い立てると、菜穂子はピシヤリとドアを閉ざした。

（どんなふうにお仕置きされるのか……………」

悠は去年の夏のことを思い出し、体が熱くなった。そうつと天井裏に登り、いそいそと覗き見装置にしがみつく。イヤホンをかけると、娘に向かって厳しく命令する母親の声をハッキリ聞くことができた。

「さあ、ここにかがんで」

「はい」

従順にベッドカバーをかけた母親のベッドの側に立ち、上体を前に倒してベッドの上に頭と腕をつける。そうすると髻が斜め上に持ちあげられた恰好になる。

「脚をもつと開いて」

「はい」

あくまでも素直に従う娘だ。悠の耳には、去年、臀を叩かれている姿を悠に見られた麻耶が、

「あれはママの欲求不満解消なのよ」と囁いた声が甦った。

母親の手が娘の着ている白い麻のノースリーブのワンピースの裾に手をかけ、パアッと腰の上までまくりあげた。

「あ」

上方から眺めている悠は、臀をさらけ出された妹の恰好に強烈なエロチシズムを感じさせられた。

青い林檎のような新鮮さと硬質のまるみをもった臀球が、可愛いフリルのついた、ごく淡いピンク色のパンティにぴっちり包まれてふるふる顫えているようだ。

菜穂子は無造作にそのパンティをひきおろし、日に焼けた太腿あたりとは対照的に青白く見えるほどのヒップをむき出しにした。

「そのままにいるのよ」

凜とした口調で命じ、気品のある母親は寝室に造りつけのクロゼットを開けた。なかから取り出したのは五、六十センチほどの長さの黒革の乗馬鞭だった。

（わ。あんなもので……!?!）

悠はびっくりした。平手で叩くのなら痛みもしたものだだろうが。

鞭は相当な苦痛をもたらすだろう。柔肌も傷つくのではないか。

「ママ、鞭で打つのお!?!」

薄桃色の下着を腿のなかばまで引きおろされたあられもない姿勢のまま、横目で母親の動きを追っていた麻耶もやはり、目をみはって哀れっぱい声をあげた。

「鞭はいやだわ。許して……」

鞭を受けるのははじめてではないようだ。表情に奮えの色が走る。

「なにを言ってるの。ママのいつつけに二度も背いて。これくらいきつい罰でなきゃ、あなたはわからないの」

ピシッとはねつけ、ツカツカと娘の背後に歩みよると、

「さあ、いくわよ」

黒光りする乗馬鞭がふりおろされた。

シュツ。

勢いよく空を切った鞭の先端が、
パシ！

小気味よいほど残忍な音を弾かせて、みずみずしく張りのあるヒップの曲面に叩きつけられた。

「あつ！」

悲鳴をあげて、ピクンと体を顫わせる美少女。よく見ると鞭の先端は笹状になっているから肌を切り裂くわけではないが、やはり掌とは比べものにならない苦痛らしく、一度、二度と臀丘をしばかれるうちに大粒の涙が目から溢れるとぼろぼろと頬を伝い落ちる。

「許してえ、ママ……」

泣きじゃくりながら訴える声も悲痛だ。

「なによ、これくらい。伯母さまがこんなことを知ったら、ママが怒られるのよ。本当に悪い子！」

ふだんは典雅な美貌をキツと柳眉を逆立てるようにして、母親は娘のまるだしの臀に何度も鞭をうちおろした。みるみるうちに赤い筋状の打痕が何本も白い皮膚を走る。

「痛いよう、ママ。許して！」

哀願する娘の臀を十回も打擲してから、ようやく未亡人はお仕置きの手をとめた。それでもしばらくのあいだ、苦痛の余韻が若鹿のような肢体をぶるぶる戦かせていた。

しくしく嗚咽する娘を見下ろす美貌の未亡人の表情からは、いき進った激情の色が失せ、うってかわって優しい声で、

「麻耶。充分反省した？」

「はい……」

「じゃ、許してあげる。行きなさい」

麻耶はパンティを腿のあたりに纏いつかせたままグスグス鼻を鳴らしながら出ていった。悠は菜穂子の部屋を覗くレンズから目を離し、麻耶の部屋を覗いた。よろめくようにして入ってきた美少女は、スカートをまくりあげ臀をまるだしにした恰好で、ベッドの上につつ伏せに横たわった。

（お臀が熱いんだ……）

そっやってしばらく火照りを冷やすのだろう。麻耶は時どきヒップ

を撫でさするようにして顔をしかめている。

(相当、痛かったにちがいない……)

悠は厳しく折檻された麻耶に同情した。同時に、鞭でこらしめられて泣き悶える若い肉体に激しく欲情させられていた。菜穂子が自分の部屋にいなければ、彼女のところに行って迫るところだ。

(ママはまだ部屋にいるのか……)

そう思っただけたび、菜穂子の部屋のレンズを覗いてみた悠は、びっくりした。

「あつ」

厳格なお仕置きをすませたのに、菜穂子はまだ鞭を手にかけていた。しかも、信じられないほどあられもない恰好で……。

しばらく目を離していたあいだに、それまで着ていた花柄のプリントされたサマードレスは脱ぎ捨てられ、美しい母親は薄水色のシルクのスリップ一枚だ。しかも息子に窺視されながら、さっきまで娘の麻耶がとっていたのと同じ、ベッドに手をつけて前かがみになるポーズをとり、みずからの手でセクシな下着の裾をめくりあげたのだ。

やはり薄水色のシルクでつくられた繊細で瀟洒なシルクのパンティに包まれたヒップがさらけ出された。

(いつたいなにを……)

イヤホンからはハッハッという荒い息づかいが聞こえてくる。未亡人はあきらかに欲情し女の肉を熱く燃やしている。

ようやく悠はきがついた。菜穂子の臀が向けられた壁には姿見用の縦長の鏡が掛けられているのだが、彼女はその鏡のなかに映しだされた自分の浅ましい姿を眺めるために首を後ろに振っている。頬が紅潮し、目は高熱を発した患者のようにとろりと潤んでいる。

(ママは自分のお臀を鏡に映している……)

高価な絹のパンティが、繊細な衣ずれの音をとめないながら滑り落ちた……。

「ああ……」

鏡のなかには、いまや覆うものないヒップが映し出されている。菜穂子の臀丘は、量感において美夏絵のそれにはおよばないが、白桃のような豊麗さ、まるやかな官能味、そして吹出物ひとつないミルクホワイトの肌の美しさでは勝るとも劣ってはいない。

「いけない女ね、菜穂子……」

ひとしきりまる出しにした双臀を淫らにくねらせていたスリッパ一枚の年増美女は、そう呻くように言つと、右手に持っていた乗馬鞭で、自分自身のヒップをうち叩いた。

「悪い女はこうしてやる」

バシッ、ピシッ。

姿勢からして無理があり、力をこめて打てないが、いかにも弾力性を感じさせる脂肪は小気味のよい音を弾かせ、サツと赤みを帯びた筋状の鞭跡が白い肌に浮きたってくる。

(そんな……。自分で自分を鞭打つなんて……!)

悠は思いがけない母親の自虐行動を、痺れたようになって眺めていた。

「はあっ、はっつ。……っつ!」

唇を噛みしめ眉をひそめ、自分で自分に加える苦痛をこらえる表情がぞつとするほど凄艶で、悠は男根が極限までいきり立つのを覚えた。分身を握りしめ、しごきたて、若い牡は孤独な快美の呻きを洩らす。

「あ、ああっ」

ひとしきり自分の臀をいためつけていた女は鞭を捨てた。ベッドの上につぶせに倒れこむ。スリッパの裾は腰の上までまくりあげられたままだ。右手が体の下になり下腹をまさぐる動きをはじめた。

(オナニーだ……!)

悠が見守るなか、未亡人はふだんの優雅さをふり捨て、牝の獣と化して、赤く腫れあがったヒップを淫靡にくねらせながら、啼泣するような声を洩らしつつ、自分を孤独なオルガスムスへと追いつめてゆくのだった。

「ひ、ひいっ!」

断末魔のような鋭い声をあげた母親がぶるぶると体を顫わせて絶頂した。同時に、

「あ、うっ。ママ……!」

息子もしごきたてていた男根から獣欲を溶かしこんだ夥しい精液を噴出させた。

それまでの数夜は毛布を重ねたくなくなるほど冷え冷えとしたのに、その夜に限っては、じっとり蒸し暑く、気温が高かった。

「なんだか肌がベトベトして、気持ち悪いわ……」

夜、睡眠薬を服んだ母親が熟睡するのを待ちかねるように、好色な美少女は兄の寝室へやってきて、ベッドにもぐりこんできた。悠はふっくらしたヒップを撫でてやった。

「今日、ママにお仕置きされたんだろ？」

「あれっ。知ってたの？」

「ああ。食事のとき、椅子の上でお尻をもじもじさせてたじゃないか」「うん……。今日は鞭だったの。痛かったわぁ……」

麻耶はそのときの苦痛を思い出したように眉をひそめてみせた。もちろん、折檻される一部始終を兄が屋根裏部屋から覗き見ていたとは知るよしもない。

「どれ、見せてみる」

「いやだあ」

羞ずかしがりながらも妹は四つん這いになってベビードールのネグリジェの裾をまくりあげ、後ろから覗きこむ兄にパンティをひきおろして臀をさらけだしてみせた。

つやつやしてむき卵のように光沢のある肌の表面に、まだところどころ赤や紫色がかかった鞭痕が残っている。

「へえ、ずいぶんひどく叩かれたんだなあ」

しかし、若い肌は回復がはやいのか、思ったよりひどい有様ではない。悠は鞭痕の上に唇を押し当て若い牝の匂いを嗅いだ。麻耶の手がのび、悠の下着をひきおろし、バネ仕掛けのように勢いよく飛び出した欲望器官を握りしめる。

「わ、こんなになって……。麻耶がお臀を叩かれた話を聞いて昂奮してるのね」

それから目をキラキラ輝かせて、

「ね、悠兄さん。女の人がお臀を叩かれたりするのを見ると、昂奮する？」突然訊かれて悠は思わず本音を答えた。

「うん……」

「そつ、やつぱり……」

「なにが“やつぱり”なんだ」

「圭兄さんもね、そんな趣味があったの」

前にも麻耶の口から聴いたように、亡父の黒須京伍はスパンキングを好んだ男だ。だから妻の菜穂子も、子供たちも、なにか失敗したり彼の気分を害したりすると、容赦なく臀を打たれる折檻を受けた。

しかし圭は男の子ということもあって、中学生になってからは屈辱的なお仕置きを受けることはなくなった。

だが、日常的に美しい母親や可憐な妹が臀をまる出しにされて叩かれる姿を目にしていたためか、あるいは父親の偏奇した欲望を血のなかに受け継いだせいなのか、彼もまたスパンキングに異常な興味を示すようになったのだとついで……。

「だから、わたしがママに、ママがパパにお仕置きされているときなんか、圭兄さんったらこつそり物陰から見てたのよ……」

「へえー……」

そんな圭を、悠は非難できない。自分も同じ行為に夢中になっているのだから。

「あ、悠兄さん……。こんなになっちゃって……。エッチねえ」

くすくす笑いながら麻耶は兄の下半身を剥き出しにしてその前に跪き、可憐な唇をOの字にあけてドクドクと脈打つ肉の砲身をすっぽり含むのだった。

「ねえ、ねえ。見て……。すっごい綺麗ー」

麻耶に肩をゆさぶられ、熟睡していた悠は目を開いた。朦朧とした頭で一瞬、火事かと思った。室内がまっ赤な光線に照らし出されていたからだ。

ハツと飛び起き、それが強烈な朝焼けの光だとわかった。先に起きた麻耶が窓のカーテンを開けたので、世界が炎上したのではないかと錯覚するほどの赤い光が室内に差しこんでいるのだ。

「へえー……」

悠は素っ裸のまま窓の傍へ歩みよった。

天空にかかる鱗雲も、周囲の山々の頂も、落葉松林の樹冠も、地獄の業火かと思まがうばかりの赤色光線に染めあげられ、見慣れた風景がまるでこの世のものではないかのように変化して見える。

風はそよとも吹かず、いつもは早朝の索餌行動で騒がしい野鳥たちも、なぜかひっそりとして不気味なほどの静寂が高原を支配している。

「ねっ、すごいでしょう。麻耶、こんな朝焼け見るの、はじめてだわ……」

麻耶もパンティさえ着けない全裸だ。

「すごいな……。朝焼けというのは天気が悪くなる兆しだろう？　じゃ、

これから嵐になるのかな……」

すると昨日、土屋老人が予言者めいて「台風がこっちに来るかもしれん」と言った言葉を思い出した。

「まあ、悠兄さんったら元氣い……」

まっばだかの兄の下腹で、昨夜、自分の体のなかに二度、牡のエキスを噴き進らせた器官が屹立しているのを見て、麻耶は嬉しそうな笑い声をあげた。いそいそとふたたび兄の前に跪き、

「朝のホットミルク」

やがて悠が噴きあげたものを一滴残らず呑みほし、舌なめずりしてから淫蕩な美少女は笑ってみせた……。

第五章 悪魔の申し子たち

1

昼頃から強い風が吹き出し、低い雲が山脈の上をかすめるように飛びすさった。するうち大粒の雨滴が、まるで散弾銃を連射するような音をたてて窓ガラスを打ち叩きだした。轟々と風が林を薙ぎはらう音がものすごい。

「やっぱり台風が来ましたな。奥さん、今日は出かけないほうがいいですよ。戸締りはしっかりしておいてください」

午後、山荘に顔を出した土屋老人は、女主人にそう注意した。彼の言うとおりだった。気象庁の予報では、停滞していた台風が突然進路を北に向けて疾走をはじめ、しだいに勢力を増しながら本土をめざしている。今夜にも東海地方に上陸する公算が大きいという。

「なあに、この家はわりと頑丈にできてますから心配することはありませんよ。まあ、少しばかり雨漏りするかもしれませんが」

夕刻、強まる雨と風のなかを、土屋老人はそう気やすめを言い残して帰っていった。

「なんだか怖いわねえ……」

見送る菜穂子が、そう不安げに呟いて自分の躰を抱きしめるようにしてぶるつと顫えたとき、電話のベルが鳴った。

それは昨晩のうちに東京に帰った美夏絵からだった。悪い報せだった。

「菜穂子さん？ 本郷のお家からさつき火が出たの。消防と警察の方からいま、こつちに連絡があつて……」

「えっ!？」

菜穂子は顔色を失った。本郷の自宅には高価な骨董、調度品のほか
に亡夫、黒須京伍の遺作が何点か收藏されている。それが焼けたとし
たらとりかえしのつかない損失だ。

「わかったわ。ともかくすぐ帰ります」

一刻もはやく損害を確かめなければならぬ。菜穂子は即刻、軽井沢
を発つ決心を固めた。

しかし、大急ぎで別荘を閉じた三人がアウディに乗りこんだとき
は、空はすでに墨を溶いたようにまっ暗になっていて、風雨はますます
激しくなっていた。

断続的に雨がざあつと横なぐりに吹きつけ、フロントウィンドウの
ワイパーはほとんど役に立たなくなる。菜穂子はキツと唇を噛んでハ
ンドルにしがみついている。

（しかし、誰もいない本郷の家からどうして火が出たのだろう……？）

悠は対向車のヘッドライトに照らされて浮かびあがる青白い母親の
横顔を助手席から眺めながら、不思議に思った。浮浪者の仕業かそれ
とも誰かの悪戯なのか……。

軽井沢から東京へ向かうには、国道十八号線の碓氷バイパスを降り
て高崎から関越自動車道に出るのがもっとも一般的なルートだ。しか
し南軽井沢のバイパス分岐点に近づくと、パトカーが赤いライトを点
滅させて交通を遮断していた。

「バイパスは土砂崩れの危険があるので、雨がやむまで閉鎖されます」

警官に告げられて菜穂子は困惑した。

「仕方がないわ。それだと旧道を降りるしかないわね」

ところが、そちらのルートも数カ所で崖崩れが起き、不通になった
ばかりだという。

「弱ったわ。どうしようかしら」

こうやってたら車をおいて電車で帰ったほうがはやいと判断して、軽
井沢の駅へつけた。駅の待合室は電車に乗れない人びとでごった返し
ていた。新幹線は横川で起きた架線事故のため、まったく電車が動い
ておらず、復旧の見込みもたないという。

主要ルートを遮断されたドライバーたちのうち、帰りを急ぐ者は野
辺山を経て中央高速道へ出るルートに殺到したが、この雨とひどい渋
滞でどこまで進めるか、皆目見当がつかない混乱状態だという。

「とにかく、もう一度東京へ電話してみるわね……」

近くのレストランに入り、公衆電話にしがみついた菜穂子は、やがて少しばかりホツとした顔になって戻ってきた。

「美夏絵さんが本郷のお家まで飛んで行って、様子を見てくれたの。火はお台所の外の物置から出たらしくて、そこはひどく焼けたけど、建物のほうは壁が焦げただけらしいわ。もちろんお父様の絵やなんかも無事だというし……。だから無理して今夜じゅうに東京に帰る必要はないって美夏絵さんも言うの。別荘に戻って明日、出なおしましよ。この台風が通り過ぎないとどうにもならないわ」

悠のホツとした。前も見えないほどの雨のなかを走るのは気がすすまなかつたからだ。

食事をすませた三人はまたアウディに乗りこんだ。山荘への舗装されていない道はまるで川のように水が溢れ、菜穂子は必死でハンドルと格闘しなければならなかった。

ハイビームのヘッドライトに照らしだされる周囲の樹々は、荒れ狂う風に揉みくちやにされ、暴れ狂う怪物のように枝をふりまわしている。まだ居残っている別荘はしっかりと雨戸を閉ざして灯火も見えない。

「あら」

山荘へのカーブをまわりきったとき、菜穂子が驚いたような声をあげた。

「門の扉が開いているわ。しっかりと閉めたはずなのに……」

しかも、玄関の前に車が一台駐まっている。グレー塗装のトヨタ・パジエロだ。玄関の扉は開けられてなから明かりが洩れている。誰かが彼らの留守にやって来たのだ。

「土屋さんが見まわりに来てくれてるのかしら……？ きっとそうかわ」

こんな風の夜にここまでやってくる人間などほかには考えられない。

（おかしいな……。土屋の爺さんは軽ワゴンを運転していたはずだが……）

とにかく菜穂子はパジエロの横に車を停めた。悠は、蛇のように黒々と濡れて光るものが地面を這っているのに気がついた。

（これは、工事用の電源ケーブルだ……）

そのケーブルは庭を横ぎって林の向こう、京伍のアトリエのあった

ほうへと伸びている。横なぐりの雨の膜の向こうに、悠はランプの明かりに照らされて黒い人影が動くのを見た。

(この嵐のなかで、なにを……?)

彼は母親と麻耶に叫んだ。

「誰かがぼくらの家から無断で電気をとって、あっちでなにかやっているんだ。二人とも車のなかについて。ぼくが様子を見てくる……」

菜穂子が制止するまもなく、悠は雨のなかに飛びだした。たちまちのうちに下着までずぶ濡れになる。

(誰がなにをしているんだ？ 勝手に人の家の敷地に入りこんで……)

怒りを覚えた悠が、小走りに明かりの見たほうに向かってゆくと、人影がかき消えた。

ズシン！

闇のなかにパツと閃光が走り、ふいに大地がグラリと揺れた。ついで衝撃波が悠の体を後ろへ叩き飛ばす。

(落雷!?)

そう思った瞬間、頭に強い衝撃を受けて、少年は意識を失った。

2

悠は徐々に意識を取りもどした。
「うーん……」

最初に感じたのは割れるような頭の痛みだった。頬を生暖かいものが濡らしている。

彼は努力して目を開けた。世界は薄ぼんやりとして、しかもぐるぐるまわっている。悠は船酔いにも似た吐き気を覚えた。

(どうしたんだ、ぼくは……?)

ようやく、閃光の記憶が甦った。

(なにかが爆発し、吹き飛んできたものが頭に当たったんだ……)

彼の体は絨毯の上に横たえられている。菜穂子たちが山荘のなかに引きずりこんでくれたのだろうか。

しかし、起きあがろうとした悠は、自分の体の自由がきかないのに

気づいた。しっかりと手足を縄で縛られている。

(ど、どうしたんだ!?)

驚いてもがくと、頭の上で声がした。

「坊や。目がさめたようだな」

別の男の声で、

「まったく、運のいいガキだぜ。コンクリートの塊でぶん殴られて、気絶しただけですんだんだから……」

ようやくのことで悠は顔を上げ、自分を見下ろしている男たちに目の焦点を合わせた。

「あつ。あんたたちは……」

石堂健介とバート中津だった。二人とも工事現場の作業員が着るような雨合羽を纏い、ゴム長を穿いている。この嵐のなかでなにか作業をしていたらしく、泥だらけだ。彼は玄関ホールの床に転がされている。

悠は思い出した。ホテルのティールームにいた彼らはなにを話していたか。

「じゃ、あれはダイナマイトを……」

思わず口走ると、石堂の太い眉がピクリと吊りあがった。

「よく知ってるな、坊や。そつさ。おれたちがマイトを仕掛けて点火したとき、おまえが走ってきたんだ。あと一秒、点火が遅かったら、おまえはあの世まで吹っ飛ばされてたところだ」

「なぜなんだ。なぜ、こんなところでダイナマイトなんか……」

「それを一番知られたくなかったが……」

美貌の未亡人にしつこく言い寄っていた男は苦笑いした。悪役俳優としてけつこう名を売った男だが、その笑いの奥にはなににか人の背筋をぞつと冷たくするような凄味があつた。

「せつかく、遠ざけようと東京の家に放火までしたのに。まさか戻ってくるとは……」

では、放火犯は彼らだったのだ。

悠はなにがなんだか訳がわからない。どうして石堂とバート中津が組んで、菜穂子の家に火をつけたり、ここでダイナマイトを爆発させたりするのか？ 悠は叫んだ。

「どうしてぼくは縛られているんだ。ほどこくね……!」

「そうはゆかん。おまえもママさんも、可愛い妹も、おれたちの秘密を知ってしまったからな……」

言われて悠はハツとした。首をねじると、菜穂子と麻耶も縛りあげられて玄関ホールの床に転がされている。二人とも唇にしつかりと布片を詰めこまれ、声の出ないようにタオルなどを口に押しこまれて猿ぐつわをされていた。

「とにかく、詳しいことはあとだ。この嵐が吹いてるあいだに仕事を片づけてしまわなきゃならんからな。終わったら説明してやる」

かつて極悪人の演技をやらせたら右に出るものがない、と言われた男は、唇を歪めるような笑みを残して、バート中津を促した。

「坊やおとなしくさせろ」

元カーレーサーはつかつかと麻耶に近寄ると、いきなり彼女の足を持ちあげ、白いソックスをむしりとった。

「あ、ぐぐ……」

びつくりして猿ぐつわの奥で悲鳴をあげる少女。

「ほう、おいしそうな体してるな」

暴れた拍子に夏のドレスの裾がめくれて若鮎のようにびちびちした躍動感を秘めた脚線が太腿の付け根まで露わになると、バート中津はいやらしい笑いを浮かべた。

「仕事が終わるのが楽しみだぜ。とんだご褒美が舞いこんできた……」

(こいつら、あとで菜穂子ママや麻耶を……)

強姦する気だ　と悠は直感した。男たち二人の体からは殺気と同時に野獣の凶暴さがめらめらと発散している。

悠は妹の穿いていたソックスを口のなかに押しこまれた。その上から菜穂子のスカーフでしつかり猿ぐつわを噛まされた。

「じゃ、待つてろよ」

縛りあげた悠たちを残して、男たちは嵐の吹きまくる外へと出ていった。

(畜生、これじゃ文字どおり手も足も出ないや……)

悠はしばらく縄と格闘してみたが、手際よくしつかりとかけられたナイロン・ロープはまったく緩む気配がない。しかも後ろ手に縛った縄尻がホールの中央の柱にくくりつけてあるので、階段の柱に両手を伸ばすようにして縛られている母や妹のところへも近よれない。

菜穂子も麻耶も、かなり抵抗したらしく、夏服はびしょ濡れで、ポタンはちぎれ、泥にまみれて無惨なありさまだ。

「う……」

「む、ぐ……」

二人とも悠に声をかけようとするが、口のなかに押しこめられた布片のせいで、声は言葉にならない。たぶん、頭から血を流している悠のことを心配しているのだろっ。

「だいじょうぶだよ」

女たちを元気づけようと、悠はうなずき、目で笑って見せた。とにかく男たちがふたたび戻ってくるまでどっしりようもない。

ズシン！

しばらくして爆発音がし、古びた洋館のガラスがびりびり振動した。

（また、ダイナマイトを使ったな……）

もしふつうの日にそんなことをしたら、たちまち大騒ぎになるにちがいない。しかしいまは猛烈な嵐が吹きまくり、近在の別荘は、どこもすっかりと雨戸を閉ざしている。爆発があっても気がつくとは思えなかった。

（そうか……）

ホテルで盗み聴いた会話のなかに、「嵐でもくれれば……」という石堂の言葉があったのを思い出した。彼らは前からこのチャンスを狙っていたのだ。まず本郷の家に放火して菜穂子たちを東京へ帰らせ、嵐を利用してダイナマイトの作業を行なう……。

（あいつら、アトリエの土台を壊すのが目的なんだ……）

しかし、なぜ分厚いコンクリートスラブを破壊しようとするのか、理由がわからない。

また激しい頭痛が襲ってきて、悠は目を閉じた。耳のなかで必死にホテルで耳にした会話を甦らせる。

（バート中津は、「あのガキは、たまたま運がよかったんだ。兄貴のほうはうまくやったじゃないか」と言っていた……）

ハッとして目をみひらいた。

（なんてことだ。あれはほんと圭兄さんのことを話していたんだ……）

「やった」とは、「殺った」という意味にちがいない。

「くそ」

悠は呻いた。

（バート中津の顔をはじめて見たとき「どこかで見た」と思ったのも当然だ。あいつ、ぼくをはねとばしたパジエロを運転していた男じゃないか！）

サンバイザーで顔の半分が隠れていたが、それでも顔の輪郭を記憶していたのだろう。いま、山荘の前に駐められているパジエロがあのときの車にちがいない。

（だとすると、圭兄さんも……。碓氷峠の旧道で起こした事故は、バート中津がしかけたのか……！）

バート中津はプロのレーサーだった。いくら圭の運転技術が巧みでも、所詮アマチュアである。急カーブの連続する危険な山道で追われなくてはかなうわけがない。

しかし、ますます悠はわけがわからなくなった。

（どうして圭兄さんやぼくを殺そうとするのだ……？）

いずれにしても二人の男は凶悪な意志をもってなにごとかを遂行している。悠はガタガタ顫えた。ずぶぬれの服のせいではない。恐怖のせいだ。

やがて玄関の扉が蹴りあけられた。

二人の男が泥にまみれた箱のようなものを抱えて入ってきた。

「ここへ置こう」

石堂が指示して、鉄平石を敷きつめたたたきの上に箱を置く。箱の大きさは一辺が五、六十センチほど。ほぼ正方形に近い。

「やったな」

バート中津が雨合羽のフードをはねのけ、満足そうな笑みを洩らした。

「まだ安心するな。長いあいだ地面に埋まっていたんだ。水をかぶっているかもしれない。とにかくドリルだ……」

石堂が命じた。男たちは雨合羽を脱いだ。バート中津は迷彩模様に入った軍用のフィールドジャケット、石堂は狩猟用のコートをなかに着こんでいる。車から電気ドリルが持ち出された。

ギューン！ ガリガリガリッ！

すさまじい騒音をたてて箱に穴が開けられてゆく。悠はようやくそれが、事務室などで使われる耐火金庫だと見わけがついた。

（彼らの目的はこれだったのか……）

どうやら、アトリエを建てるためにコンクリートを流しこんだ分厚い土台の下に、その金庫は埋められていたのだ。彼らは爆薬を使ってコンクリートを割り砕き、その下からこれを掘り起こしたのだ。

（だとすると、金庫はアトリエがつくられる前から埋められていたことになる……）

そんなに前から埋められていた金庫のことを、なぜ彼らは知っているのか。いや、そもそも、いま彼らがこじ開けようとしている金庫のなかにはないが入っているのだろうか？ 見たところそんなに大型のものではない。札束が入っていたとしてもしれたものだ。

（金塊か宝石か……？）

しばらくして金庫の側面に穴があいた。

「やったぞ！」

バート中津が歓声をあげた。

「よし……」

石堂が手を差しこんだ。

「ふむ。たいしたもんだ。濡れてもいない。そのまんま保存されてる」
満足げにうなずいてから中身を引きだした。

すべて封筒や紙の束だ。悠が思っていたような金塊や宝石、札束ではない。

バート中津は封筒の中身を床にばらまいた。写真の束とフィルムのネガを収めたアルバムだった。

「こいつはよく写っている。バッチリだぜ」

淫靡な笑いを浮かべた。

石堂は紙の束を調べている。

（あれはカルテだ……）

悠は病院で使われているのと同じ書類だと見わけることができた。
（だとすると、ここが精神病院に使われていたときの……！？）

「ようし。ここまでは大成功だ」

計画の首謀者らしい石堂は、喜色満面でバート中津の肩を叩いた。

「祝杯をあげようじゃないか」

それから悠たちを見やり、

「こいつらも引っ張ってゆこう」

嵐はまだ轟々と吹きまくっている。しかし鎧戸をしつかり閉ざした室内はむっとするほど暖かい。居間の暖炉にバート中津が火を燃やし薪をくべたからだ。雨合羽を着ていても雨と汗でぐっしより服は濡れていて、それを乾かすために火を焚いたのだ。二人とも上はシャツ一枚になった。男の獣じみた体臭がむっと室内に充滿する。

囚われ人のうち、菜穂子と麻耶の母子は、木製のウィンザー調椅子に座らせられ、あらためて後ろ手に縛りつけられた。猿ぐつわもそのままだ。悠は暖炉の前の床にそのまま転がされた。背中に熱を浴びて濡れた服から湯気が立ちのぼる。

「まずは祝杯だ」

勝手にサイドボードからブランデーとグラスを取りだし、侵入者たちは琥珀色の液体を喉に流しこんだ。

「ふうっ」

満足そうに唸ってソファにどかっと腰をおろしたいかつい体格の男は、椅子に縛りつけられている三人の母子を好色そうな目つきで眺めまわした。

「さあて、おまえたちもどういうことなのか知りたいだろうから、あの世に行く前にみな教えてやろうか……」

三人の顔から血の気がひいた。

(こいつ、ぼくらを皆殺しにする気だ……！)

3

「昔の話からしなければならんな……。とにかくあれは十年、いや十一年も前に始まったことなのだ……」

赤坂に高級レストランを経営し、アメリカにまで支店を出したという壮年の実業家はしゃべりだした。

当時、石堂健介はまだ悪役専門の俳優で食っていたが、ギャラは微々たるもので、先ゆきどうしようか悩んでいた時期だった。

「ちょうどその頃、映画のロケで鬼押し出しまで来たことがあるんだ。おれの出番は初日ですんじまった。ギャラと交通費をもらって軽井沢まで出たが、せっかく来たんだからと思っすこし遊んでゆくことにした……」

しかしシーズンが終わったあとの軽井沢にはなんの娯楽もない。しかたがないのでホテルのバーで酒を呑んでいるとき、ひとりの初老の紳士に声をかけられた。

「そいつ、おれの体格が気に入ったようだ。酒を奢ってくれて、こっちがいい気持ちになったとき、『じつは……』と話を持ちかけてきたんだ」

教養もありそうな紳士の話とは「ある女性のセックスの相手をしてくれないか」という提案だった。

もちろん見ず知らずの男からそんな話をもちかけられて、石堂は仰天した。

しかし、詳しい説明を聞くにしたがってむらむらと好奇心が湧いてきた。

「そいつは、ある精神病院の院長という肩書でな、この軽井沢に分院を開設し、特別な患者だけを収容している」と言った。ハッキリ言わなかったが、患者たちってのは有名人や大金持ち、あるいはもっと高貴な一族の者ばかりじゃなかった……」

そこまでは悠が土屋老人から聞かされたのと同じ内容だ。

「もうわかったらう。その精神病院の分院というのが、この建物だ。おれは院長だという男にうまくのせられて、十一年前のある夜、ここにやってきたんだ」

院長はこう説明したという。

「いま収容している女性患者のなかに、鬱病の治療中に抗鬱剤を投与すると副作用として、性欲が異常に昂進する症状を呈するものがあるんです。その欲望を押しさえつけると、今度はヒステリー症状などが出て、かえって支障がでます。だから私は、そういった場合は患者に自由なセックスをさせるようにしています。問題はその相手です。彼女の場合、かなりタフな男性でないとパートナーとしてつとまらないし、まさか病院の職員が相手をするわけにはゆきませんし……」

ようやく石堂も理解した。一時的に性欲が昂進している女性患者の

相手をして、欲望を解消させ精神を安定させる手助けをしてくれというのだ。しかも、その女性はまだ若く、魅力的な容姿の持ち主だという。

「あんまり話がうますぎて、おれも最初はびびったが、向こうは秘密は守ってくれるというし、タダでいい女を好きだけ抱けるといふんだから、おれも最後には乗ってみる気になった……」

石堂は豪華なリンカーンで院長とともにこの洋館へやってきた。案内された二階の病室で会われた女は、年の頃は三十前後。教養も気品も兼ねそなえた美女だった。院長がいるときは態度もまともだったが、いざ二人だけになると、その女は自分から寝衣を脱ぎ捨て、「抱いて」としがみついてきた。

彼女の欲情の激しさは、体力に自信のある石堂でさえたじたじとなるほどだった……。

「おれは三日間、その女の相手をつとめさせられたよ。毎日、ホテルからここまで外車の送り迎えつきでな。一晩に五、六回はやったかな。最後はさすがにへとへとだった」

聞かされる菜穂子と麻耶の頬が紅潮する。それをおもしろがるように、いやらしい口調で石堂はそのときの行為を念入りに描写するのだった。彼の出入りは秘密にされていた。

「さて、三日めの真夜中のことだ。おれは外の空気でも吸おうと廊下に出た。すると、あの廊下の向こうの階段から、院長がそこそと降りてくるじゃないか。様子からして屋根裏部屋になにかありそうだ」と思い、おれもこっそり階段をのぼって上がってみた。そうしたら……」

悠が発見した例の覗き装置に、記録用のカメラと八ミリカメラ、それにテープレコーダが据えつけられていた。しかも、覗き見た病室のひとつには、彼もよく知っていた大金持ちの子息が入れられていた。

「そいつもまた、女を差し入れられてやりまくってる最中だった。女はどうやら知恵遅れみたいでな、どんなことをされても抵抗しないんだ。院長はそんな女を見つけては、患者にあてがっていたんだ……」

監視装置のまわりに置かれていたカルテやメモの類から、石堂はこの病院に収容されているのは、みな、強度の性欲異常を示す患者だけにのに気づいた。院長はそういった特別の患者の性的行動を観察し、

研究していたのだ。

「で、おれは下に降りて行って、書齋にいた院長を脅かしてやった。治療どころか、おれは実験動物のための道具として扱われたんだ。おとしまえをつける、とな」

院長は石堂の脅迫を鼻でせせら笑った。彼が相手をつとめた女性患者は、さる有力政治家の娘で、その人物がひと声かけるだけで石堂など闇に葬られてしまう」と、反撃したのだ。

石堂は口論しているうちカツとなり院長を殴りつけた。ボクサーの経験もあった男の一撃だからひとたまりもない。初老の院長は吹っ飛び、机の端に頭をぶつけた。

あたりどころが悪かったらしい。彼は口から血を流し、目をカツと睨いたまま死んだ。

「おれは驚いた。とにかく逃げようと思った。院長以外は誰もおれの素性を知らないのだからな。しかし、同時にここにあるカルテや書類が宝の山にも思えた。患者はみな有名人や大金持ちの一族だ。それがここでどんな治療を受けていたか、それを知らされたら腰を抜かすにちがいない。その秘密を守るためなら、どんなに莫大な金でも払うだろう」

院長はカルテや書類、患者の行動を記録した写真やテープなどをすべて備えつけの耐火金貨にしまいこんでいた。その鍵を開けられるのは院長だけが、彼は死んでしまった。

たまたま書きこみをしていた患者の書類だけが机の上にあった。石堂はそれをポケットに突っこんだ。それから中型の金庫を抱えあげた。院長のリンカーンに乗せて、ともかく人目につかないところまで運び、そこでこじ開けようと考えたのだ。

「ところが、おれがようやく玄関まで出たところで、起きてきた職員が院長の死体を発見して騒ぎやがった。車で逃げるのをあきらめて、おれは庭の向こうの林に隠れようと思った。ところが、抱えている金庫が重くてな。さすがのおれも『こんなものを持っていては捕まる』と思った。そのときだ、藪の陰になっていたなにかに足をとられてひっくりかえったのは……」

起きあがって見ると、それはもう使われていない古井戸だった。板で蓋がされていたが腐って穴があいていた。石をほうりこんでみると

水の音はせず、意外に浅いところではねかえる音がした。長いあいだに土砂で埋まってしまったのだ。

(夜泣き井戸か……)

悠は土屋老人に聞かされた、この土地の伝説を思い出した。

「これだ、とおれは思ったね。その井戸の蓋を開け、金庫を落つことし、上から木の枝や草をやたらかぶせてわからぬようにして、また蓋をかぶせて元通りにした。誰もそのなかを探さないだろう」という確信があった。それぐらい藪で覆われていたんだから。それで身軽になったおれは、上の林道からさらに峰を越えて、群馬県まで逃げた。とにかく逃げのびることは成功した。あとはほとぼりの覚めるのを待つて戻ってきて、金庫を取り戻せばよかった」

しかし、東京に帰ったとたん、石堂はある暴力団とのトラブルで日本を追われ、それが解決するまで一年以上もフィリピンで過ごさなければならなかった。

「ようやくヤクザと話しあいが出てきて、おれは日本に帰ってくることでできた。一文なしだったから、病院から逃げる時、ポケットに突っ込んで持ち出したひとりの患者の分の書類をコピーして、家族のもとへ送ってやった。いやあ、こっちがびっくりするほどうまくいったぜ！ 相手はなにも言わずに言われたとおりの金を払った。並の額じゃないぞ。おれが赤坂でレストランを開くことができるくらいの金を、ボンと払ったんだからな……」

味をしめた石堂は、恐喝のネタがつかまっている金庫を手に入れるために、軽井沢へ戻った。しかし、現場に来て驚いた。

「おれが一年こられなかったあいだに、この洋館が人手にわたっていたのさ。もちろん、買ったのはおまえたちの親父だ。黒須京伍って男だ。……それはいい。別荘なんて一年の大半が留守だ。誰もいないときに行って井戸を開ければいいんだ。ところが、その井戸の上に、なんとアトリエが建ってるじゃねえか……」

これでは手が出ない。すくすく石堂は東京に帰るしかなかった。さいわいレストランの経営は順調で金策に困ることもなく、とうぶんのあいだは恐喝に頼る必要もなくなった。

「それでも頭のなかではいつもあの金庫のことを思っていた。あれをとり戻せたらおれはたちまち大金持ちだってな……」

だから暇があると石堂は軽井沢に来て、黒須京伍のものとなった洋館のまわりとつろついで、なんとか金庫を取りもどす方法はないかと考えた。

「しかし、他人の土地に埋まっただけで他人の家がその上に建ってるんじゃない、どうしたってダメだ。しかたがない、おれは当たって砕けると思っただけ、ある日アトリエを訪問したよ。そして黒須って画家に『この土地を売ってくれ』と頼んだね。ところがおまえらの親父はこの土地が気に入ってるから売るつもりはないって言う。まったく手も足も出なかった……」

そこまで話してひと息つき、琥珀色の液体をさらに啜って、石堂はひたと美貌の未亡人を見つめた。すると悠が驚いたことに、菜穂子の頬から血の気が失せ、次の瞬間、耳たぶまで真っ赤になった。

淫靡な笑みがレスラーのようにいかつい肉体の持ち主の顔にひろがった。

「ここから話は妙なほうに展開してゆくんだ。黒須って画家は変わった男でな、おれの躰がギリシア的だとか何とか言っただけながら、おれを迎え入れるんだな。なんだかわからんが仲良くなって損はないと思っただけだからおれは中に入り、そこらへんにある絵という絵を全部ほめちぎった。まあ、たいてい裸の美人を描いたものだったからおれにも理解できたよ。それであいつも喜んで、酒など出していっしょに呑むことになった……」

菜穂子が縛られたままモジモジした。顔はふたたび青くなり、さらに赤くなる。精神的に動揺をきたしているのはあきらみかねた。

猫が鼠をいたぶるような残忍さを秘めた笑いを浮かべつつ、石堂は話しつつづける。

「しばらくして、ようやくそいつの魂胆がわかった。向こうから言ってきたのさ。『おれの女房を抱く気はないか』ってな。いやはやまったく、おれは人の女を抱かされる運命にあるらしいな……」

悠も麻耶も衝撃を受けた。父親が、自分たちの母親を石堂に抱かせようとした。などとはにわかには信じられないものではない。猿ぐつわをはめられた麻耶の顔が、

「嘘！」

そう叫んでいた。

「ふふ。驚いたか。だけどおれの言うことは本当だ……」

愉快そうに笑う石堂だ。

当時、異色の画家として名をあげてきた黒須京伍だが、長年にわたる荒淫のせい、持病の糖尿病のせい、急に性欲を失ってしまった。いや、意欲はあるが、男根に力がみなぎらない。いわゆるインポテンツ症状を呈して性交が不能になってしまったという。

「男のモノが立たないと画家としての意欲にも欠ける。やっこさんとしては必死なわけだ。そのとき頭に浮かんだのが、てめえの恋女房をおれに抱かせる。ってことさ。人間ってのは不思議なもんでな。自分の女が他人に抱かれるのを見ると、たいていの男が怒りもするが、同時に昂奮もする。そういうもんだ」

共同経営者であり、犯罪の共犯者でもあるバート中津は、相棒のきわどい話に自分も欲情をそそられたらしい。椅子に縛られた美少女の背後から近寄ると、髪や首筋、胸などを淫らな手つきで触りはじめた。

まっ赤になって身悶えする少女だが、がっちり椅子に縛られているので抵抗のしようがない。悠はバート中津の股間が膨張してるのを認めた。

(くそ……！)

悔しそうな顔をする悠を嘲笑するようにして、石堂は続けた。

「で、おれは言っちゃった。『あなたの奥さんがどんな女かによりますね』とな。そうしたら『ここに描かれてる女は、みな、女房がモデル』だって言うじゃないか。おれはたまげたね。あそこもとたんに勃起した。こんな女とやれるんなら文句はない。もちろんおれはウンと言った……」

その頃、菜穂子は週末になると軽井沢へ来て夫の面倒を見ていた。そればかりではなく、アトリエではヌードになり、モデルとして夫のためにポーズもとった。石堂はさっそく次の週末にまた軽井沢の京伍のアトリエを訪ねた。

「そこでおまえとはじめて会ったんだっとな。いやあ絵よりも気品があつて、まるで王女かなにかみたいな美女だ。おれはぼーっとなったよ、正直な話」

石堂の言葉に、菜穂子はますます真っ赤になりうつ向いてしまつた。

このとき、菜穂子は夫のたくらんだ奸計に気づかなかつたようだが、しかし、酒の入った石堂が迫りだし、それをニヤニヤ笑いながら制止しようとしないう夫を見て、ようやく必死になつて逃げようとした。石堂は獣と化した。

「あのときはすごかつたなあ、え、菜穂子奥さまよ。おまえさんはアトリエじゆうを逃げまわつた。おれは追いまわしながら服や下着をはずたずたにして、だんだん裸にしていつた。最後に暖炉の前に組み敷いて、抵抗できないように縛りあげて犯した。前から後ろから、何度もな……」

最初は犯されつつも抵抗していた夫人は、やがて突きまくられるうちに快感の呻きを洩らし夥しい愛液を溢れさせた……。長いあいだ欲求不満だった女体は、とうとう石堂の逞しい肉体に責め苛まれながら何度も絶頂し、歓喜の叫びを放つた……。

「それから、毎週のようにアトリエで同じことが行なわれた。おまえは最初はいやがつてるふりをしながら、それでもちゃんと軽井沢までやってきた。おれに姦られるために特別にセクシな下着を着けてな……」

屈辱の涙を流す菜穂子の肩がひくひく顫えている。男たちはみな、石堂もバート中津も、そして悠さえも激しく勃起していた。

そうやって黒須家のなかに入りこんだ石堂は、毎週のように魅力的な夫人の肉体を夫の目の前で玩んだ。もちろん、それを見て男根に力をみなぎらせた京伍は、石堂が屈伏させたあとで妻の肉体に挑みかかるのだつた。

「そうそう。おまえのおやじというのはもっと変態でなあ。女のケツをひっぱたくのが大好きだよ。よくおまえをアトリエの梁からぶら下げ、おれに鞭で打たせたもんだ……。ときには二人でかわるがわる、前と後ろから鞭で打って、最後は同時にサンドイッチで犯したもんだ。

膾と肛門と両方に入れられて、おまえは白目を剥いてよがった……。な、覚えているだろっ?」

悠は石堂の口から語られる言葉をすべて信じないわけにはゆかなかつた。たしかに黒須京伍は、そういう猟奇の変態的なことに耽溺する性格の持ち主だ。自分の性欲を昂進させるために、それぐらいのことは平気でやったにちがいない。

「おまえの肉体に溺れながらも、おれは金庫のことを忘れたわけではなかった。そのうち、あいつはアトリエで仕事しながら酒を呑み、酔っぱらって寝てしまふ習慣があることに気がついた。そこである夜、おれはこっそり軽井沢まで出かけ、おまえのおやじが酔っぱらって寝こんだのを見て石油ストーブを蹴たおしてやった。まあ、死んだら死んだでかまわないが、ようするにアトリエが邪魔だったから焼いてしまいたかったのさ。そうすれば井戸を掘りおこせるからな」

(じゃ石堂が親父を焼き殺したのか……!)

悠ははじめて知らされた重大な真相に愕然となった。黒須京伍は二人目の犠牲者だったのだ。

しかし、石堂のもくろみは失敗した。京伍を焼き殺したのち、そしてぬふりでアトリエの焼跡にやってきた彼は、敷地全体が分厚いコンクリートで覆われているのを見て愕然となった。湿気を遮断するため、京伍が命じてそのような工法をとらせたのだ。

「あのときはさしものおれもガックリきたぜ。まるで要塞なみにセメントを流しこんであるんだからな……。とてもこっそり掘り出すなんてことはできない。残るは合法的に土地を自分のものにするということしかない、ってことになった」

しかし、夫の死後も菜穂子はこの土地を手放す気にならなかった。

石堂はしつこく売却を迫った。アトリエの部分だけでも買い取りたいと申し出たが、それも断られた。

「そうするうちに、おれのケツに火がついてきた。アメリカに店を出してバートにまかせたはいいが、そっちのほづがうまくゆかず、たちまち借金の山さ。おれは焦った。で、おまえに結婚を迫ったのさ。結婚しちまえば自分の土地なんだからなんともできるからな。それに、亭主が死んでからも何度もおれと会ってたからな。この肉体に惚れた弱みで結婚をオーケーすると踏んでいたんだが……」

しかし、興信所の調査で石堂のうさん臭い過去を知った菜穂子は再婚を躊躇うようになった。焦った石堂は、さらに過激な手段を用いることにした。

「おまえの息子の圭に死んでもらうことにし。あいつは、この別荘を売るのにずっと反対していたからな。あのガキはスポーツカーを乗りまわしては悦にいつてたが、短気なくせに運転のテクニクは未熟だった。だからバートに頼んであいつと競りあわせてんだ……」

「簡単なもんだったぜ。ケツからあおりたてたら、たちまち頭に血がのぼりやがって、おれが軽く追い抜いてやったら気が狂ったみたいに追っかけてきた。あとは一番危ないカーブのところで抜かせてやるだけでよかった」

麻耶の胸をはだけ、ブラジャーに包まれたふくらみを淫らな指で揉みながら、日系二世の元カーレーサーは自慢した。

「……！」

悠はすでに気づいていたが、菜穂子と麻耶にとっては初耳だった。殴られてもしたかのように母親は体を硬直させた。

「あれでおまえはショックを受け、弱気になるはずだ。別荘に執着していたガキもいなくなった。そこでおれのプロポーズを受ける気になるか、妙なケチのついた別荘を売ってしまうか、どっちかだと思っただが……」

今度は悠のほうを見た。

「またヘンな邪魔が入りやがった。つまり、このガキだ。突然、養子にやったガキが戻ってきた。とたんに奥さまは元気を取りもどして別荘を売る気をなくしてしまった。おれもいかげん頭に來たぜ。」

こうなつたら毒をくらわねば皿までだ。またバートに殺らせることにした。奴はうまく林道で車をぶちあて、おまえを崖から落っことした。ところが……」

腹たたしげに石堂は縛られて転がされている無抵抗な少年の腹を蹴った。苦痛に悶える悠だが、

（それで、ぼくは狙われたのか……）

ようやく、襲われた理由がわかった。

あの井戸の祟りを菜穂子の耳に吹きこんだのは、石堂にちがいない。

京伍、圭そして悠　と次々に死ねば、さしもの菜穂子も弱気になっ

たことだろつ。

「運よく藪にひっかかって助かりやがった。ツイてないってのはこのことだ……」

するうちに、石堂に金を貸していた暴力団関係者が怒りだした。下手をすると赤坂の店も取りあげられたうえ、バートともども消されてしまいかねない。

「仕方がない。こうなったら強行突破だ。ダイナマイトであのコンクリートの土台をぶっ壊してやるつもりで準備した。もちろん爆発音が響くから、それを消してくれる嵐の夜でもなければ不可能だ。そうしたら、ちょうどいいタイミングで台風が直撃するというじゃねえか。おれは東京に飛んでいって、おまえたちの家の物置に火をつけてきた。そうすれば大あわてで東京に帰るだろうと思ったからな。おまえたちは予想どおり別荘をたたんで帰っていった。しかもおあつらえ向きのものすごい嵐だ。ダイナマイトをドカドカやってもこの調子じゃ誰も気がつきそうにない。今度ばかりはツキがこっちにまわってきたと思っただが……」

また腹だたしげに悠を蹴る。傷めた足首を強く蹴飛ばされ、悠は「ぐえっ」と呻き、白目を剥いた。「やめて！」というふうになんか暴れるが、それも空しい抵抗だ。

「マイトを爆発させたちょうどそのときにおまえたちが戻ってきやがった。おかげで、作業のことは秘密にしておけなくなった。しかもこのガキは、どうやらホテルでおれたたちの会話を盗み聞きしてたらしい。だとするともつとやばい。おれたたちのことが警察にばれて、これまでのことを調べなおされてもしたら、おれたちは死刑台に直行だ……」

強靱な筋肉をもった執念深い男は、立ちあがって腕をふりまわした。「だから、おまえたちには死んでもらうのさ。なあに、この嵐で帰りそびれた馬鹿なやつらが気ばらしに入りこみ、おまえたちをさんざん玩具にしたあとで火をつけて殺したふうに見せかければいい。最近の避暑地はそういう事件が多いからな。あのコンクリートの土台に開いている穴は埋め戻しておく。もうなにも埋まっていななんだから心配する必要もないが……。それたちは慎重に計画して、東京に完璧なアリバイをつくってあるんだ。おれたちがここに来ているなんてことは、誰も知らん。あのパジャエ口だつて盗んできたもんだ。つまり、これで

おまえたちをかたづけさえすれば、おれは十年も欲しかった宝の山を手に入れて、あとはなんの心配もないってわけだ……」

沈黙してしばらく外の嵐の音に耳をすませた。轟々と吹きすさぶ風はまだ衰えていない。館の近くに聳えている樅の大木が嵐に揺さぶられ、枝葉がスレート屋根をざあざあと掃く音が不気味だ。

石堂は一人の女を眺め、フランデーの最後の一滴までを呑みほすと、「嵐はまだやみそつもない。あと片づけをする前に、おまえたちの躰をたっぷり楽しませてもらう時間はある……」

5

「おれはこっちの小娘を先にいたただくぜ。生娘を一度犯ってみたかったんだ……」

相棒が話をしているあいだに、乳房から太腿までむきだしにしてしまった麻耶をいやらしく髑つていたバート中津が、血走った目で主張した。

「ふむ。いいだろう。おれはまずこの女に、言うことをきかなかった罰をあたえてやる」

菜穂子も麻耶も、これから自分たちの躰に加えられる凄惨な行為を想像し、まっ青になってぶるぶる顫えだした。麻耶は涙をぼろぼろ流しなにか訴えようとするが、口のなかに突っこまれた布片が遮って言葉にならない。

「むう、うぐぐ、ぐう」

「うるさい！ じたばたするな」

バート中津は滾る獣欲を隠そうともせず、椅子にくくりつけていた縄をほどき、麻耶を立たせた。たちまち肌にまとわりついていた夏のワンピースは床に落ちる。ブラジャーもすでに筆りとられていたから、身につけているのは白いコットンのビキニパンティだけだ。それはいかにも頼りなげに美少女の腰を覆って、粗野な男たちの視姦から悩ましい部分を守っているのだが、

「邪魔だ」

「バートが力まかせにコムごと引きちぎると、」

「む、ぐぐ……！」

男たちの前で一糸纏わぬすっぱだかにされた可憐な少女は、羞恥で全身を桜色に染めて泣きじゃくる。

「ほら、二階に上がれ。かわいがって極楽に送ってやる。」

くりんとして愛らしい球体をバシバシと残酷にぶたれながら、麻耶は後ろ手に縛られたまま階段を登らされていた。

「じゃ、おまえもだ……」

美しい未亡人も石堂の手で、息子の見ている前でシルクのパンティまで筆りとられ、艶やかな恥毛をさらけ出し、二階へ追いあげられていった。

「お、おお……」

猿ぐつわを噛まされた口の奥から悲痛なうめき声を吐きだし、床に転がされたままの悠を何度もふり返る菜穂子だった。男たちは獣欲を満足させたあと、一階で彼女たちを殺すつもりだ。「これで別れなの」という悲痛な想いをこめた瞳の色だ。

（くそ……。この縄が解けたら……）

悠はなにもせず殺されるのを待つ気はなかった。しかし、どんなに暴れても躰に巻きつけられた縄は僅かに緩んだだけで、ともて自由をとり戻せそうもない。

二階から女たちの苦悶する声が洩れてきた。男たちはそれぞれの部屋に生贄を連れこんで、扉を開けたまま責めたてたのだ。

（菜穂子ママ、麻耶……！ とうにかして助きたい……）

悠は絶望的になる気持ち在必死で励まし、周囲を見渡した。なにか縄を解くのに仕えるものがないかと考えたのだ。しかし、石堂もそんな油断をしていない。彼を縛った縄尻をマントルピースの脇の大理石の飾り柱にゆわえつけてあるので、彼が芋虫のように這ったとしても、暖炉の前から離れられない。

（だめか……）

母親と妹が凶悪な獣と化した男たちの慰みものにされ、泣き叫ぶ声を聞きながら、悠は最後の望みも薄れてゆくのを覚えた。絶望の苦い涙が頬を伝つ。

バチ。

鋭い音がして、悠は首筋に飛びあがるような熱さを感じた。
「あぐ！」

緊縛された体がびくと跳ねた。

暖炉のなかで燃えていた薪が爆ぜ、火のついた木片が、正面に寝転がされている彼のところまで飛んできたのだ。

暖炉にはそのような燃えさしが飛び散るのを防ぐために、鉄製の網スクリーンを立てるのだが、石堂もバート中津もそれを知らなかった。

（くそ。やつらに殺される前に火傷で痛い思いをするとは……）

腹立たしい思いに駆られたが、ふいにただ一つ残されたチャンスに気づいた。

（これだ……！）

彼を縛っている縄はナイロン・ロープだ。丈夫だが、熱には弱い。バチツ。

また薪が爆ぜた。まっ赤に燃えた木片が結うの顔の前まで飛んできた。

（しめた……！）

悠は必死で姿勢をかえ、後ろ手に手首をくくっている縄を、その燃えさしに押しつけた、目が届かないから、勘に頼るしかない。

「あ、あつうつ！」

激痛が走り、ジュツと肉の焦げるいやな音がした。誤って手首の皮膚に燃えさしの火を押しつけてしまったのだ。涙がこぼれる。

だが、それで燃えさしの位置が確認できた。注意深く縄目を押しかけると、化学繊維の溶け焦げる匂いがして、ブツツ。

急に手首の圧迫感が薄れた。切れたのだ。

「やった……！」

いつ、気まぐれに男たちが階下を覗きにこないともかぎらない。悠はすばやく足首を縛っていた縄をほどき、立ちあがった。

「あ、うつ！」

麻耶のソックスを吐き出しながら激痛に呻いた。石堂に蹴飛ばされたとき、一度びびの入った足首の骨がまた痛められたらしい。

「くそ！」

二階からは菜穂子と麻耶の悲鳴が断続的に交錯して聞こえてくる。

悠は石堂と彼の相棒に対して憎悪の炎を燃やした。

（待つてるよ……。おまえたち二人、かならず地獄に送ってやる！）

必死の形相でテーブルに掴まって立ちあがったとき、テラスに面した窓の向こうで、なにかが光った。見ると、土屋老人が庭の夏草を刈るのに使っていた下刈り用の鎌だ。柄は両手で持てるように長く、半月形の刃は研ぎすまされて氷のように輝いている。

悠はそれを手にした。勇気が体に満ちた。

（殺つてやるぞ、石堂……）

体重をかけるとズキンとくる激痛に堪えながら、悠は一步一步階段を登っていった。

「おい、交替しようぜ」

もう少して二階ホールに辿りつくというところで、いきなりバート中津が麻耶の部屋から出てきた。悠はとっさに階段に伏せた。

十五歳の少女を辱しめていた男は、アンダーシャツだけで下腹部は丸出しだ。階段のとは口に悠が身を潜めているのに気づかず、ホールをはさんで斜め向かいの部屋で菜穂子を犯していた男に言う。

「畜生め。あのアマっ子、生娘じゃなかった……」

「ほっ」

驚いたような石堂の声。彼も麻耶がまだバージンだと信じこんでいたようだ。

「まったくいまどきの娘は……。さかりがついた猫みたいに、やりたくなったらすぐやってしまっただなあ」

「よし。じゃ、替わろう」

女主人の部屋から出てきた石堂は、隆々とした筋肉を汗で光らせ、巨大な杭のように見える濡れた男根をゆさぶりながら麻耶の部屋に入っていた。

「このアマ。ガキのくせにもっ男を乳くりやがって……！」

ドアは閉めなかったのだ、怒声とともにピシッという、素手で尻をうち叩く音が悠の耳に届いた。少年は怒りで目の前が瞑くなる。

「ひ、ひいっ」

猿ぐつわは外されている。麻耶の悲鳴があがった。石堂は女体を苦悶させてまた自分を昂らせる気だ。

悠はまず麻耶の部屋に近寄った。手ごわい石堂を先に倒したほうが

有利だ。さいわい、バートがいる部屋の扉は閉ざされているので、彼に見られる危険はない。

「お、おぐぐ……」

ひとしきり臀肉を打ちしばく残酷な音がしてから、少女がなにかにむせたような苦しげな声を出した。悠にはわかった。

（麻耶にペニスをしゃぶらせているんだ）

しばらく粘液の摩擦音がして、

「よし。這え。ケツをあげる！」

ベッドが二人の人間の体重で軋んだ。

「うりゃ！」

石堂が吠えた。

（突き刺した）

悠は自分が挟り抜かれたような錯覚を覚えた。麻耶が、

「ギヤ、アアッ！」

まるで鶏が絞め殺されるような絶叫を迸らせたからだ。

（くそ、殺す気か！？）

妹の絶叫が兄を反射的に行動させた。部屋に飛びこんだ彼が見たのは、石堂が四つん這いにさせた全裸の麻耶の後ろから巨大な男根を尻の割れ目に突きたてている光景だった。

肉の凶器はバートが辱めたばかりの膣ではなく、狭い菊襞の孔

肛門を抉っていた。

「ぐあ……！！」

ずっぽりと根元にまで巨大な肉の凶器をぶちこまれ、緊い肉の通路を切り裂かれる耐えがたい激痛に、少女は尿をしぶかせて失神したところだ。

「こいつ！」

怒声に、石堂はハッとふり返った。

「あ、このガキ……！！」

「死ね！」

両手で長柄の鎌をふりかざした少年が、憎悪の表情もものすごく、刃を一閃させる。それが石堂の網膜に写った最後の映像だったにちがいない。

バシユ！

横なぐりに鎌の刃が、耳のすぐ後ろにあたり、研ぎ澄まされた鋼鉄は皮膚、筋肉、気管、血管、腱、神経叢をスパッと切断して頸椎にガシツと音をたてて食いこんだ。

「ぐげっ!!」

石堂の両目がカツと瞪れ、飛び出しそうになる。口からブオツと鮮血が溢れる。

「この!!」

悠は食いこんだ刃を手前に引いた。全身の力をこめた。

「ぐわっ」

ガリガリと骨を削る手応えがあつて、

ブシュ!

刃が骨を切り離し、大動脈も断ち切った。

ドビュ!

鮮血が奔流となってベッドの上に飛散した。気絶している麻耶の白い裸身もたちまちまっ赤に染まる。

ドウツ。

ズシン!

ヘラクレスのような肉体を持った男は、麻耶のうちこんだ楔から大量の白濁液を洩らしながら斜めに崩れ落ち、床に転落した。彼の頭部はかるうじて薄い皮膚とわずかな腱で胴体と繋がっているだけだ。

悠は鎌を持ちなおし、身がまえた。いまの物音を聞きつけた相棒が、母親の部屋から飛び出してくるかもしれない。しかし、その気配はない。

(よし……)

石堂をやっつけたことよって悠の心理には余裕が生まれていた。なによりも武器を持っていることが力強い。麻耶が気絶しているだけなのを確かめると、菜穂子の部屋へ向かった。

「あ、ああー……!!」

ドアに近寄ると、魂消るような菜穂子の悲鳴が聞こえてきた。

ビシ、バシ!

無残に肉を打擲する音

(鞭打ちだ……)

バート中津もまた、優雅で美しい女主人の肉体をいためつけること

に昂り、耽溺しているらしい。

（問題はいかに不意をつくかだ。そうでないと、ママを楯にされてしまっ……）

そのためには、彼が無防備になる瞬間を狙うことだ。石堂も麻耶の肛門を犯している最中を襲われてなんの反撃もできなかった。獣は交接しているときに一番無力なのだ。

鍵穴からそっつと覗くと、

「あ」

悠の血はまた逆流した。

素っ裸の菜穂子はベッドに仰臥し、両手両足をそれぞれベッドの四隅の真鍮製の柱に縄でくくりつけられている。

残酷で狡猾な日系二世は、そうやって大の字に縛りつけた無防備な女体を、クロゼットから見つけた乗馬鞭で、さんざんに打ち据えているのだ。

乳首、腹、股間、太腿……。最初に石堂が浴びせた鞭の痕の上から、さらに何条もの鞭跡が刻みつけられていく。

「あ、あおお！ ひいつ！」

やはり猿ぐつわを外された紅唇から、絶え間なく吐き出される血を吐くような悲痛な声。

黒々とした秘叢のあわいから尿がまるで噴水のように迸る。たまらずに失禁するほどの凄絶な鞭打ちが続く。

（くそ……、なんて獣野郎だ！）

悠は唇を噛みしめ、チャンスを待った。

やがて悲鳴がやんだ。ベッドが軋み、

「くらえ」

「あっつ」

犯すものと犯されるものの呻きが交錯した。昂りきつた男根が魅力的な柔肉に突きたてられたのだ。

「む、っつ……。おお、よく締まる」

バート中津は歓喜の声をあげ、さんざんに鞭で責めたてた肉体を堪能した。

「あ、あおおっ……っ」

菜穂子の呻き。深く抉られる牝が、意志とは無関係に快美感を味わ

いだしたのだ。

(いまだ……！)

悠はドアに体当たりした。

「な、なんだ!？」

年増美女の裸身に覆いかぶさっていた男は驚愕した。信じられないという目で襲いくる鎌の刃を見、とっさに避けようとした。しかし、彼の牡の器言はしっかりと女体の深部に楔のように打ちこまれていて、痙攣するような熱い粘膜がしっかりと締めつけている。

「わっ」

スバツ。

無意識のうちに庇おうとした両の手から、指が何本も切断されて飛び散り、

ガツ!

刃はまともに正面から喉首に食いこんだ。石堂を襲ったときに刃はかなりこぼれていたが、憎悪のすべてをこめたすさまじい打撃に、頸椎は切断されるというより叩き砕かれた。

「くおお……!」

咆哮しながらバート中津はのけぞり、血飛沫を菜穂子の裸身にどぶどぶと浴びせかけ、グラリと揺れてまっさかさまに床に転げ落ちた。

(やった……!)

転がり落ちた男の肉体は、首から夥しい血を噴き進らせながら、なおもまだひくひくと痙攣した。男根は怒張したままでぶるぶると顫えている。

「うぬ」

悠は憎悪の念をこめて、斧を打ちこむように下腹へ鎌をふりおろした。

ドスッ。

母親を犯した男根がまっぶたつに両断された。ザックリと下腹を裂かれて、

「ぐぶぐぶ」

血の泡を噴いて日系二世の元カーレーサーは絶命した。

「ママ」

悠は下刈り鎌を投げ捨て、ベッドに緊縛された母親の裸身を見やっ

た。

「悠くん……」

顔まで鮮血を浴びた菜穂子は、ぼんやりと視線で息子の顔を認めた。恐怖と苦痛の極限で理性は麻痺し、なにもかも夢だと思っっているかのような表情が、ゆっくり笑みを浮かべた。すべてを受け入れる慈母観音の微笑。

「ママ……」

血で汚れてはいるが、はじめて見る母親のヌードを悠は陶然と眺めた。

「悠くん。ママを助けてくれたのね」

「うん」

「嬉しいわ。きて……」

菜穂子は優しい声で息子を誘った。彼女の下半身は蜜を滴らせ、拗ねるような蠢きを見せている。

「ああ」

悠は血まみれの服を脱ぎ、まっぴだかになった。獣たちに勝利した昂奮と、美麗な母親の裸身をまのあたりにした刺激で、男根はドクドクと滾る血を送りこまれて極限まで膨張し、透明な液が亀頭を濡らしている。

灼けるように熱いそれを片手に握りしめ、悠は仰臥し、大の字に縛りつけられている艶麗な女体の股間に跪いた。覆いかぶさり、まだ充分な張りをもって天井を向いている尖った乳首に吸いついた。彼の躰の奥で獣の心が溶け、甘える幼児のように涙を流しながら思う存分に乳首を吸い、柔らかいふくよかな肉の丘を掌で玩んだ。

「ああ……」

菜穂子は陶然として目を閉じた。血まみれの現実を拒否し、わが子に乳を吸われる甘い快感に身をゆだねる。

「きて。悠くん……」

かすれた声で母親がねだると、

「うん」

悠は灼けた分身を甘い蜜を溢れさせている豊饒そのものの女芯にうめこんだ。

「おお」

喜悅する女体が弓なりにそりかえる。

「ママ……」

悠は母親の子宮に全身を埋没させることを望むかのように、深く深く男根を挿入していった。

6

一時間後、

石堂健介とバート中津の死体は毛布にくるまれ、二階の窓から庭へ投げ落とされた。

二つの包みは、林の奥、昨夜ダイナマイトで割り砕かれたコンクリートの下、深く掘られた穴まで引きずられてゆき、転がり落とされ、上から土砂をかけられ、さらにコンクリートの破片が墓標のように積みあげられた。

（考えてみれば、あの二人はさんざん苦勞して、結局は自分たちの墓を掘っていたわけだ……）

死体を始末しながら、悠は苦笑した。憐愍はない。彼らは自分たちの利益のために、悠の実父を焼き殺し、兄を墜死させた悪漢たちなのだ。

嵐はしだいに鎮まっていた。東の空が白みだす頃までに、盗難車であるパジエロは菜穂子が運転して林道を登り、県境の向こうで沢の下につき落としてきた。もし発見されても、盗難車のなかには山荘や石堂と結びつける証拠はなにもない。

悠と麻耶は殺戮の跡を拭い清めた。血で汚された寝具を焼却炉で焼いた。何人もの色情狂患者の性行動を観察した、ある精神科医の記録のすべても。

鎧戸は開け放たれ、朝の光とともに爽やかな風が入りこみ、生臭い匂いを吹き飛ばしてしまう。

すっかり明るくなってから、土屋老人が軽ワゴン車でやってきた。彼は女主人のアウディを見て、驚いた様子だった。

「まだいらしたのですか。帰るといふ電話をいただいたから、てつき

りもうお帰りになったとばかり……」

「ええ。でも帰り道が全部通行止めになってしまったし、嵐がひどくなつたので、昨夜はこっちに泊まったの」

「はあ……。それは賢明でしたな。あの嵐ではなにが起きたかわかりません。渋滞もひどかったようですし、あちこちで崖崩れなどの事故もありましたからな」

老人にもう少し観察眼があれば、女主人が長袖のシャツブラウスを着、ジーンズのパンツを穿いて肌を極力隠しているのを訝ったかもしれない。あるいは濃いサングラスの下で疲労と睡眠不足を思わせる隈ができていることも……。

しかし、彼の注意はまったく別のところに向けられた。

「あれま。せつかく研いだ刃が……」

下刈り鎌の刃が何箇所もこぼれているではないか。

「あら、ごめんなさい。それ、悠が使って、いためちゃったの」

「はあ、そうですね……。これはひどい。藪のなかの石でも叩いたのかな。お坊っちゃんまは鎌の使い方をご存じないようだ……」

老人が溜息をついたのを見て、母親は胸を張った。

「いいえ、あの子はちゃんと知ってますよ」

そう言つて誇らしげに笑つてみせた。

「はあ？」

老人はその意味を計りかねた。

夏のバカンスが終わつても、黒須家の別荘にはしばしば、土曜の夜になると赤いアウディが駐まり、門燈に灯がともった。

彼らは一泊し、日曜の夜に帰つてゆく。

「仲のよい家族だのう。悠坊っちゃんまが来てから、奥さまもめつきり明るくなった」

仲むつまじく散歩したり、テニスに出かけたりする三人家族の姿を見て、管理人の老人はいつも感心するのだった。

「奥さまに対してもお嬢さまに対しても、じつに優しい。死んだ圭坊っちゃんには申し訳ないが、百倍もよくできた弟さまじゃ……」

しかし、菜穂子の一家とは長いつきあいの土屋老人でも、決してな

にもかも知っているわけではない。

たとえば真夜中に、内装をま新しくし、絨緞まですっかり取り替え、キングサイズのベッドが置かれた寝室で、三十九歳の母親と十五歳の娘が、パンティと赤い靴下留め、黒いストッキングのほかほかに着けないしどけない恰好を十七歳の息子の前でさらしていることなど。

二人の女は少年を「ご主人様」と呼び、彼の命令にはどんなことがあっても服従する。

あの嵐の夜、一匹の獣を屠ったあとで、少年は母と妹に宣言したのだ。

「これからは、ぼくがこの家の主人だ」

女たちは喜んでそれを受け入れた。もちろん彼が暴君と化すのは夜、とくに軽井沢の山荘で過ごす夜に限られているのだが、菜穂子も麻耶も、いつもそのときを待ちかねている。

母と娘は、悠の望むがままに薄い下着をひきおろし、女らしいまるみをたたえたヒップをさらけ出し、かわるがわる、彼の気がすむまでスパンキングを受けるのだ。

「ああ、ああ」

「むうん……」

二人の女の喉から甘やかな苦悶の呻きと嚙り泣きの声が洩れ、寝室は煽情的な牝のかくわしい臭気で満たされる。

そして、白い臀丘をまつ赤に腫れあがせた母親と妹の女芯を、充分に怒張し、テラテラと濡れた若く逞しい男根が貫き、彼女たちにもっと切ない喘ぎと悲鳴をあげさせるのだ。

土屋老人は、こういうことも知らない。

たとえば朝まだき頃、

濃密な霧がかかる山荘の庭、落葉松林の奥で、母と娘が素っ裸に剥かれた裸身を縦の木の枝から下げた縄で吊られ、さんざんに乗馬鞭で臀を打たれているのを。

彼女たちの悲痛な叫びは口のなかに押しこめられたたがいのパンティ
母は娘の、娘は母の　で遮られているが、それでも林に巣をつ
くっている野鳥たちは驚いて鋭い警戒の叫びを鳴きかわす。

やがて一人の裸女は、草に埋もれたようななかに残る厚いコンクリー

トの舞台の上へと追いたてられ、ポツカリと砕き開けられた穴の跡
コンクリートと砂利によって埋めもどされているが、いくぶん盛り
あがったそれは、ある種の墳墓のように見えないこともない に這
わされ、その塚に向かって放尿を強制されるのだ。

「うっ」

「むむ……」

やがて膣と肛門 どちらを辱しめられるかは彼女たちの生理期間
による を強靱な牡の器官が抉り、女たちはまた啼泣ともつかぬ声
を張りあげ、鳴き騒ぐ鳥たちと競うかのようにむっちりした臀をゆす
りたてる。

実父を焼き殺した犯人たちの死体が埋まった土地の上で、実の母と
妹を犯しながら、いちだんと男らしさ、たくましさを身につけてきた
少年は、目のくらむような歓喜の声をあげて、豊饒な女体の肉奥へと
牡のエキスを迸らせるのだった。

この儀式は、雪が降り積もる季節になっても続けられ、来たるべき
夏には、あらたに一人の女 美夏絵と美咲が加わることになる。

(終わり)